

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第6集

椿野遺跡 II

昭和58・59年度都田川河川改修工事（浜松地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第6集

椿野遺跡 II

昭和58・59年度都田川河川改修工事（浜松地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県の埋蔵文化財調査研究・文化財の公開普及活動を主たる事業として発足した財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所は、前身である財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所から事業を受け継ぎ、早いもので一年が経とうとしている。

昭和57年度に刊行された「椿野遺跡Ⅰ」に続き、ここに昭和58・59年度の冬と夏に実施された現地調査の内容をまとめた「椿野遺跡Ⅱ」を世に送り出す運びとなった。この二冊の報告書をもって、昭和57年度から昭和59年度の三ヶ年にわたる現地調査および資料整理事業を完了することになった。

今回報告する内容で注目されるものは、三基の方形周溝墓の発見であり、昭和57年度調査の溝・土坑・住居跡からなる居住域とも含めて、弥生時代後期から古墳時代初頭に都田川の微高地に展開した集落の様相を検討する貴重な調査例となった。また昭和59年夏の調査では、遺跡の西端が検出され、すでに確認されている東端から計測すると、椿野遺跡の東西幅は約140mに及ぶことが判明した。この結果からみて、椿野遺跡はこの都田川の下流域のなかでも大規模な遺跡であることが類推される。

椿野遺跡は規模が大きく、遺構も豊富に発見され、かつ銅鏡も出土していることから、多種多様な在り方が推定される。二度にわたる報告書でも、この遺跡のわずかな部分に触れたに過ぎないといえるのではないか。

広大な遠江地域の歴史の端緒となった浜名湖の奥部の遺跡群の研究は、多くの先駆者の努力により積み重ねられてきた、この報告が今後の調査研究の一助となれば大きな喜びである。

本報告書が刊行されるまでは、事業委託者の静岡県浜松土木事務所、現地調査において各種の応援や支援をいただいた浜松市教育委員会、発足まもない当研究所に対し献身的な指導助言にあたられた静岡県教育委員会に深い感謝を申し上げる次第である。また現地調査から報告書の刊行まで多くの労苦をともにした所員にも深い感謝の念を覚えるものである。

昭和60年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、昭和58・59年度都田川河川改修工事（浜松地区）埋蔵文化財発掘調査に伴う椿野遺跡の発掘調査報告書Ⅱである。
- 2 昭和58・59年度調査は、静岡県浜松土木事務所から委託をうけて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、調査調整機関浜松市教育委員会、調査実施機関財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が担当した。さらに昭和59年度の現地調査については、前年度までの調査組織を引き継ぐ形で、新に発足した財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
- 3 昭和58年度の調査は11月17日から翌年3月13日まで、昭和59年度は7月13日から9月11日の間に実施した。この二カ年にわたる資料整理・報告書刊行は、昭和59年度事業として現地調査終了後から昭和60年3月まで行なった。
- 4 現地調査は、昭和58年度現地調査は財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所調査研究員・足立順司、浜松市教育委員会・鈴木敏則が担当し、昭和59年度は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究員・佐野五十三、浜松市教育委員会・佐藤由紀男があたった。

資料整理・報告書刊行業は、静岡県埋蔵文化財調査研究所・佐野五十三と足立順司が行なった。
報告書の執筆分担は以下のとおりである。

- | | |
|---|-------|
| 第Ⅰ章、第Ⅱ章 | 佐野五十三 |
| 第Ⅲ章第1節、第Ⅳ章～VI章 | 足立順司 |
| 5 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。調査の記録・出土遺物は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で保管している。 | |
| 6 調査にあたっては、下記のような遺構・遺物の標記を用いた。 | |

遺構	遺物
A 横	W 木製品
B 垂穴住居跡	P 土製品
C 祭祀遺構	S 石製品
D 溝	M 金属器
E 井戸	B 玉類
F 土坑・土壙	
G 小鍛冶遺構	E その他
H 掘立柱建物	
P 小穴 (p i t)	土器は番号のみ
X その他	略標記なし

目 次

第1章 はじめ	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第II章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第III章 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	9
第1節 弥生時代～古墳時代の遺構	9
(1) 方形周溝墓	9
(2) 土坑	10
(3) 溝状遺構	21
第2節 出土遺物	31
第IV章 古代の遺物	46
第V章 中世～近世の遺構と遺物	48
第1節 中世の遺構	48
(1) 土坑	48
(2) 小堅穴遺構	48
(3) 溝状遺構	49
第2節 近世の遺構	49
(1) 据立柱建物	49
(2) 桶埋設遺構	50
(3) 溝状遺構	51
(4) 井戸状遺構	53
(5) 穹堤	58
第3節 中世～近世の遺物	58
第VI章 まとめ	65
(1) 遺構について	65
(2) 中世陶器・土器の編年	65
(3) 近世陶器・土器の編年	66

挿図目次

第1図 椿野遺跡の位置と周辺の遺跡

- 第2図 椿野遺跡調査区位置図
第3図 椿野遺跡調査区地形図
第4図 椿野遺跡調査区土層図
第5図 椿野遺跡遺構全体図
第6図 椿野遺跡昭和58年度調査遺構全体図
第7図 椿野遺跡昭和59年度調査遺構全体図（弥生時代）
第8図 1号方形周溝墓実測図
第9図 2号方形周溝墓実測図
第10図 3号方形周溝墓実測図
第11図 弥生時代土坑実測図I（昭和58年度調査）
第12図 弥生時代土坑実測図II（昭和59年度調査）
第13図 弥生時代溝実測図I（SD121）
第14図 弥生時代溝実測図II（SD131・132）
第15図 弥生時代溝実測図III（SD133～136）
第16図 弥生時代溝実測図IV（昭和59年度調査）
第17図 土器集中箇所SX106実測図
第18図 方形周溝墓出土土器実測図
第19図 土坑・溝出土土器実測図I（SD121）
第20図 溝出土土器実測図II（SD121）
第21図 溝出土土器実測図III（SD121）
第22図 溝出土土器実測図IV（SD121・127・128）
第23図 溝出土土器実測図V（SD129・131・132）
第24図 溝出土土器実測図VI（SD132・133）
第25図 溝出土土器実測図VII（SD133・135）
第26図 土器集中箇所SX106出土土器実測図I
第27図 土器集中箇所SX106出土土器実測図II
第28図 銅鏡実測図（昭和57年度出土）
第29図 石製品実測図
第30図 古代土器実測図（壺・瓶類）
第31図 中世土坑SF104・113実測図
第32図 近世遺構実測図（SH101～103・SX105）
第33図 近世桶堀設遺構SX101実測図
第34図 近世溝SD107～110実測図
第35図 近世溝SD117～120実測図
第36図 近世井戸SE101～104実測図
第37図 磁器実測図
第38図 古代末～中世土器実測図I（SF104・113）
第39図 古代末～中世土器実測図II（SF113・SE102）
第40図 陶器実測図
第41図 古鏡拓影図

写真図版目次

- 図版 1 1 昭和 58 年度調査前近景（西より）
2 昭和 58 年度調査弥生面全景（東より）
- 図版 2 1 昭和 59 年度調査前近景（東より）
2 昭和 59 年度調査弥生面全景（東より）
- 図版 3 1 1 号方形周溝墓全景（東より）
2 2 号方形周溝墓全景（東より）
- 図版 4 1 3 号方形周溝墓全景（東より）
2 1～3 号方形周溝墓全景（西より）
- 図版 5 1 SF105 全景
2 SF106・107 全景
3 SF106 土器出土状態
- 図版 6 1 SF115 全景
2 SF115 遺物出土状態
3 SF116 全景
- 図版 7 1 SD121 上層全景
2 SD121 上層土器出土状態
3 SD121 上層土器出土状態
- 図版 8 1 SD121 下層全景
2 SD121 下層土器出土状態
3 SD121 下層土器出土状態
- 図版 9 1 SD131 土器出土状態
2 SD132 全景
3 SD132 土器出土状態
- 図版 10 1 SD133～136 全景
2 SD133 土器出土状態
3 SD133～135 土器出土状態
- 図版 11 1 SX106 土器集中箇所
2 SX106 土器集中箇所
3 SX106 土器集中箇所
- 図版 12 1 昭和 59 年度調査弥生面溝近景
2 昭和 59 年度調査弥生面溝近景
- 図版 13 昭和 58 年度調査中世面全景（西より）
- 図版 14 1 SF104 全景
2 SF104 上層土器出土状態
3 SF104 下層土器出土状態
- 図版 15 昭和 58 年度調査近世面全景
- 図版 16 1 SF113 全景
2 SF113 土器出土状態

- 図版17 1 SD108・111全景(南より)
2 SD108~111全景(北より)
- 図版18 1 桶埋設造構SX106
2 SX106細部
3 SX106掘り方
- 図版19 1 SE101全景
2 SE103全景
3 SE104全景
- 図版20 1 SE102全景(南より)
2 SE102全景(南より)
3 SE102遺物出土状態
- 図版21 1 碓堤全景(西より)
2 碓堤全景(北より)
3 碓堤とSD112の関係
- 図版22 1 柱根遺存状態(中世~近世)
2 柱根遺存状態(近世)
3 天目茶碗出土状態
- 図版23 1 須恵器出土状態
2 志野皿出土状態
3 天目茶碗出土状態
- 図版24 弥生土器1(第1周溝墓・SF103・112・SD121)
- 図版25 弥生土器2(SD121)
- 図版26 弥生土器3(SD121)
- 図版27 弥生土器4(SD121)
- 図版28 弥生土器5(SD121・127)
- 図版29 弥生土器6(SD129・131・132)
- 図版30 弥生土器7(SD132・133)
- 図版31 弥生土器8(SD135・SX106・包含層須恵器)
- 図版32 銅鏡(昭和57年度調査出土)
- 図版33 土坑出土古代末~中世の土器1
- 図版34 土坑出土古代末~中世の土器2
- 図版35 土坑・井戸出土土器
- 図版36 天目茶碗・銭貨

挿表目次

- 表1 弥生土器観察表
表2 須恵器観察表
表3 中世陶器・土師器観察表

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

昭和49年7月、静岡県下を襲った七夕豪雨は浜松市から細江町にかけても甚大な被害を与えた。特に、浜松市から細江町を経て浜名湖に注ぐ都田川では堤防が決壊し、下流域の細江町は大きな被害をうけた。これをうけて都田川の防災工事が策定された。

この工事計画にともない、遺跡が濃密に分布するこの地域において昭和54年に遺跡分布調査が行なわれた。その後遺跡の取り扱いについて、静岡県浜松土木事務所・県教育委員会文化課・浜松市教育委員会による三者協議が行なわれた。この結果、椿野遺跡調査については、昭和57年4月に発足した（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が現地調査を担当することになった。

現地調査は昭和57年から昭和59年の三ヶ年にわたり、昭和57年度は12月から翌年3月まで、昭和58年度も12月から3月、昭和59年度のみ約二ヶ月間と短期間のため、7月13日に三者協議を行い、現地調査の準備に入った。発掘調査は、8月1日から人力による作業に入り、9月11日をもって終了した。この三ヶ年で椿野遺跡に140mの東西方向のトレンチを入れたような、新堤築造にともなう細長い調査区での事業を終了した。

昭和57年度調査の資料整理・報告書刊行事業は、昭和57年度末には調査概報が、さらに昭和58年度において「椿野遺跡Ⅰ」として本報告を行なっている。

なおこの椿野遺跡については、都田川河川改修事業関連調査とは別に、昭和56年中部電力鉄塔建設に伴う調査が行なわれ、浜松市遺跡調査会より「椿野遺跡 1982」が刊行されている。

第2節 調査の方法

昭和58・59年度調査区は、それ以前の範囲に連続する長さ約80mの調査区である。調査の方法は、基本的には昨年度と同じ形で実施した。すでに「椿野遺跡Ⅰ」の報告で述べているが、再度調査方法の概略を以下にまとめてみる。

調査区のグリットは、58年度調査区がC・D-8~13グリット、59年度調査区ではC D-14~19グリットであった。このグリットは、南北軸を磁北にあわせ、一区画の一辺10m、調査区の短辺の南北は、南から北へA・B・Cとアルファベットで、長辺の東西は東から西に算用数字で1・2・3と記した。

本遺跡の基本土層については過去二度にわたる調査のなかで確認されている（川江・鈴木 1982、足立 1984）。それらに記された基本的な土層は以下のようであり、今回報告する調査においても基本土層の連続が確認されている。

I層 堤防築造の際の盛土

II層 耕作土

III層 黄褐色管鉄混じり微砂質粘土層、古代～中世の遺物包含層

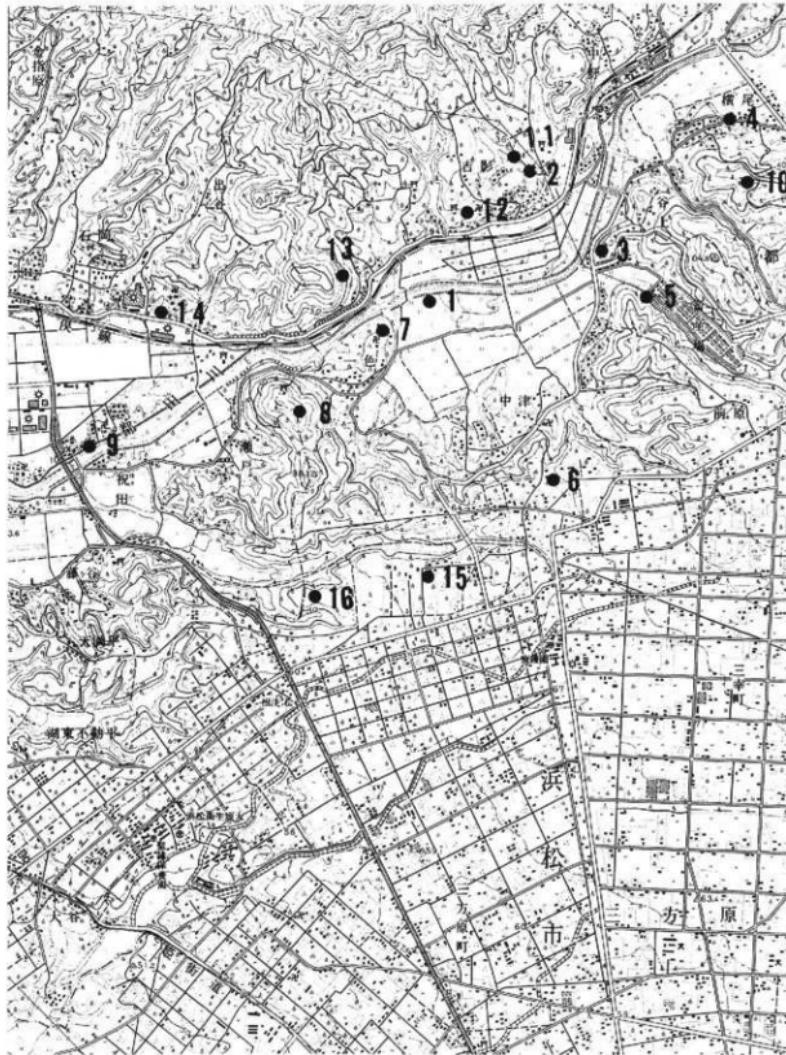
IV層 灰黒褐色有機質粘土層、弥生時代の遺物包含層

V層 黒褐色有機質混じり微砂質粘土層

VI層 黄褐色班鉄混じり微砂質粘土層

このような土層堆積を示すことから、I・II層を重機で除去し、III・IV層は人力による平面発掘を行なった。

調査の記録として、実測図は1/20スケールを原則とし、個々の遺構の遺物出土状態などは1/10スケールで実測した。



- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 1 椿野遺跡 | 7 一色遺跡 | 13 吉影C古墳群 |
| 2 須部神社遺跡 | 8 恩塚山古墳群 | 14 初山窯 |
| 3 向山遺跡 | 9 祝田遺跡 | 15 坂上遺跡 |

第1図 椿野遺跡の位置と周辺の遺跡

写真は、6×7版の中型カメラと35mmの小型カメラを使用した。中型は調査の記録用として、遺構全体や個々の遺構、遺物出土状態の撮影に用い、小型は調査記録の補助用とカラースライド用の写真撮影に利用した。

第3節 調査の経過

昭和58・59年度の事業の内容は例言の3に記したが、ここでは具体的に現地調査経過の概略を以下にまとめてみる。

昭和58年11月17日～12月3日

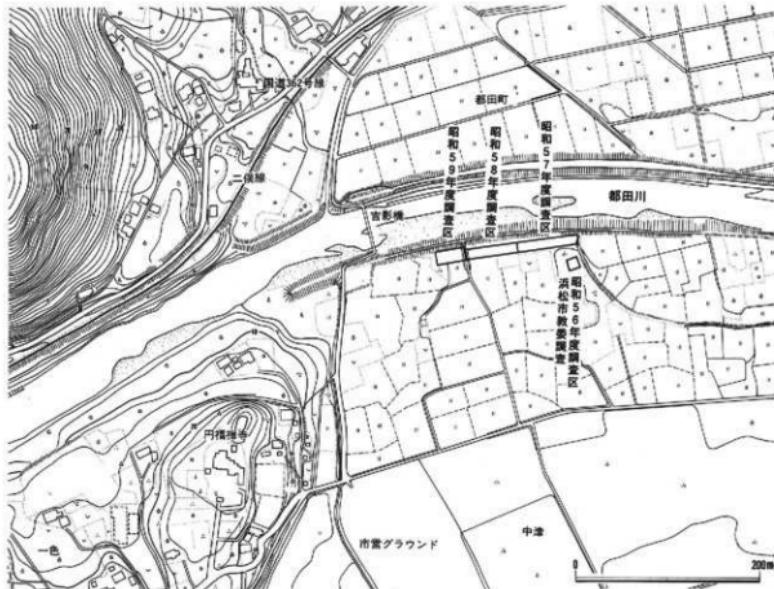
発掘調査に先立ち、現地調査事務所の設営や器材調達・搬入、電気工事等を実施する並行して調査前の写真撮影や、地形測量に先立つ基準杭を設定する。

12月5日～12月9日

重機による表土除去、基準点移動、調査区および周辺の地形測量を行なう。調査区西側に試掘坑二ヶ所を設定し掘り下げる。調査区の表土除去終了時に、集水槽を設置する。調査区の壁際に排水溝掘削、土層断面の観察を行なう。昨年の調査区と同じ上層が連続しており、弥生時代から近世までの各時代の遺物が出土した。

12月12日～12月16日

第1面の調査は包含層の掘り下げ、遺構面の精査から開始した。柱穴状ピット。溝状遺構、水桶埋設遺構（SX101）などが確認される。溝状遺構から中世末から近世初頭と考えられる施釉陶器が出土し



第2図 植野遺跡調査区位置図

た。

12月19日～12月24日

発見された各遺構の精査を実施し、完了したものから写真撮影、実測図の作成を行なう。第1面の精査を完了し全体写真撮影を行なう。12月24日をもって現地調査は年末年始の休みにはいった。

昭和59年1月6日～1月13日

新年は6日から現地調査を開始した。第1面の実測完了部分については、第2面への掘り下げを開始し、未完の部分については実測作業を継続する。第2面では溝状遺構・井戸状遺構・土坑・ピットなどを発見する。第1面同様、中世末～近世初頭の施釉陶器などの遺物が出土する。

1月17日～1月21日

発見された遺構の調査継続。完掘された遺構の写真撮影と実測作業を行なう。井戸状遺構（SE102）からは、近世陶器、かわらけ、皿などが出でる。

1月23日～1月28日

第2面の各遺構の精査完了し、全体写真の撮影を行なう。

1月30日～2月4日

第2面の遺構実測。実測完了した部分から掘り下げを開始する。調査区の西側では古代末～中世初頭の土坑やピットが発見されたので、この面を見を第3面とする。東側では 第3面の遺構は明瞭ではなく、弥生時代～古墳時代初頭の遺構が発見される。

2月6日～2月10日

発掘区東側では方形周溝墓が発見される。2月7日には、所内の現地検討会を実施し、指導をうける。第4面（弥生面）東側では多量の土器を包含した溝状遺構（SD121）の実測を行なう。

2月13日～2月18日

発掘区西側の第3面の調査も終了し、第4面への掘り下げを開始する。C-11・12区北側では、多量の土器を破棄したと考えられる土器集中箇所の精査や溝状遺構の精査を行なう。

2月20日～2月25日

遺構精査と、溝状遺構からの土器出土状態の写真撮影および実測作業を行なう。

2月27日～3月2日

遺構実測を継続しながら、出土土器の取り上げを行なう。

3月5日～3月13日

遺構実測の完了後、第4面の完掘写真を撮影し、3月13日をもって現地調査を完了する。

昭和59年度の調査

昭和59年度の調査は、夏期に実施した。現地調査終了後は、室内にて昭和58・59年度二ヵ年の整理報告作業を実施した。以下にその経過をまとめてみる。

7月13日

調査方法・工程についての三者協議を行なう。浜松土木事務所にて。

7月16日～7月30日

発掘調査の諸準備に入る。発掘区及び排土置場の草刈り、プレハブ設置、土工事等の打ち合せ。

7月30日～8月3日

発掘区の表土除去を行なう。資材搬入・水道・電気・電話工事を実施。8月1日より、人力による調査を開始する。発掘区の壁削り、土層実測・南半の中世ピット実測を行なう。

8月6日～8月10日

南半中世ピット実測、弥生面の遺構検出により、溝・土坑を発見し掘り下げる。平面実測と写真撮影をする。北半中世ピット検出をし、実測後、弥生面まで掘り下げて遺構検出を行なう。溝・土坑・ピットを発見する。B-C-15-16区において、旧河川跡を確認した。翌週は、旧盆の期間のため作業員の出勤がきわめて少ないため、現場作業は休止とした。

8月20日～8月24日

北半遺構堀りを行なう。土器を伴う溝と土坑を検出した。

8月27日～8月31日

北半遺構堀りを継続し、土坑の平面実測、遺構全体写真撮影を行なった。8月31日現地にて、調査終了に伴う三者協議が行なわれた。

9月3日～9月7日

実測・写真撮影の補足作業を行なう。調査区の埋戻し、プレハブ・電話・電気・水道の撤去。

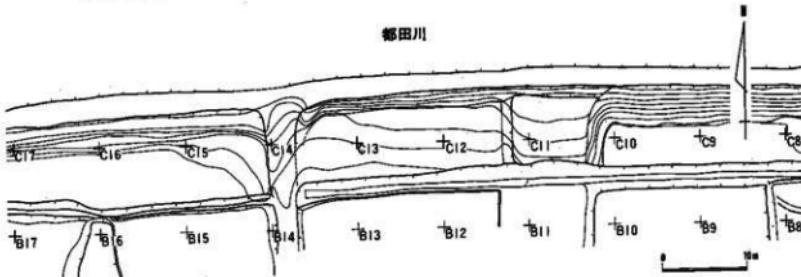
9月11日

埋戻し工事立合い、本日をもって現地調査に関わるすべての作業を終了する。

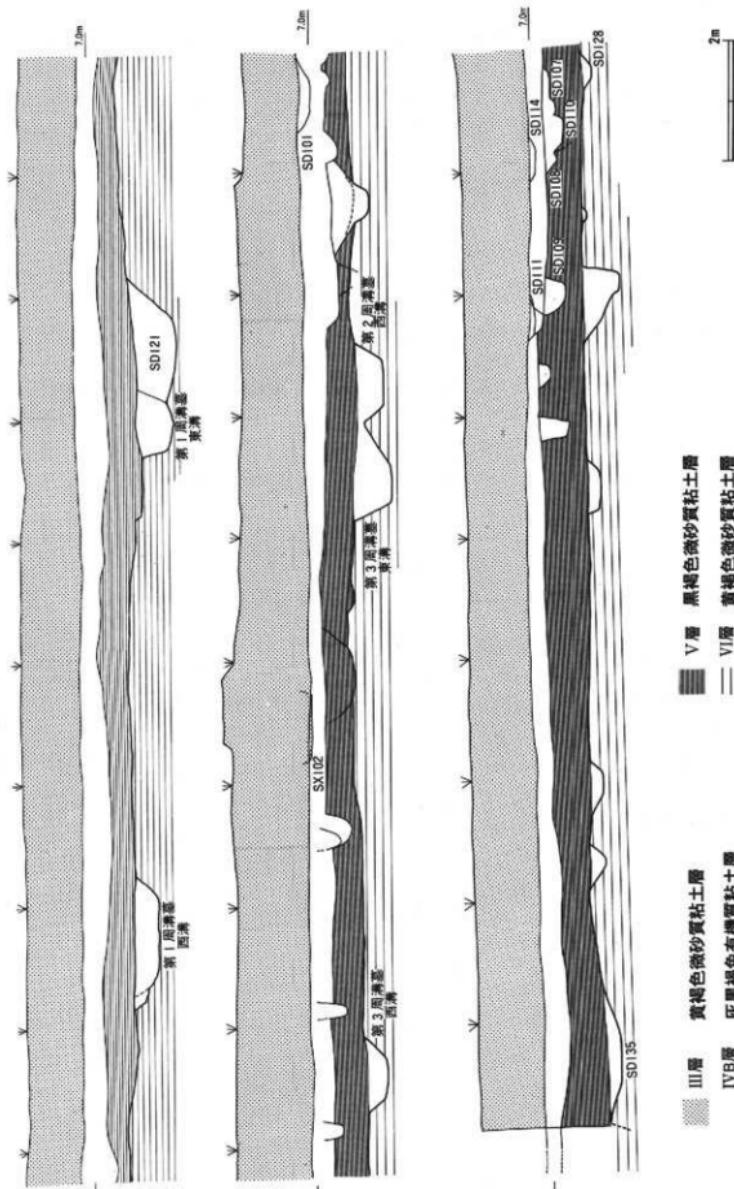
資料整理作業

昭和58・59年度の資料整理・報告書刊行は、現地調査終了後に昭和59年度の事業として実施した。作業の大半は、多くの土器実測・観察・トレースに費やされた。また、57年度調査出土の銅鑼は、保存処理作業の関係から今回の報告に掲載した。整理作業は9月から翌年の3月までの間、研究所本部にて実施した。

この報告書刊行により、昭和57年度から59年度の三ヶ年にわたる椿野遺跡に關わる事業を完了した。



第3図 椿野遺跡調査区地形図



第4図 椿野遭路調査区土層図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

椿野遺跡が所在する周辺の地形は、浜松市都田町の小盆地形を呈する谷底平野であり、遺跡は都田川の形成した微高地に立地している。この遺跡は、三ヶ年に及ぶ調査の結果東西幅約200mほどの範囲で広がることが確認された。

浜松市の北端部は標高200mから400m程度の山地で、これは赤石山脈に連なっている。また本遺跡の立地する低地部を挟んだ南には、半扇状の平坦面を有する第四期更新層の砂礫からなる三方原台地が広がっている。

遺跡の背後は、三方原台地の北縁に迫り、都田川の形成した河岸段丘が認められ、高位段丘面は標高80m～90m、低位段丘面は40m～50mである。遺跡周辺の集落はこの低位段丘上に営まれている。

都田川は北部山地南縁部と三方原台地北縁部の間の低地部を流れている。都田川は県境の浅間山が水源となり、浜北市境沿いを流れ、都田町の平野部に至る。ここで都田川は低地に出るが、古生層のチャートからなる露頭がみられる瀬戸地区で川幅が急激に狭くなる。このように都田川は、平野部の出口たる瀬戸地区で流路が限定されることから、その手前の低地部の微高地は、川の蛇行により各所で分断され複雑な地形を形成している。このことから安定した微高地の発達は弱く、椿野遺跡以外で低地に所在する遺跡は少ないようである。

上流側の状況と対照的なのが、微高地の上に多くの遺跡を乗せる下流側の引佐郡細江町の低地部である。ここでは祝田・茂塚・田米寺・川久保といった遺跡が分布し、低地部への活発な土地利用が確認される。

第2節 歴史的環境（第1図）

この歴史的環境については、第1節と同様、先の「椿野遺跡Ⅰ」に詳述されていることから、椿野遺跡に関する時代を主とした説明としたい。

都田川の下流域への人々の進出は、縄文時代草創期から向山遺跡（浜松市教委 1982）から確認されるという。さらに縄文時代の遺跡は後期から晩期にかけてのものが多く見られる。なかでも弥生時代前期の遠賀川式土器を出土する岡ノ平遺跡は、縄文時代後期から弥生時代に継続する遺跡として著名な遺跡の一つであり、さらに弥生後期にまで継続することから、弥生文化導入から展開にかけて、この地域における中核的位置を担った遺跡と考えられている。

都田川の形成する微高地への進出は、下流側の細江町祝田遺跡（佐野 1984）の事例でみると中期後半段階から顕著にみられるようである。祝田遺跡は、昭和57年度、椿野遺跡と並行する時期に現地調査が行なわれた。この成果として、弥生中期後半から後期、古墳時代前期の墓域が調査され、三河地域中心に分布する長床式土器の土器棺が出土している。住居跡を主とした明確な居住域は確認されていないが、墓域とした範囲には土器棺・埋設土器、方形周溝墓が発見されており、弥生時代中期後半から古墳時代前期まで安定した集落經營が類推される状況であった。この遺跡の他に、都田川の微高地には向山・田米寺・茂塚・岡地船渡・森・川久保・市場遺跡というように数多くの遺跡が営まれ、弥生社会の活発な低地への進出が展開された。この結果、悪ヶ谷銅鐸に代表されるように弥生社会の完成ともいえる共同体祭祀の出現を見る。

都田川中下流域の古墳の築造は、その支流である井伊谷川流域の引佐郡引佐町の北岡大塚古墳からはじまる。これは前期後半の前方後円墳で、前長46.5mを測る。都田川の本流域を望む丘陵に古墳が築造されるのは、中期終末頃からであり、細江町陣座谷古墳、浜松市都田山1号墳、恩塚山古墳である。

その後、この周辺や三方原台地縁辺に数多くの後期群集墳が作られる。しかし当時の人々の集落の調査例は、低地部でも段丘上においても数少く、判然としない。

奈良・平安時代以降の遺跡も数多く、祝田・田米寺・落合・川久保といった都田川下流域の遺跡や、さらに中流域の遺跡としては浜松市貴元寺・須部神社西・安六・鶴ヶ谷古窯が知られている。また下流域では条里遺構の存在も指摘されている。さらに「和名抄」の記載によると都田という郷名が記されていることも特質される。

平安時代においては、この地域が広く伊勢神宮の御厨に組込まれており「神鳳抄」のなかに、祝田御厨・刑部御厨・都田御厨という莊園名が記されている。このように奈良・平安時代には各種の資料にこの地域の記載が登場するようになるが、発掘調査の資料は断片的なものであり、都田川の水上交通を軸として展開したこの地域の開発・および交通・交易の様相は、現状では不明といわざるを得ない状態である。一方で海岸よりの砂堆列には木簡・墨書き器多数を出土した浜松市伊場遺跡・具注曆木簡を出土した可美村城山遺跡が所在し、これらの調査成果により律令制下の地域の様子が類推される状況となっている。このように、浜名湖の奥部の河川が形成した低地部と、砂堆列に立地する海岸平野の遺跡とでは、古代の官道・駅の所在地などの古代交通の体系の影響であろうか、遺跡の規模・内容に差のあるよううにみえる。

中世以降近世までも都田川流域には連続と人々の生活の跡が確認されるが、断片的な資料が確認されるに過ぎない。そのなかで、中世の細江町初山古窯は注目される遺跡であり祝田遺跡といった近隣の遺跡での出土が確認されている。

参考文献

- 浜松市遺跡調査会「伊場遺跡第3次発掘調査概報」 1971
タ 「伊場遺跡第4次調査月報」 1972
タ 「伊場遺跡第6・7次発掘調査概報」 1981
タ 「椿野遺跡」 1982
タ 「椿野遺跡」 1985
浜松市教育委員会「向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報」 1982
タ 「伊場遺跡・遺物編3」 1982
細江町教育委員会「都田川流域の遺跡」 1981
タ 「川久保遺跡ほか発掘調査概報」 1982
(財)駿府博物館付属 静岡埋蔵文化財調査研究所「椿野遺跡I」 1984
タ 「祝田遺跡I」 1984

第III章 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

第1節 弥生時代～古墳時代の遺構（第5～7図）

第4面では弥生時代から古墳時代初頭の遺構が発見された。特に58年度の成果として3基の方形周溝墓の発見をあげなければならない。この周溝墓の存在によって、椿野遺跡における墓域の一角が判明することになったからである。また、C-11・C-12区の境界からは多量の土器を投棄した土器集中箇所が発見され、さらにこの周辺の溝状遺構からも多量の土器片が発見されている。先の方形周溝墓とどのように関わりあうのかも課題となつた。その他、土坑、ピットなどが発見されている。以下これらの遺構についても記述してみたい。

（1）方形周溝墓

58年度調査区東側（C-8区～C-11区）で3基の方形周溝墓が発見された。これらの遺構は限定された調査範囲であったので、一部は未発掘区に延びている。また、各遺構は一部重複したり、近接したりしており、それぞれが密接に関連していると判断される。なお、これらの方形周溝墓の主軸方位は、調査区に対してわずかに北西に偏している傾向が認められた。

1号方形周溝墓（第8図・図版3・4）

C-8区西側からC-11区にかけて3基の周溝墓が確認されているが、本遺構はその東側に位置する。また、周溝墓東側で周溝の一端が立ち上がる所以、一隅が切れた形態を呈する。なお東溝とSD121は切りあつているが、土層での新旧関係は明瞭ではなかった。また、西溝は第2周溝墓の東溝と重複している。南溝の覆土を切ってSF103が作られている。北溝は未調査区に延びているため全体のスケールは不明であるが、検出面では東西長10.2m、南北長8.7m（周溝外壁部より）を測る。東溝は巾1.4m、深さ0.7m、西溝は巾1.9m、深さ0.55m、南溝は巾1.3m、深さ0.7mを測る。

東溝とSD121の接する部分で、上層より土器が集中して発見された。これらの土器群はその分布状態により東群と西群とに分けることができる。それぞれ東群=SD121上層土器、西群=第1周溝墓の土器と区別することが可能ではないかと考えられる。このようにかんがえられるとすれば第1周溝墓の東溝においては焼造された後、これがある程度埋没した段階において、西群の土器（器台、壺、S字状口縁、壺）などが供獻されたと判断される。なおこの考え方を補強するものとして、東群の土器は大破片でありながら接合して完形となる例があまり多いとはいはず、それに比べ西群の土器は完形もしくはそれに近い状態となる例が多く、土器の扱いに違いがあったと考えられるからである。このような土器の出土状態の違いによって、一応本遺構に伴う土器を比定すれば、小型丸底土器群やS字状口縁壺を含むものであり、SD121出土土器と時期差をもつものと判断せざるを得ない。なお西溝は第2周溝墓と重複しているが、土層切り合いは不明瞭であつて新旧関係の把握はできなかつた。また溝によって区画された内側では土坑やピットが発見されているが本遺構に伴うものかは判明できなかつた。

2号方形周溝墓（第9図・図版3・4）

第1周溝墓の西側に位置する。すでに述べたように東側は第1周溝墓の西溝と重複しているため、全体の様相は不明瞭ではある。なお重複する部分では溝断面が段差を有することや部分的に溝の巾が狭くなっていることから、東溝の範囲がある程度知ることができる。この推定に基づいて東西の長さを10m～10.7mとしておく。南北についても長さ10m前後と考え、一辺10m前後の規模を推定しておきたい。

周溝は三隅が切れている。東溝は巾1.9m、深さ0.55m、西溝は巾1.5m、深さ0.55mを測る。北溝の覆土上位から、大破片の壺、壺が各1個体出土しており、本遺構に伴うものと判断された。その他各溝から弥生土器片が出土している。また溝で区画された内側では溝状遺構やピットが発見されている。これら

の溝状遺構は、本遺構に伴う溝によって切られており、それ以前に掘削されたものと判断される。

3号方形周溝墓（第10図・図版4）

第2周溝墓の西側に位置し、南溝は未発掘区に延びる。東溝は第2周溝墓の西溝と接しているが切りあってはいない。また両者の土層を検討したが、ほぼ同一の土層堆積状況を示していることから、あまり時期差は認められないものと判断された。検出面では、東西長11.7m、南北長7.6m（周溝外壁部より）を測る。東溝は巾1.8m・深さ0.6m、西溝は巾1.5m・深さ0.4m、北溝は巾1.3・深さ0.5mを測る。南溝は不明ながらその他の溝は連続して巡っている。

北溝コーナー付近の底面に近い位置で、壺4個体、小型鉢1個体、甕1個体分の大破片が出土しているほか、覆土中より弥生土器の小片が少量出土している。

溝で区画された内側では、溝状遺構や土坑、ピットが発見されているが、本遺構に伴うものかは判断できなかった。なお上位では焼土ブロック三ヶ所が認められた。

（2）土坑

円形・椭円形・長椭円形・隅丸長方形を呈し、長径2m～1.5mを測るものが多い。発掘区のなかで一定の区域に集中する傾向は認められず、全体として散漫な分布となつていて。

S F 1 0 3（第11図）

C区南東で発見されたもので、円形を呈し長径1.45m、短径1.19m、深さ0.15mを測る。第1周溝墓の覆土を切っているところから、それより新しいと判断される。覆土中に焼土・炭化物を多量に含み、覆土に差異が認められないことから、一時期に埋まったものと判断される。

出土遺物は、三ヶ所に集中して発見された壺の大破片・高坏片・小型壺などが認められた。壺はいずれも脇部と頸部から脇部の破片で、接合して完形を呈するものはなかった。小型壺については、接合後脇部の一部を欠くほか完形に近い状態を呈した。このように見ると本土坑の出土遺物は破片で投棄された可能性が強いといえるであろう。

S F 1 0 5（第11図・図版5）

C-9区とD-9の境界付近で発見されたもので、隅丸長方形を呈し長径1.42m、短径0.7m、深さ0.26mを測る。ここでは、長径15cm～10cm大の砾を含んでいた。

出土遺物は、北東隅に集中されて発見されたものを除くと、散在的な在り方を示した。出土遺物は壺片が多く、口縁部・脇部の一部と判断された。集中して発見された破片についても接合して完形に近い状態を示すものではなかった。このような接合関係をみると本土坑の出土遺物は破片で投棄された可能性が強いといえるだろう。

S F 1 0 6（第11図・図版5）

C-11区に位置し、第3周溝墓の区画内に存在するが、両者の同時存在は確認できなかった。隅丸長方形を呈し、長さ1.51m、巾0.6m、深さ0.3mを測る。上位に焼土ブロック（55cm×30cm）が認められた。

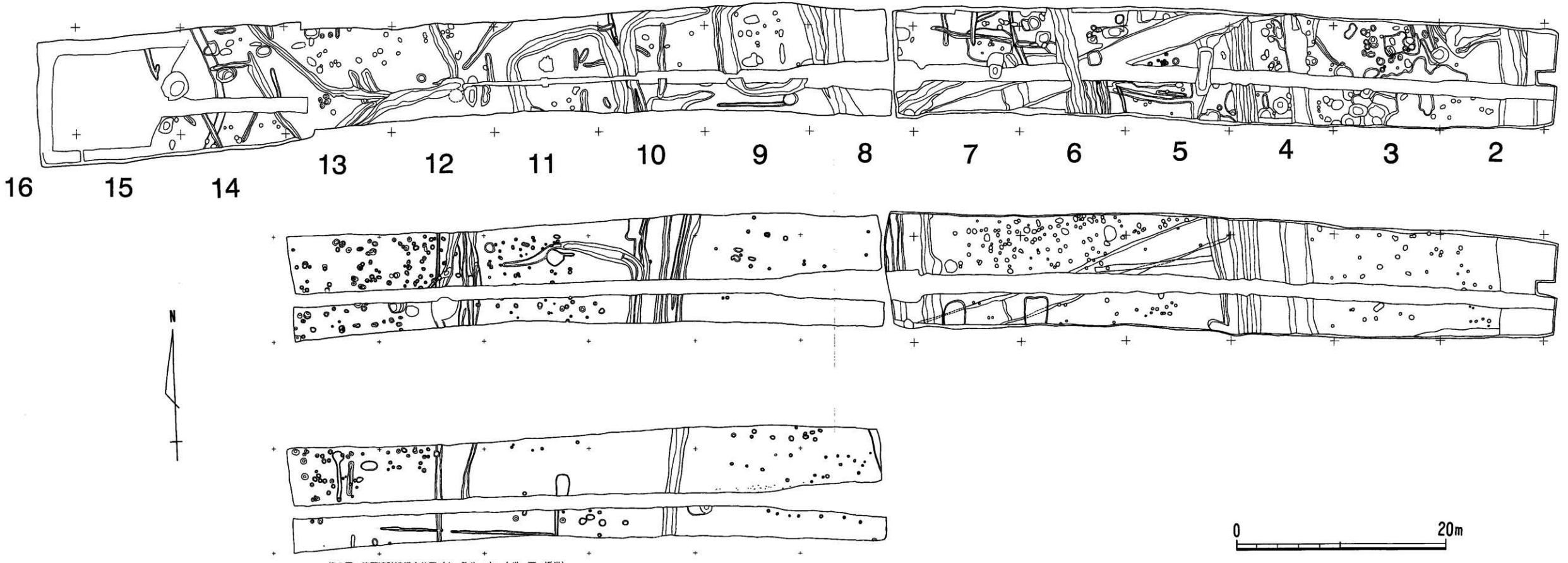
出土遺物は、高坏脚部・台付甕の台部・甕か鉢の脇部片が認められたが、接合して完形に近い状態を呈するものはなかった。

S F 1 0 7（第11図・図版5）

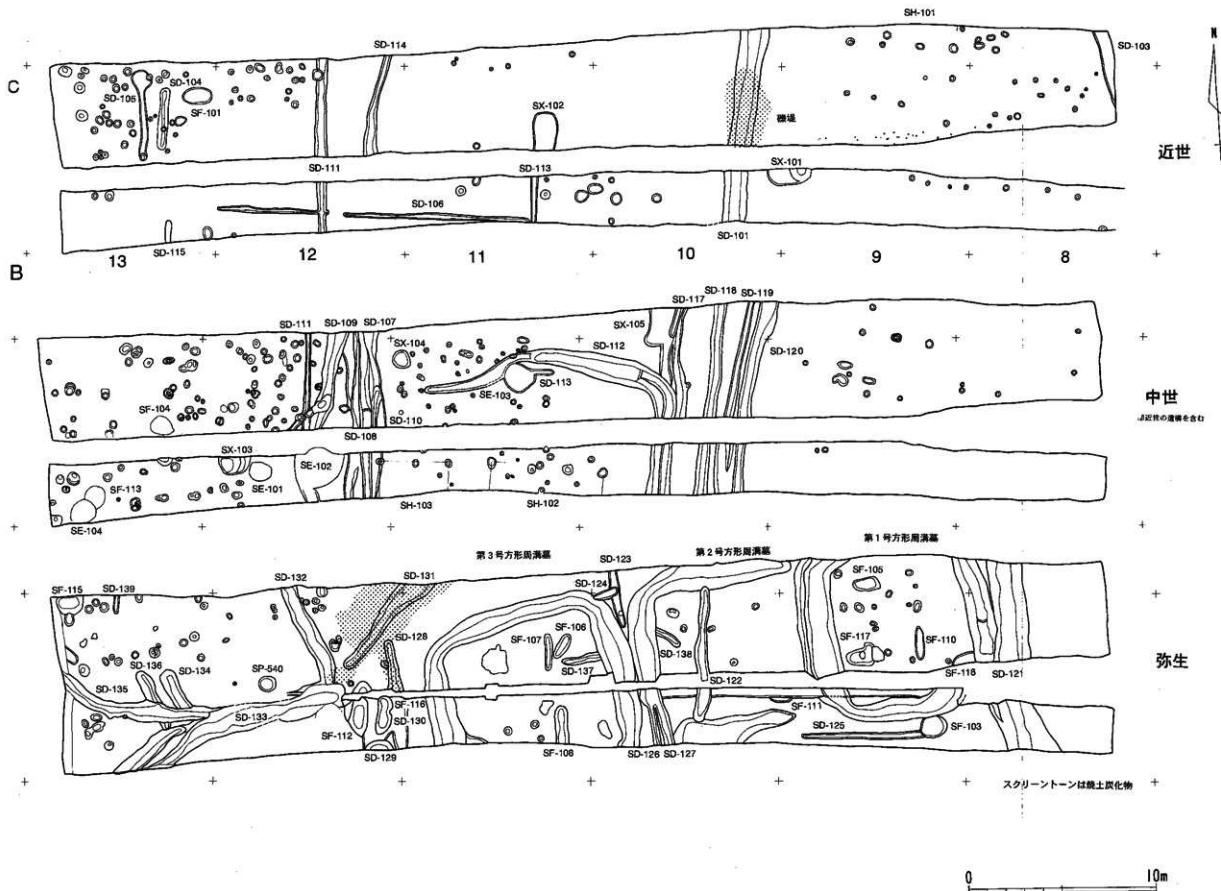
SF106の西側において発見された。隅丸長方形を呈し、長さ2m、巾0.4m、深さ0.2mを測る。なお周辺には焼土ブロックが認められた。本遺構に伴う遺物は認められなかったが、周辺からは台付甕・破片が少量出土した。

S F 1 0 8

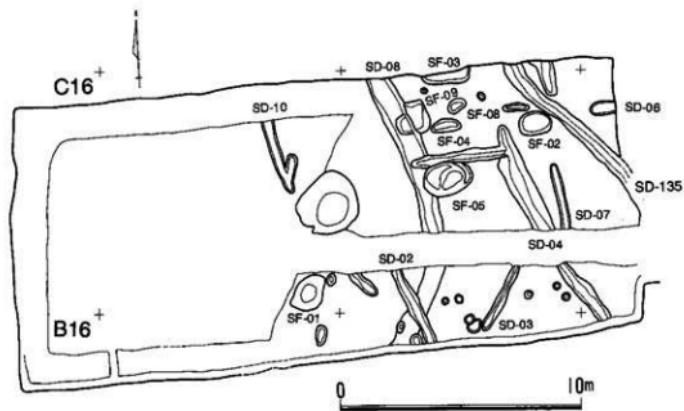
C-11区南側で発見されたもので、未発掘区に延びている。発掘区内では隅丸長方形を呈し、長さ2m、



第5図 椿野遺跡遺構全体図（上・弥生、中・中世、下・近世）



第6図 横野遺跡昭和58年度調査遺構全体図



第7図 植野遺跡昭和59年度調査遺構全体図（弥生時代）

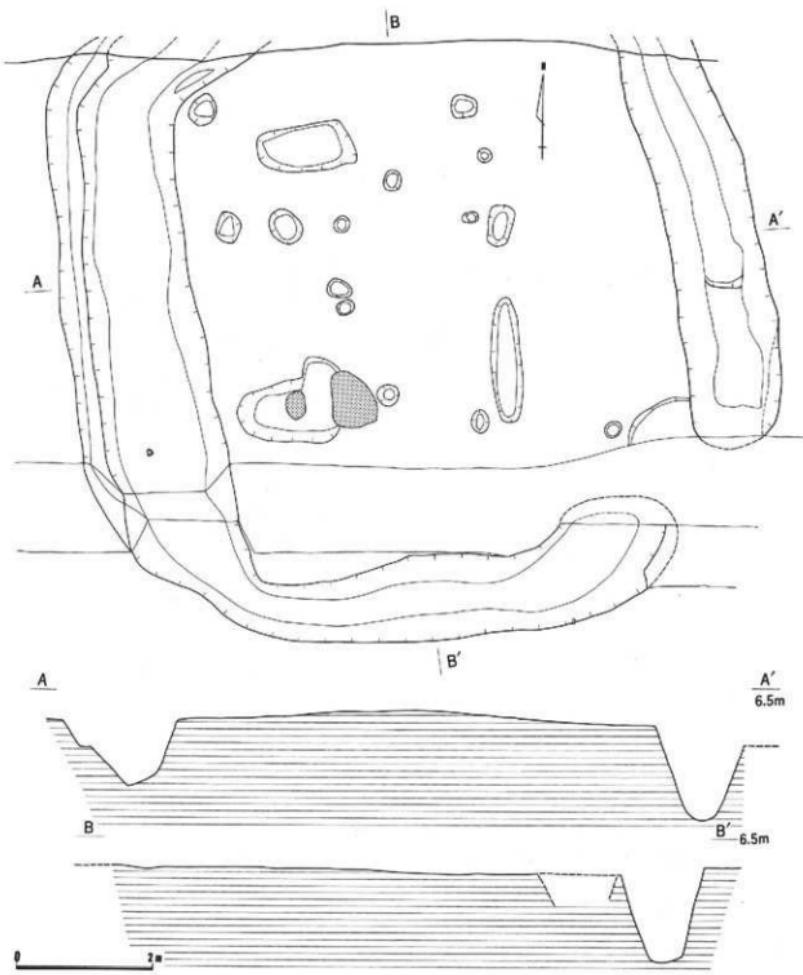
巾0.7m、深さ0.3mを測る。遺物は認められなかった。

S F 1 1 0

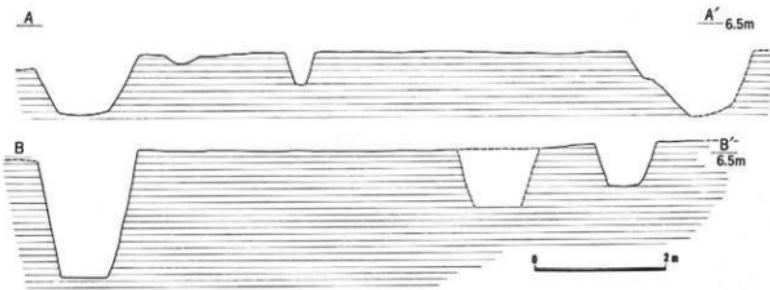
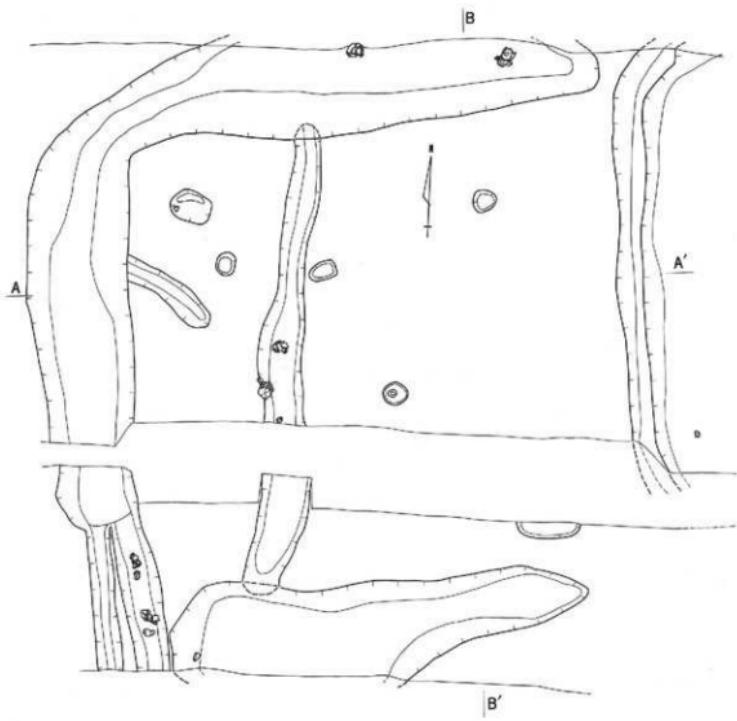
C-9区北側で発見された。隅丸長方形を呈し、長さ1.8m、巾0.45m、深さ0.15mを測る。遺物は認められなかった。

S F 1 1 2 (第11図)

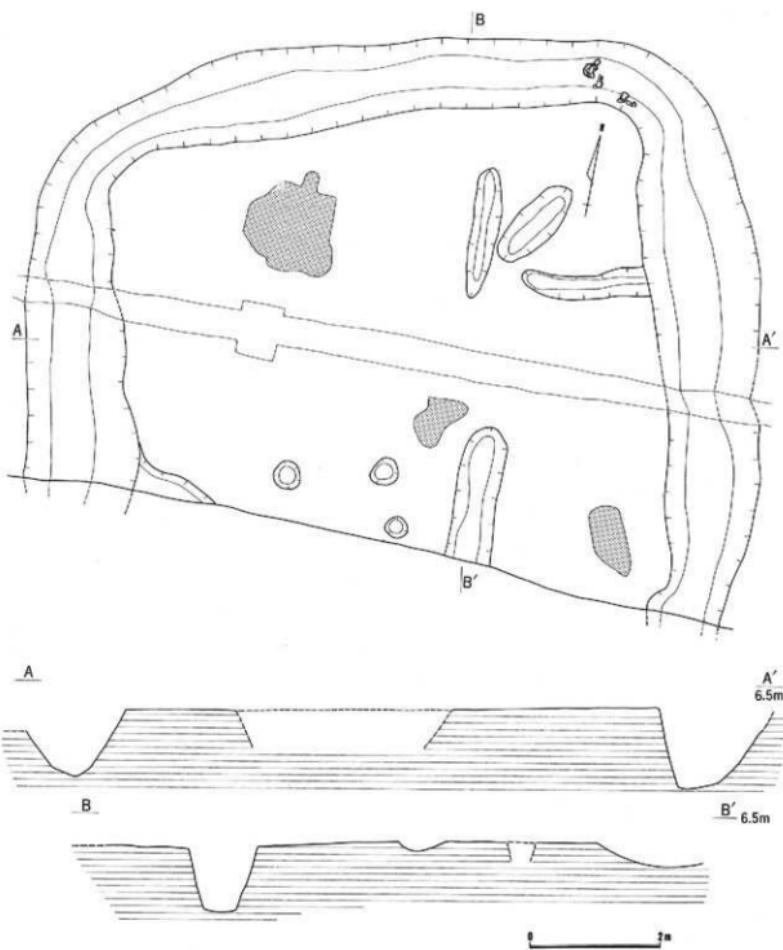
C-12区南側で発見された。長楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.2m、深さ0.3mを測る。覆土には炭化物・礫を含んでいた。出土遺物は本遺構東側から発見された。器種をみると壺・甕・高杯などが認められるが、接合して完形に完形に近い状態を呈するものは少なく、また破片の接合関係もあまりまとまらなかった。



第8図 1号方形周溝墓実測図



第9図 2号方形周溝墓実測図



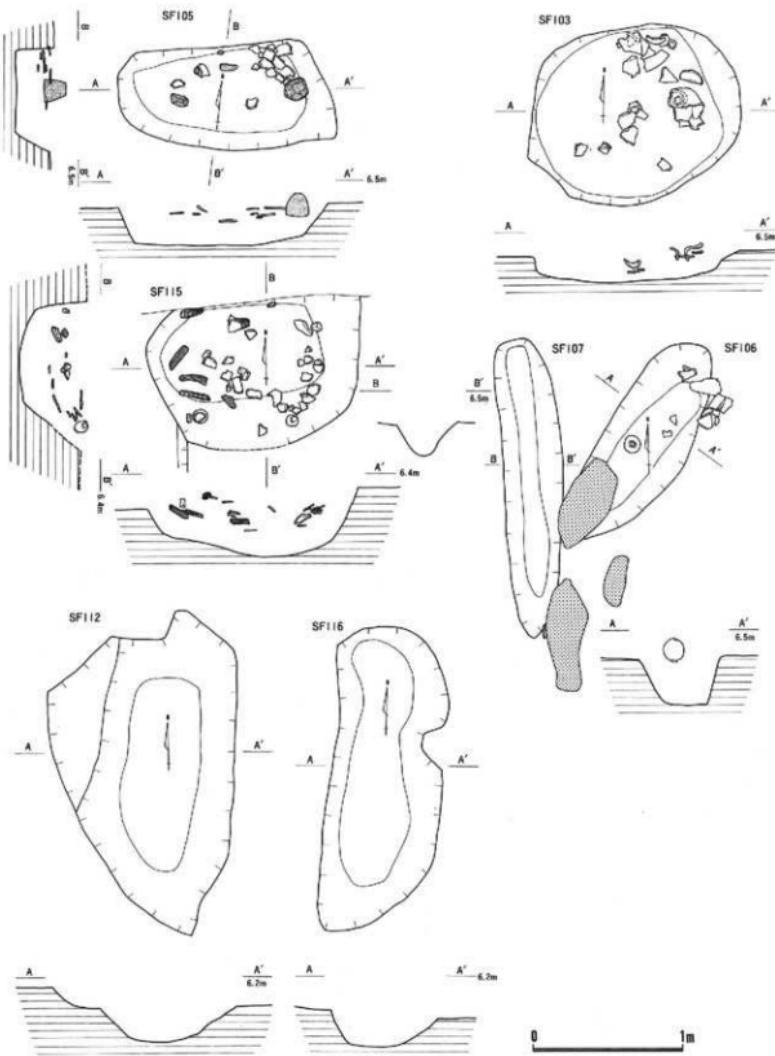
第10図 3号方形周溝墓実測図

S F 1 1 5 (第11図・図版6)

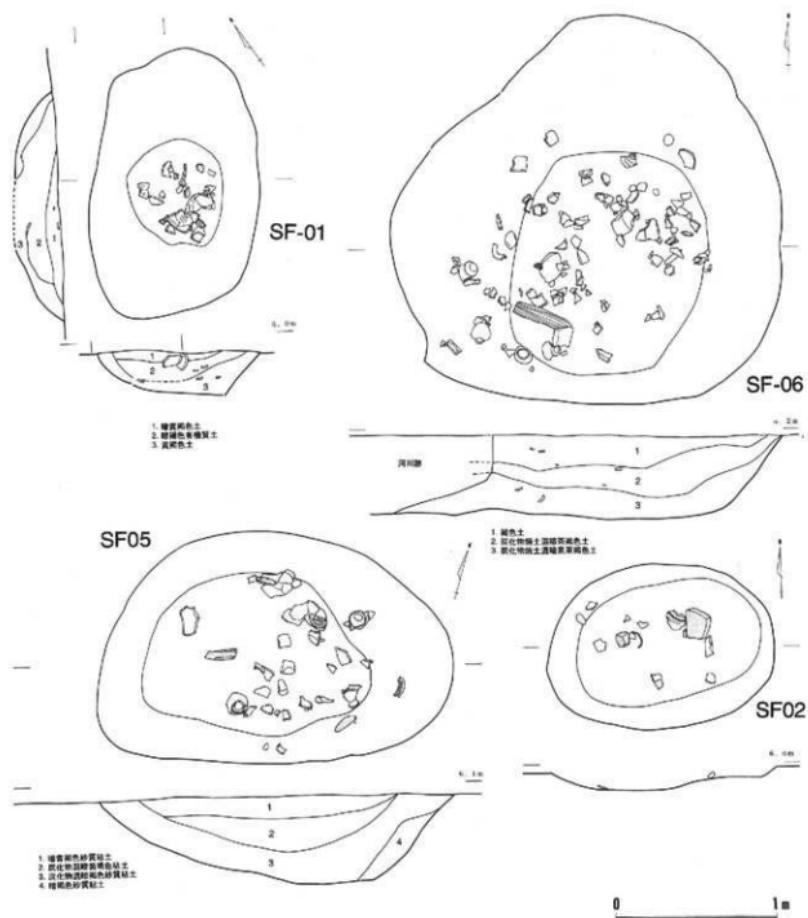
D-13区北西側で発見されており、北壁上端は未発掘区に延びている。楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.46mを測る。覆土には炭化物や砾を含んでいる。出土遺物は、壺・甕・高坏の小片が認められるが、接合可能なものや、完形に近く接合されるものはなかった。

S F 1 1 6 (第11図・図版6)

C-12区南側で発見された。長楕円形を呈し、長径2m、短径0.75m、深さ0.3mを測る。覆土には黄色粘土ブロックを含んでいた。出土遺物は中央部よりほぼ完形の小型壺が発見されている。ほかに覆土中より、壺・甕・高坏の小片が少量出土している。



第11図 弥生時代土坑実測図 I (昭和58年度調査)



第12図 弥生時代土坑実測図II（昭和59年度調査）

S F 1 1 7

C-9区北側第1坑溝墓の区画内に位置する。逆L字状を呈し、長さ1.55m、巾1.35m、深さ0.2mを測る。上位に焼土ブロックが認められる。出土遺物には壺の破片が少量認められた

(3) 溝状造構

第4面から18条の溝状造構が発見された。長さ・巾・深さにいくつかのバラエティーがあり、また造構内に多くの土器が出土するものと、ほとんど出土しないものとの違いが認められた。なお覆土は、暗黒灰色砂質粘土・暗茶褐色砂質土・青灰色砂質土が認められたが、その差異がどのような意味を持つのか不明瞭であった。

S D 1 2 1 (第13図・図版7・8)

D-8区・C-8区で発見された。南北端が未発掘区に延びており、発見面で長さ10.5m、巾1.3m~1m、深さ0.7mを測る。なお主軸方位は略南北を示すが、南側ではわずかに東側に屈曲する。覆土は黒灰色砂質粘土層で、西側に接する周溝墓の覆土上位では多数の大破片が、底部に近い下位では完形品が含まれていた。なお上位と出土土器は接合して完形に近い状態を呈するものもふくまれているものの、その多くは大破片であった。また中位で小破片が認められたのみであった。底部に近い下位出土土器は、完形品とともに底部を欠くものや口頸部を欠く例もあるが、概して上位出土土器よりまとまっている。

S D 1 2 2

C-11区において発見された。一部排水溝や第2周溝墓の北溝によって切断されているが、残存するスケールは長さ7.3m、巾0.7m、深さ0.25mを測る。底面に近い位置で数個体分の土器片がまとまって出土したが、接合して完形を呈する土器ではなかった。なお本遺構と第2周溝墓との関係は、上記のように第2周溝墓によって切断されていることから、SD122(古)→第2周溝墓(新)と判断される。

S D 1 2 3

C-10区において発見された。北側は未発掘区に延びているため全形は不明であるが残存長3.2m、巾0.4m、深さ0.15mを測る。覆土中より土器片が若干出土した。なおSD124と切り合っていたが、その新旧関係は不明であった。

S D 1 2 4

C-10区において発見された。西側は第3周溝墓の東溝によって切断されているため全形は不明であるが、残存長1.4m、巾0.4m、深さ0.4mを測る。覆土中より若干の土器細片が出土したほか、南壁に壺の大破片が認められた。なお先述したように、本遺構は第3周溝墓に切断されていることから、両者の関係はSD124(古)→第3周溝墓(新)と判断される。

S D 1 2 5

C-9区から発見された。東側をSF103によって切断されており、残存長は6.5m、巾0.35m、深さ0.15mの細長い溝である。覆土中より土器細片が若干出土している。なお先に述べた切り合い関係によって、SD125(古)→SF103(新)と判断される。

S D 1 2 6

C-10区から発見された。北側は第2周溝墓によって切断され、南側も未発掘区に延びているため、全体の様相は不明であるが、長さ2.2m、巾0.25m、深さ0.2mを測る。覆土中からは土器が若干出土している。なお先述した切り合いによって、SD126(古)→第2周溝墓(新)という関係を想定できる。

S D 1 2 7

C-10区から発見された遺構でSD126の東側に位置する。北側は第2周溝墓に切断され、南側は未発掘区に延びるため、全体の様相は不明であるが、残存長2.3m、巾1.2m、深さ0.15mを測る。底面に近い位置でいくつかの大破片のまとまりがみられた。

S D 1 2 8

C-11区からC-12区において発見された。ほぼ中央は排水溝によって切断されており、南側は未発掘区に延びている。長さ5.7m、巾0.7m、深さ0.2mを測る。出土遺物は、本遺構の南側において底面よりやや浮いた状態で壺・甕類の大破片が発見されている。いずれも胴下部を欠いたり脚部のみの破片が多いが、接合して完形を呈するものも認められた。SD130と重複しているが新旧関係は把握できなかった。

S D 1 2 9

C-12区の南側で発見された。大部分は未発掘区に延びているため、土坑である可能性もあるが、ここでは溝状遺構と判断した。巾1.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物は底面より浮いた状態で壺類の大破片が

発見されている。SD130と重複しているが、新旧関係は不明であった。

SD130

C-12区で発見された。残存長1.5m、巾0.5m、深さ0.1mを測る。出土遺物は底面よりやや浮いた状態で、壺類の大破片が発見されてている。なお本遺構はSF116・SD128・SD129と重複しているが、新旧関係は把握できなかった。

SD131（第14図・図版9）

C-11区からC-12区にかけて発見された。北側は未発掘区に延びているが、残存長で5.5m巾1.5m、深さ0.2mを測る。一部はSX106（土器集中箇所）と重複している。これらの集中した土器を取り上げると、底面に近い位置で完形、大破片の土器が発見された。このことから本遺構出土の土器は、完形もしくは完形に近い形で投棄された可能性が強いと判断される。

SD132（第14図・図版9）

C-12区で発見された。北側は未発掘区に延び、南側はSD133と重複している。残存長5.5m、巾0.9m、深さ0.6mを測る。出土遺物は覆土上位より壺・甕・高杯などの大破片が発見された。なお底部に近い位置では土器片は少なかった。いずれも接合して完形を呈する資料はなかった。

SD133（第15図・図版10）

C-12区からC-13区にかけて発見された。ほぼ南北方向に走り、未発掘区に延びており残存長13.2m、巾1.8m、深さ0.7mを測る。出土遺物は、壺・甕・高杯などの小破片が覆土上位より集中して発見されている。いずれも接合して完形を呈する例はなく、別の場所で破碎された土器片を一括投棄したと判断される状況であった。なお重複しているSD135との新旧関係は判断できなかった。

SD134（第15図・図版10）

C-13区で発見された。南側がSD135と重複しており、残存長2.5m、巾0.8m、深さ0.2mを測る。出土遺物は若干の土器片と砥石が発見された。土器片がきわめて少ない点はSD136と類似する。重複したSD135との新旧関係は把握できなかった。

SD135（第15図・図版10）

C-12区からC-13区にかけて発見された。西側は未発掘区に延びるため、残存長8m、巾1m、深さ0.4mを測る。出土遺物は、壺・甕・高杯などの小破片が覆土上位から集中して発見された。なおSD133出土土器片の量と比較すると、その量は少ない。下位においても若干の小片が発見されている。いずれも接合して完形を呈する資料はなく、別の場所で破碎された土器片を一括投棄したと判断される状況であった。また重複しているSD133との新旧関係は把握できなかった。

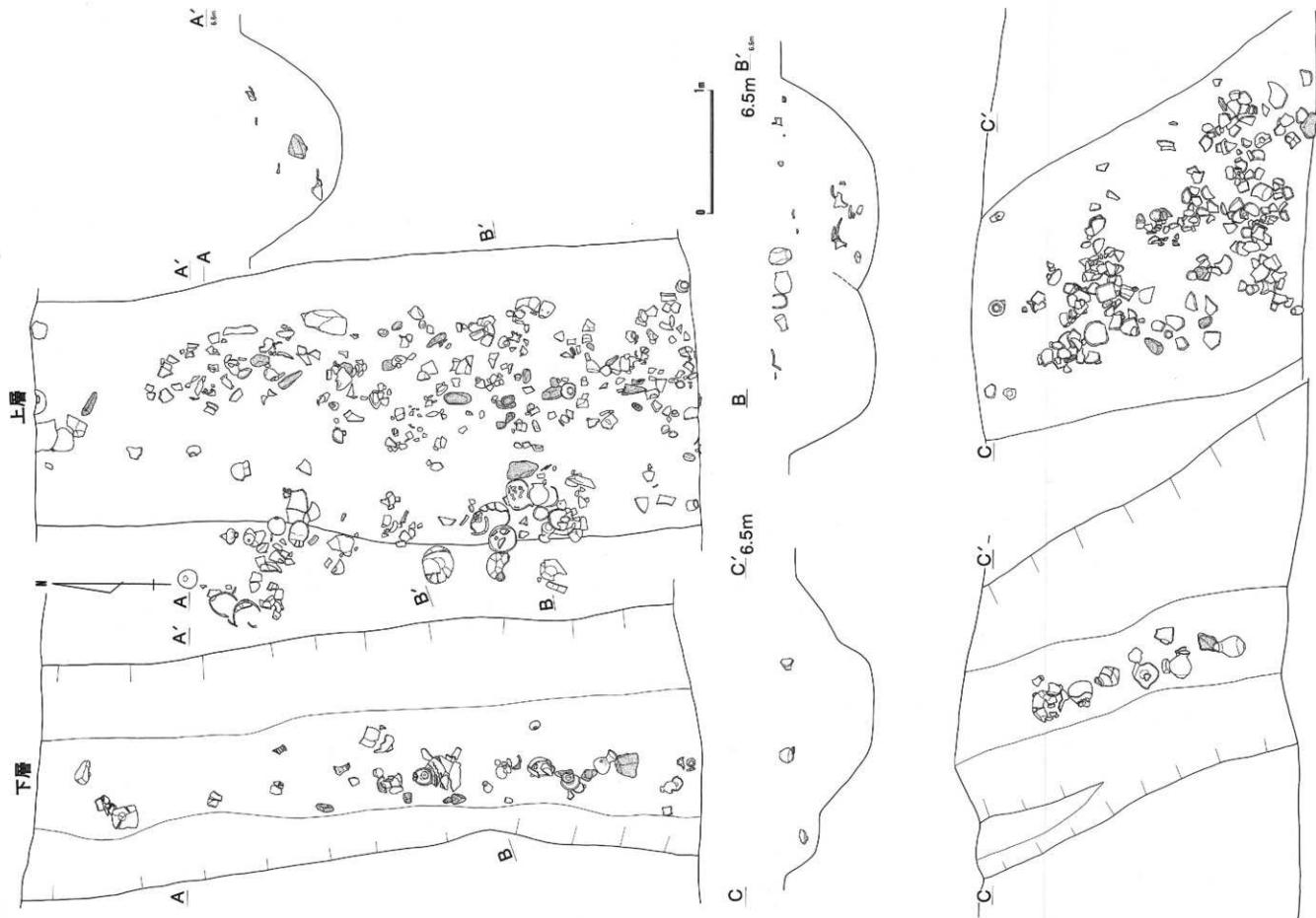
SD136（第15図）

C-13区で発見された。一部SD135と重複している。残存長1.7m、巾0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物は若干の土器片がみられたに過ぎない。また重複しているSD135との新旧関係は土層観察では把握できなかったが土器片の出土状況が重複部分でSD136の状況に連続するため、SD135（古）→SD136（新）という推定が成立すると考えている。

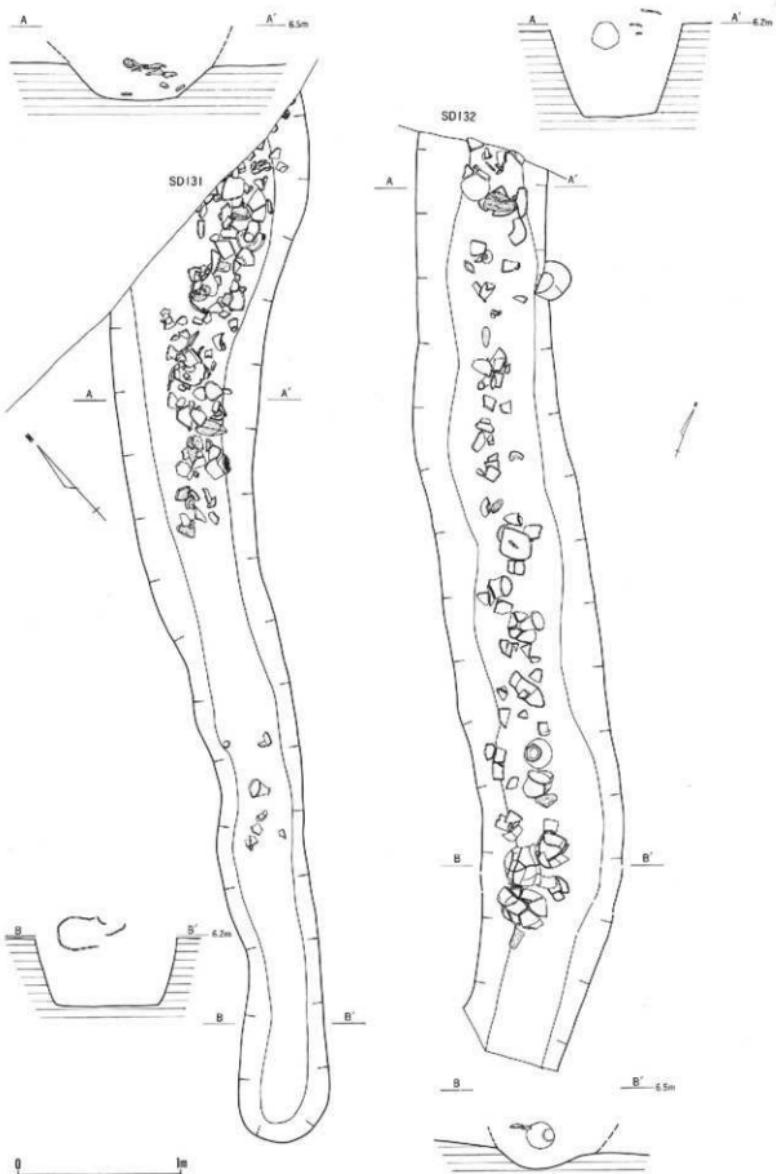
（4）土器集中箇所

SX106（第11図・図版17）

C-11区からC-12区に及ぶ。弥生遺構検出面より0.4m～0.3m程上位で確認された。なおこの集中箇所は南北方向に偏しており、長さ6.5m、巾2.5mの範囲に及ぶ。土器の堆積状態は一重ないし二重であった。器種構成をみると壺がおおいが、いずれも小破片であって接合して関係を呈する資料は少ない。なお土器の出土状態をみると先述したように検出面より浮くがそれは弥生後期～古墳時代初頭の先史地表面を



第13図 弥生時代溝実測図 I (S D 1 2 1)

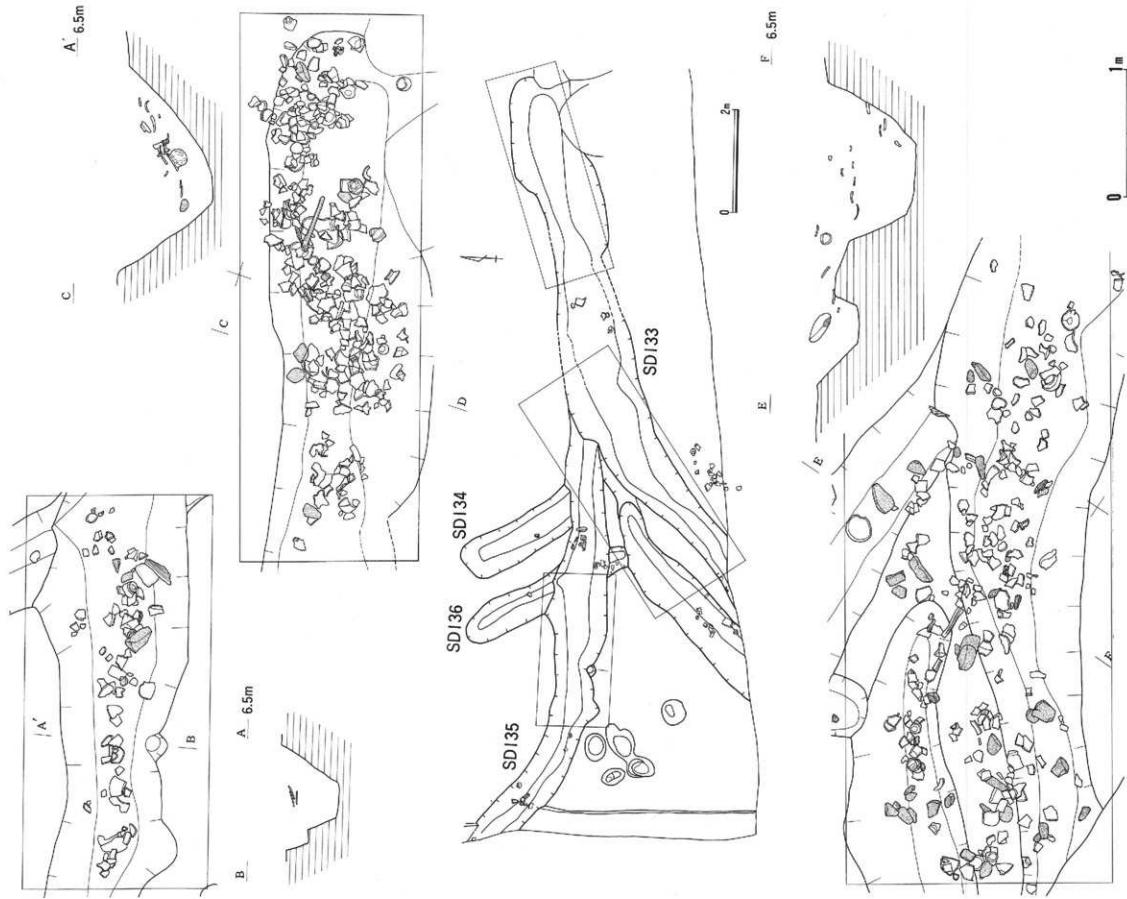


第14図 弥生時代溝実測図II (SD131・132)

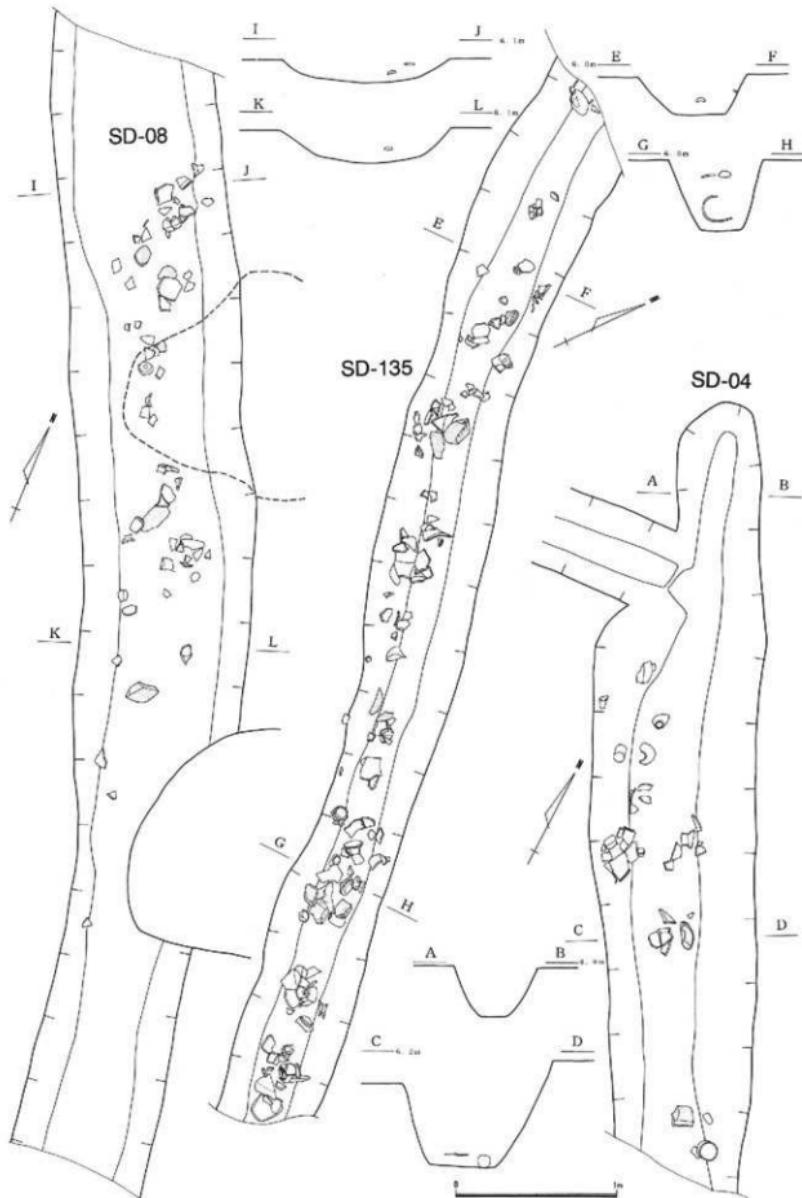
反映しているものと推定しておきたい。

(5) ピット

約70個のピットが発見された。いずれも直径0.4m～0.3m、深さ0.3m前後のものが多い。出土遺物は若干の土器片を伴う例が多いが全体に出土量はきわめて少ない。



第15図 弥生時代溝実測図III (SD 133~136)



第16図 弥生時代溝実測図IV（昭和59年度調査）

第17図 土器集中箇所SX106実測図



2節 弥生時代の遺物

今回の調査において出土した遺物のなかで、圧倒的に多いのが土器類であり、そのなかでも弥生時代後期から古墳時代初頭の土器がその主体を占める。他にこの時期の遺物として、石製品が認められる。なお、57年度調査の際出土した銅鏡は、浜松市博物館川江秀孝氏の修復により6点が復元された。今回の報告でこの銅鏡もとりあげることとした。

以下、遺構ごとに記述してゆく。なお土器については、前回報告したものとほぼ同じ系譜・時期のものであった。

(1) 方形周溝墓出土土器 (第18図・図版24)

1号方形周溝墓からは1・2の壺と小型甕が出土する。1は有段の複合口縁で、内外に横ナデが認められる。

2号方形周溝墓からは甕、3号では単純口縁壺と甕が出土している。

(2) 土坑出土土器 (第18図・図版24)

S F 1 0 3

第19図-1~3の三点を図示した。1は櫛画横線文を施す壺、3は直立気味の肥厚した口縁部をもつ、3は胴部にミガキに入る小型の壺である。これらは欠山期の土器である。

S F 1 1 5

4の壺が出土している。全体の丁寧なミガキを施す。

S F 1 1 5

5・6の二点が出土している。6は扁平な形態の小型壺である。欠山期に該当する時期と判断される。

(3) 溝状造構出土土器

S D 1 2 1 (第19図~22図・図版24~28)

今回の調査のなかで、最も大量の土器を出土したのがこのSD121であった。このなかで壺を中心として図示した。

第19図-7~13には単純口縁の壺を示した。櫛画きの波状と扇状文のある12を除き、他は無文、胴の一部にヘラミガキを施すが調整は荒い。

第20図には折り返し口縁の壺を中心にまとめた。いずれも先の単純口縁の壺と比較して装飾的な壺である。これらのうち、口縁部がやや受け口状を呈するものが、無文の5・7の二点であり、どちらも口唇部は丁寧な面取りが施される。文様は櫛状工具により、口唇部に斜位の刻みを施すもの(2・3・4)、口唇部または頸部に「ハ」の字に刻むもの(1・5・6)が認められる。また同じ櫛状工具により、波状・扇状文を施す例もみられる。4では、肩部に波状文が、さらに口縁部内面には細かい波状文が施されている。

全体にこれらの壺類は、飾られる土器として文様が施され、口縁部の面取りにしても調整が丁寧である。なかには、やや受け口で無文の7のような例もあるが、丁寧な調整をうけるこれら無文の一群は、全体にヘラミガキが施される。

胴部形態は、やや下膨れの傾向は止めるものの、全体的には球形に近い形態が一般的であるように観察される。

第21図には小型壺(1~5・8~10)・壺(6・7)・鉢(11・12)・高壺(13~18)・器台(19・20)を集め

めた。

小型壺の形態をみると胴部下位に屈曲をもつ1・2・3・5の形態と、やや大きめの8・9・10では典型的な球胴を呈するものが出土している。全体に無文が大半であるが、胴部にミガキを施すものと、ハケ目調整を施すものが見られる。5は肩部に櫛状工具による羽状文がみえ、9では、丁寧に横の波状文を施す。

6・7の壺は、いずれも口縁部を欠損する。内外ともに丁寧にミガキ調整されている。

鉢は大小の二点を図示した。11は小型壺の底部から胴下部に疑似口縁をつけたもので、成形・調整は壺と類似する。器面はハケ目調整を施している。12は口径17cm以上を測る鉢であり、内外ともに丁寧なヘラミガキをする。胴部下位の屈曲は顯著に認められる。

高坏は坏部の立ち上がりが強く、脚は14・16・18のように、直線的に「ハ」の字に開くものと、13のような緩やかな曲線を持ち「八」の字に開くものが認められる。なお17の脚は直線的に「ハ」の字に開くが、先端で内側にすばまる形態を呈する。15の脚は、一点のみ円筒状の脚に太い横線が入り、下部が急に開く形態を呈する。脚部はヘラミガキされて丁寧な調整を施す。

器台は二点図示したが、19は坏部と脚部がそれぞれ半々の長さであり、高坏を縮小したような形態を示す。20は、典型的な器台の形態を呈し、口縁部は尖り直立気味である。脚はやや外側に開く形態をもっている。

壺類は第22図-1~5にまとめた。小型のもの（1）から大きいもの、口縁部に刻みをもつ（1・3・4）もの、「S」字状口縁台付壺と呼称される5のような形態のものも出土している。完形に復元された2は台部をもたない形態だが、他は不明である。

以上のようにSD121から出土した土器をみてきたが、所属時期としては、大半が欠山期といわれる段階のもである。第22図-15の高坏脚は愛知県三河地域の弥生中期後半の寄道式であり、また第20図-5・7の壺口縁部も受け口状を呈し、弥生後期より古い様相を残しているといえる。しかしSD121のような大量出土の土器群の時期的な一括性を論ずるにはむしろ問題であり、ここでは指摘だけに止める。先の土器群は中期後半の特徴として指摘したが、今回のSD121出土土器は、大半が後期後半から古墳時代初頭の欠山期である。

SD127（第22図-6・7）

図示したように、やや口縁部が長く、胴下部の屈曲が強い壺（6）と壺（7）が出土している。両者ともに丁寧なヘラミガキ調整を受けている。

SD128（第22図-8~11）

胴中位に最大径のある無文の単純口縁壺（8）、9の鉢、10・11の高坏が出土している。9の鉢は、胴上位はハケ目、中位から底部にかけてはヘラミガキ調整をほどこしている。10は高坏の坏部、11は脚部である。これらのうち、10は中期後半の寄道式であり、欠山式の他とは時期差を生じている。

SD129（第23図-1）

本遺構から出土したもので壺一点を図示した。胴上部に櫛状工具により斜位に一列刺突する。頸部から口縁部を欠損するが、球胴を呈し丁寧な調整をうける。

SD131（第23図-2~5）

壺2点、壺と高坏脚各1点が出土している。3の壺口唇部には、櫛状工具による斜位の刺突、肩部には横線の櫛画文がみられる。4は大きい高坏の脚で、先端がやや窄まる傾向が認められる。

SD132（第23図-6~12・第24図-1・2）

壺・高坏・鉢・壺が出土している。6は単純口縁無文の壺であるが、胴部下位の屈曲が強く、他の壺とは明確に形態の差が表れている。また11の高坏は無文であるが、坏部中位で強く内側に屈曲し、口縁部は外反する。

10は口縁部に刻みがないこと、胴部にはハケ目をもたないこと、台が付かないことから、広口の壺か鉢と考えた。第24図-1は台付壺である。

これらの土器の時期は、11は伊場式土器の高坏に比定され、他は欠山期である。

S D 1 3 3 (第24図-2~11・第25図-1~8)

今回の調査で最も古い形態の一群を出土している。2壺は、口唇部を肥厚させ垂直に面取りする。肩部には横の櫛描が二列、その間に扁状文が施される。また頸部には断面三角の隆帯が巡っている。3は口縁端部が直立気味で、肩部にボタン状の突起が貼りつけられる。横位の櫛描文も認められる。4・6は、ともに円筒形の頸部から大きく開く口縁部本体に追加された複合口縁部をもち、4に棒状の粘土が貼りつけられ、6では「く」の字状に櫛状工具による刺突が認められる。5では、直線と波状の櫛描文が施されている。また7の口唇部では、櫛状工具による「×」状の刺突が施される。また8は数少ない、頸部に羽状の疑似繩文を施す壺である。

13は器高の極めて低い、小型の壺の底部から胴部下位を接合したものであり、疑似口縁も作り出していない。

第25図-2~4は高坏の脚部を図示した。2は円筒形の基部から開きの弱い端部に連続する高さのある脚を特徴とする。また脚部上部には、櫛描による横線が二段にわたり認められる。3は直線的に開き、4はやや端部においてやすらぎある脚の高坏である。

5~8は、口縁部に刻みのある壺で、6では口縁部外側に横ナデ調整が認められるが、他は全面ハケ目調整を受けている。

これらの時期は、弥生後期の伊場式から欠山期に位置付けられるが、壺類の口縁部の形態と文様から後期も前半期の特徴を備えている一群といえよう。第24図-8は、天龍川以東の東遠江に分布する菊川式の壺である。

S D 1 3 5 (第25図-9~11)

壺二点と壺一点、壺の台一点を図示した。壺は肩部に櫛描による横線、「く」字状の刺突、波状文を施すもので、10の内側にも細かい波状の櫛描が認められる。口縁部は無文で、口唇部は斜位に面取りされる。

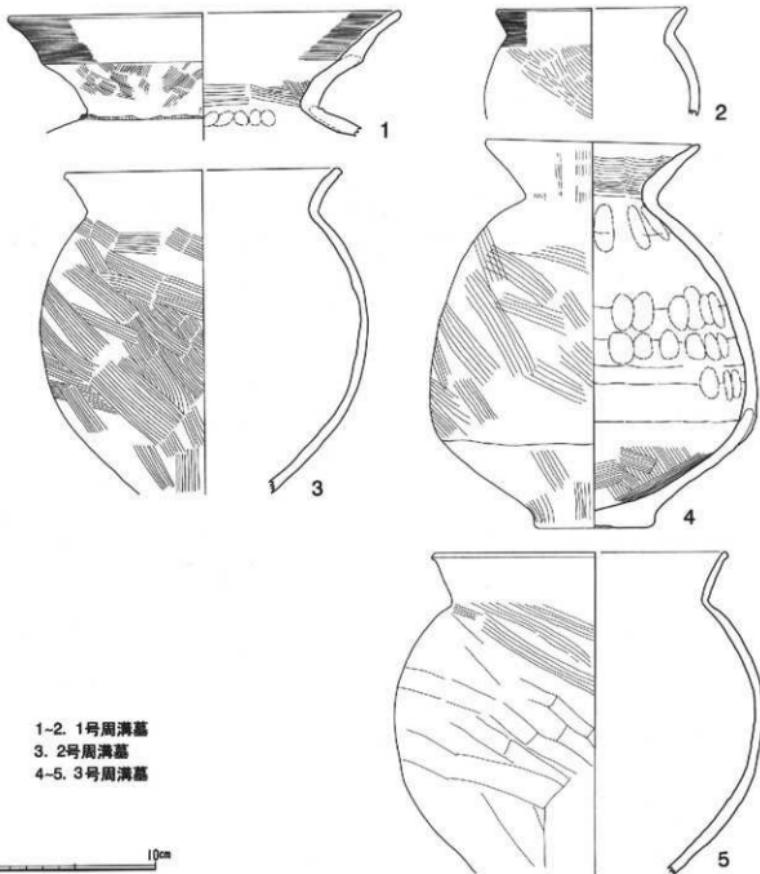
11は形態・調整手法からみて、大きめな壺と思われる。

(3) 土器集中箇所

第26・27図に土器集中箇所から出土した土器を図示した。ここからは壺・壺・鉢・高坏・壺というようにあらゆる器種の土器が出土している。

壺は全体の形態が判明する例に乏しいが、単純口縁と折り返し口縁が認められ、胴部は下位で屈曲するタイプが多いようである。1は図示したなかでは唯一の完形品であり、胴部下位で弱い屈曲が認められ、無文で胴部ハケ目調整、口縁部はヨコナデを施す。口唇部は尖るように調整されている。7は太く短い口縁部と思われ、口唇部は平坦に面取りされ、櫛状工具で「×」印のような施文がされる。口縁部形態からみて、本遺跡では数少ない事例である。8・9・11は折り返し口縁であり、8では口唇部に櫛状工具による「く」の字の刺突と、口縁部内側には斜位の連続する刺突を施す。また9では、口縁部内側にのみ、櫛状工具の「く」の字の刺突と細かい波状の櫛描きがみられる。これらの櫛状工具による施文は、間隔とか方向に乱れがあり、退化した櫛描文の印象を受ける。10は明確な折り返し口縁を呈していながら、口縁部内側と口唇部に櫛状工具による斜位の刺突と、細かい波状文が認められる。

12・14・16は口縁が直立に近く立ち上がる広口の形態を呈する鉢である。12では、底部が凹んでおり、壺と共通するような成形をしている。14は摩滅が激しく細部の観察は不能、小型の16もまた、これと同



1-2. 1号周溝墓
3. 2号周溝墓
4-5. 3号周溝墓

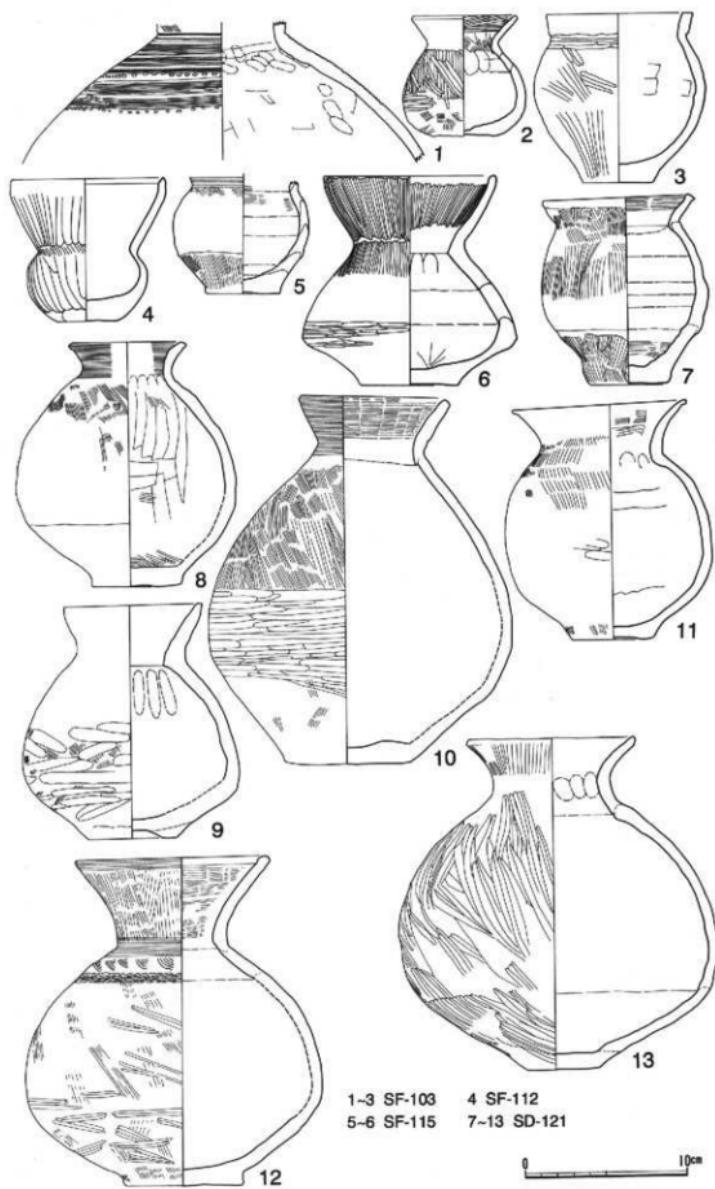
第18図 方形周溝墓出土土器実測図

じような残存状況である。15もまた口径21cmを測る大型の鉢と思われる例と思われ、口縁部の刻みがなく、調整の手法等からみて鉢と推定した。

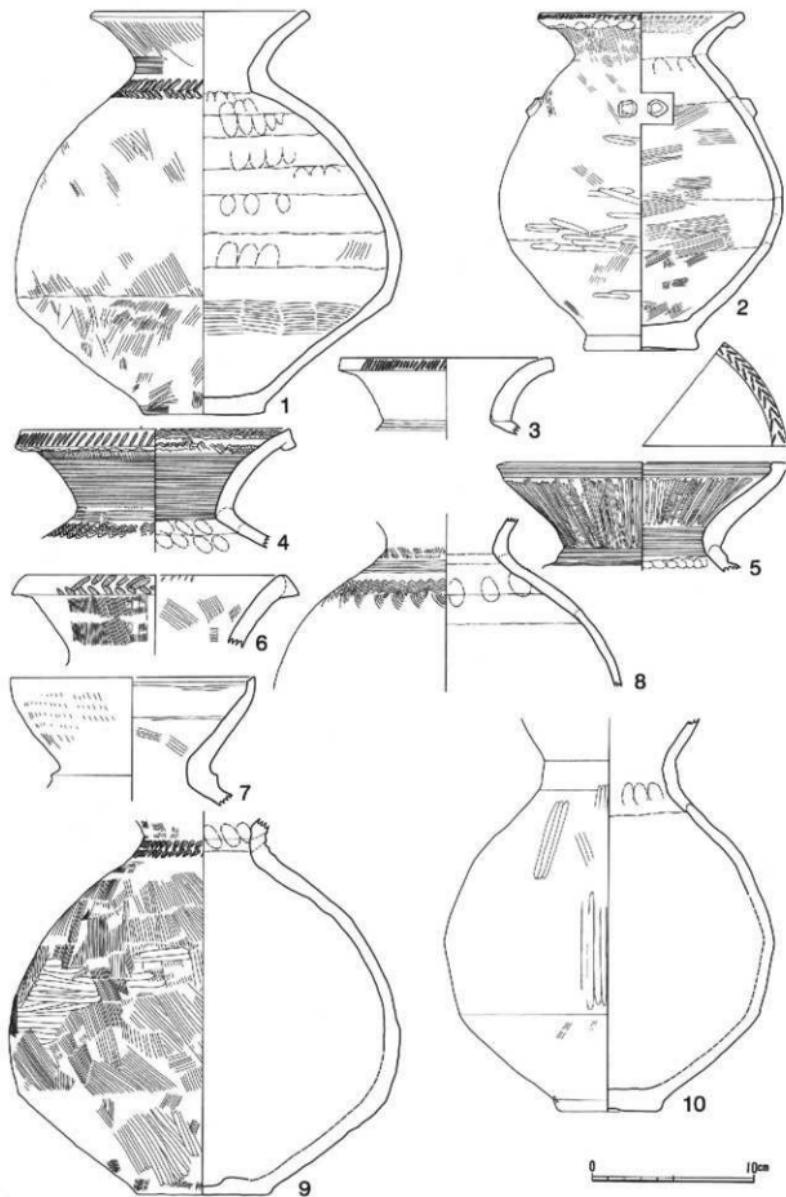
13は、口縁部内外を横ナデ、胴部外面をヘラミガキする堆である。

第27図には高坏と窓を図示した。高坏は坏部と脚部とが分離した資料のみで、全体が判明する例はないが、これらの7点はおおよそ共通した形態的な特徴をもっていることが観察される。

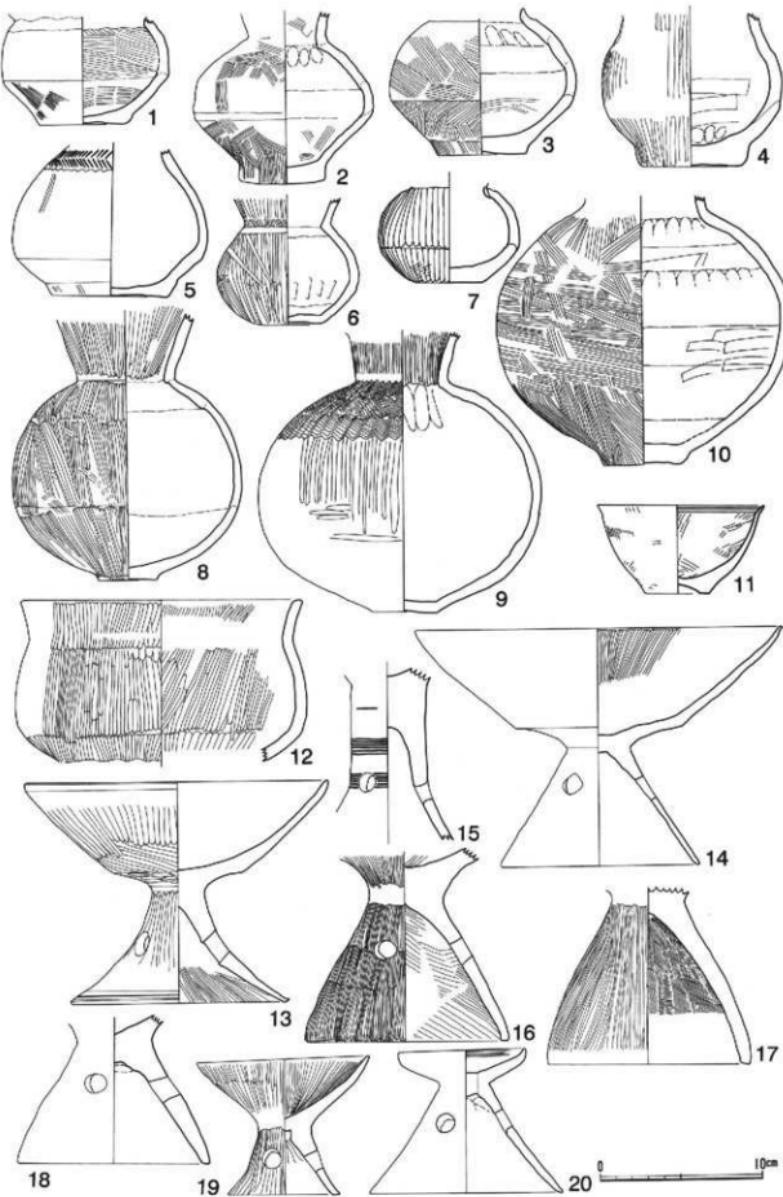
坏部については、1~4にみるように、体部の立ち上がりが強く、深い器高を呈する。坏部の基部から体部への立ち上がりが屈曲するのが一般的な形態である。なかには2~4にみるように、接合段階のナデにより生じた突帶が全周する例もある。3は比較的の屈曲が顕著でなく、むしろ体部が直線的に口唇部に達している。



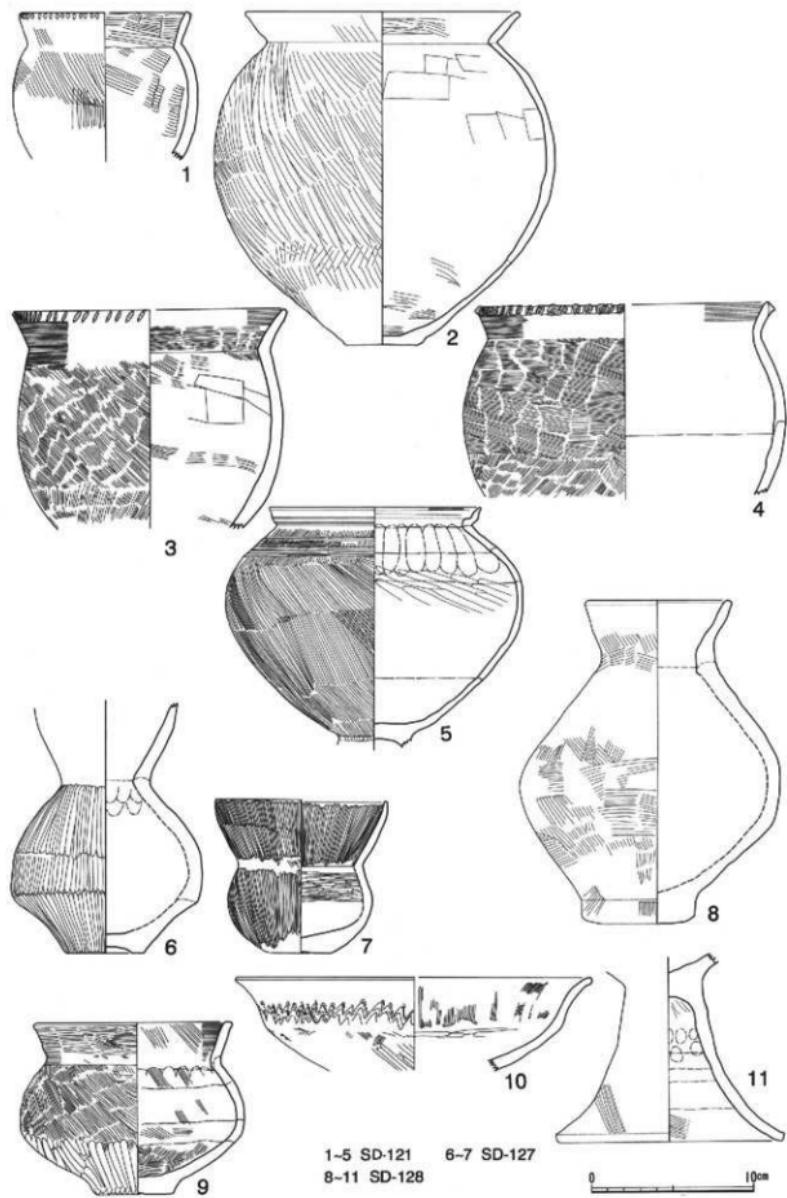
第19図 土坑・満出土土器実測図 I (SD 121)



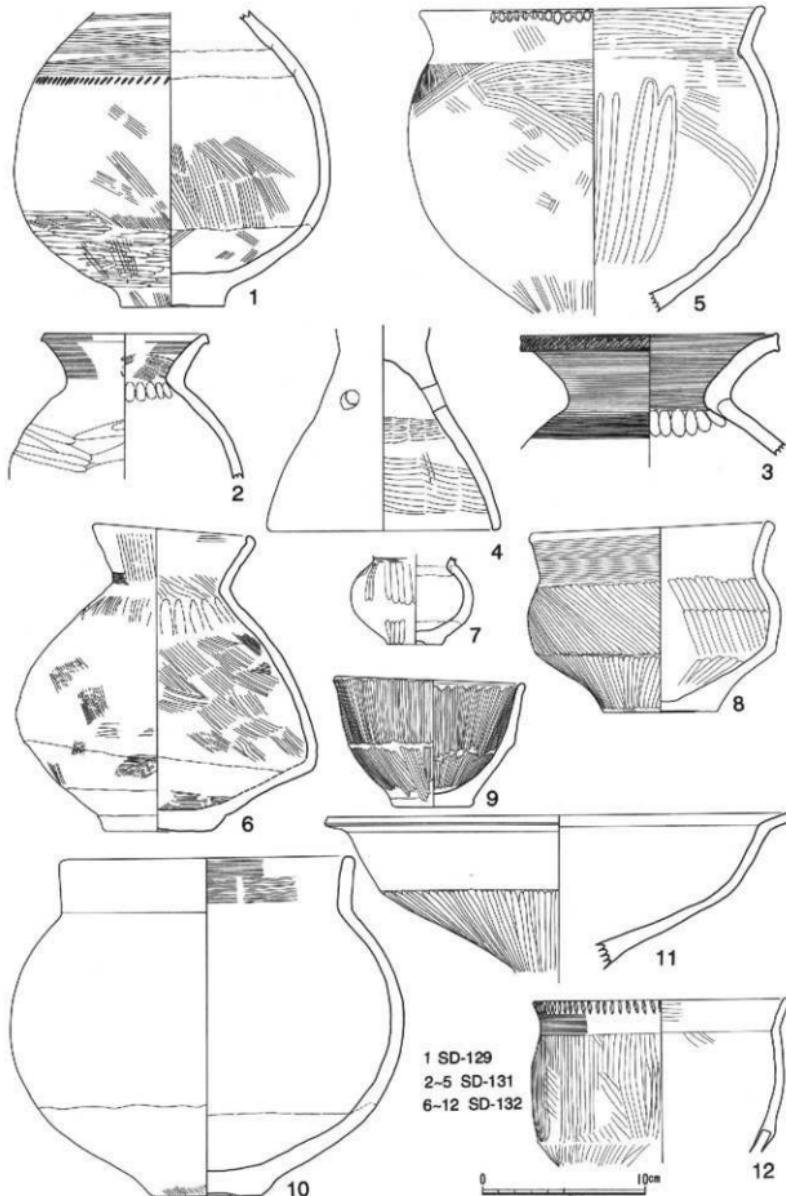
第20図 溝出土土器実測図II (SD121)



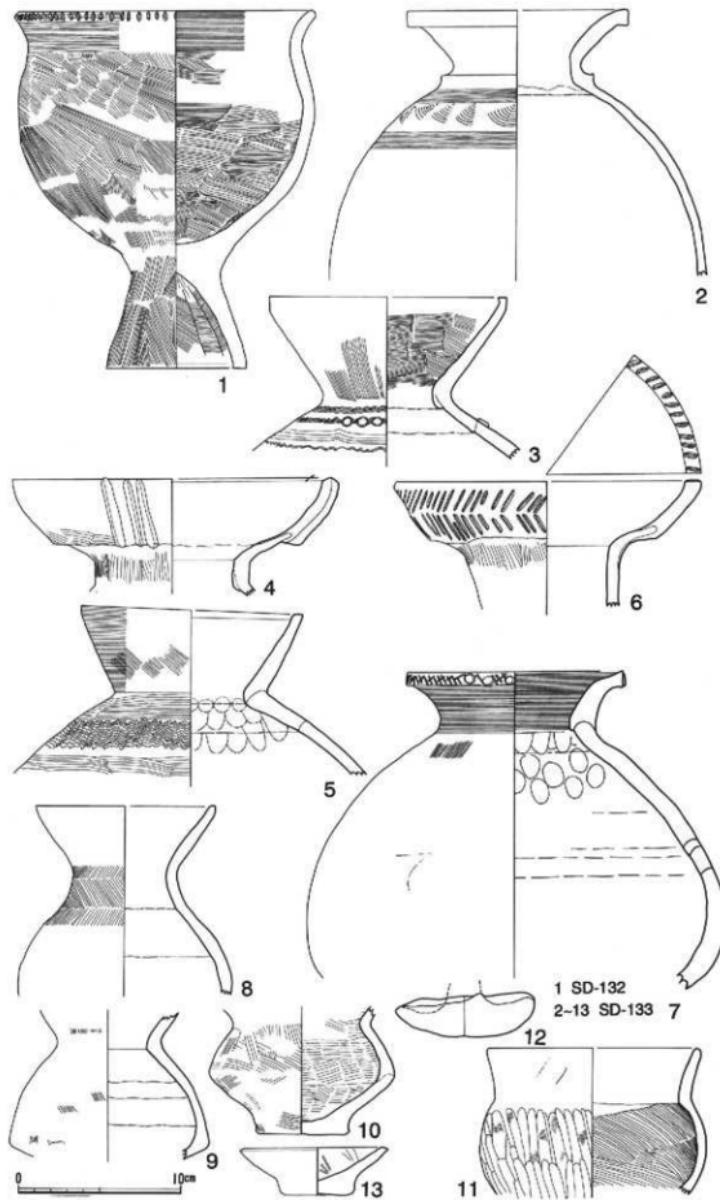
第21図 溝出土土器実測図III (S D 1 2 1)



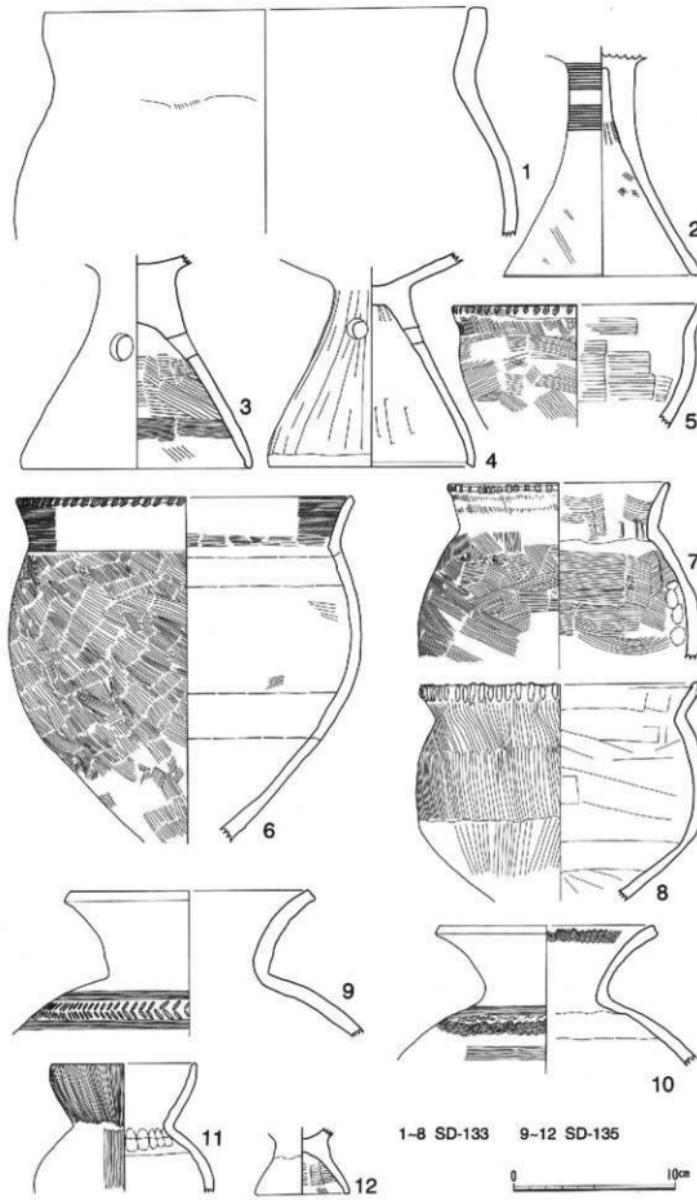
第22図 溝出土土器実測図IV (SD121·127·128)



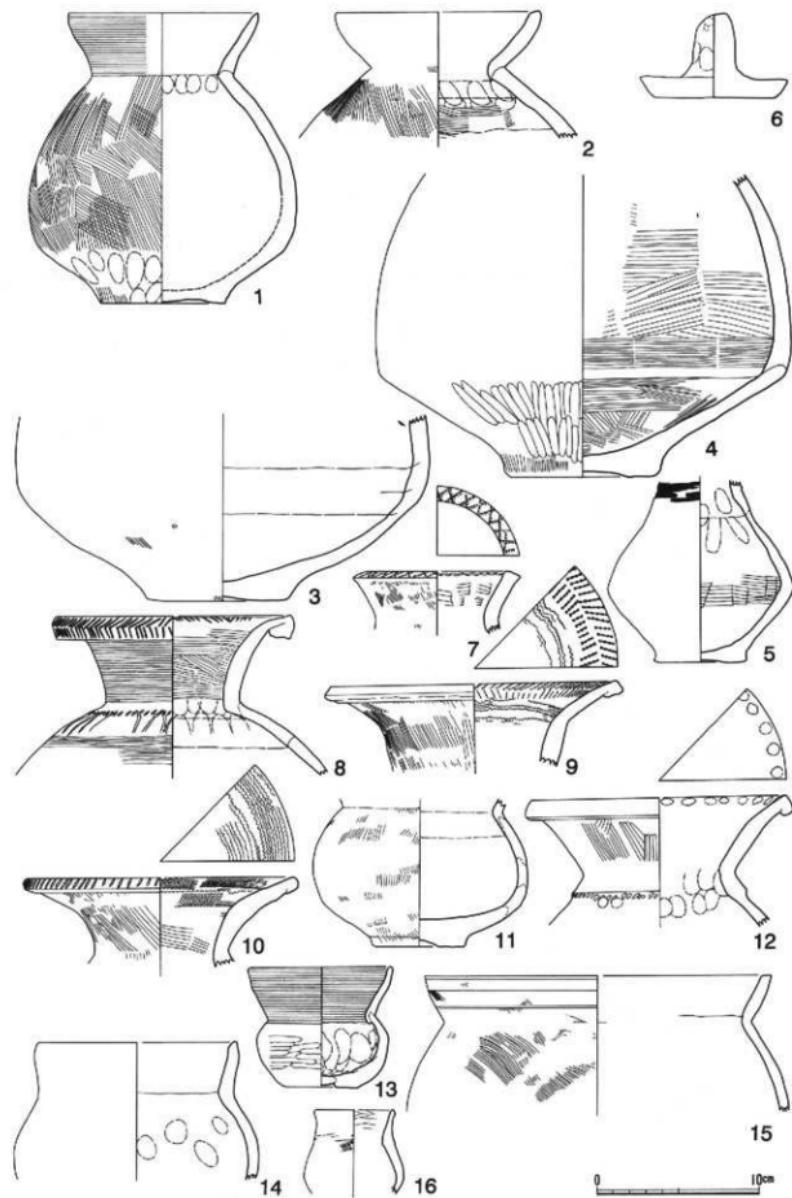
第23図 溝出土土器実測図V (SD129・131・132)



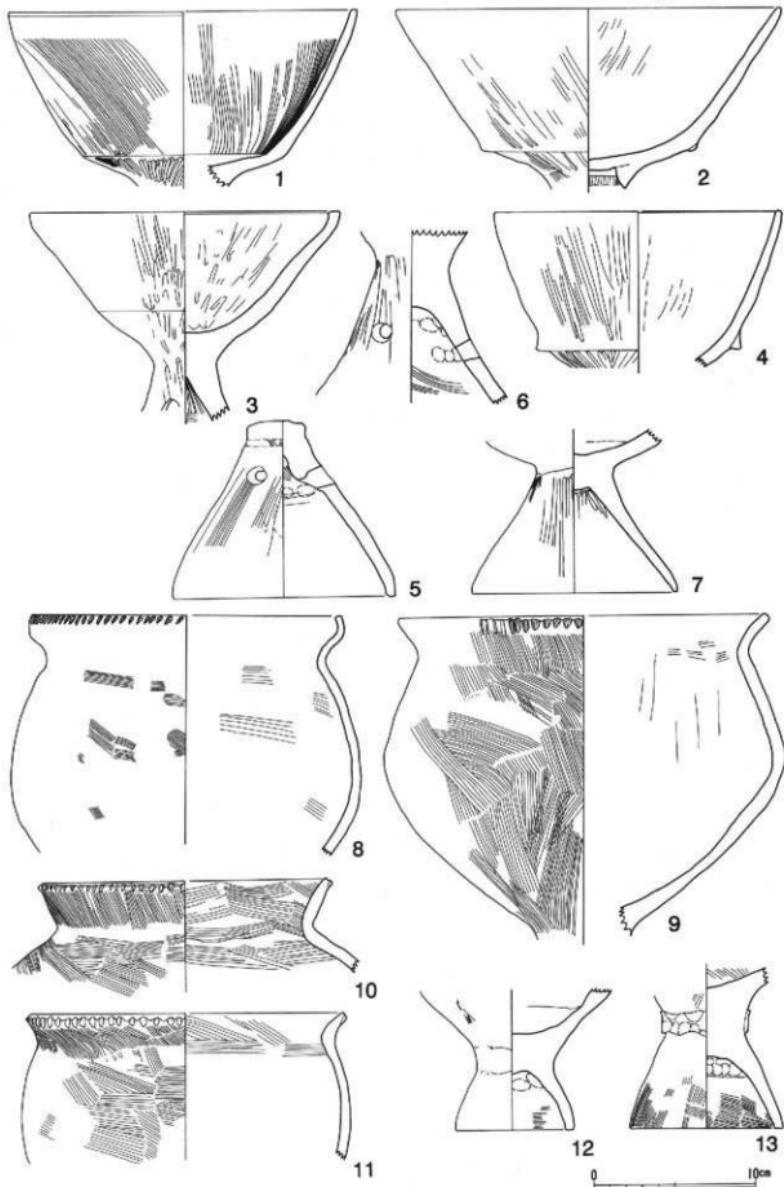
第24図 溝出土土器実測図VI (SD132-133)



第25図 溝出土土器実測図VII (SD133・135)



第26図 土器集中箇所 S X 106 出土土器実測図!



第27図 土器集中箇所 S X 1 0 6 出土土器実測図II

脚部の形態は、6がやや末広がりとなる「八」の字状を呈し、5はや端部で窄まり、7は直線的に開くようである。坏部・脚部とともに調整上での差はあまりなく、器面は平滑に丁寧に仕上げられている。

壺についても全体の形態を知る資料はないが、図示したように刻みを施す例が圧倒的に多い。9は胴部中位に最大径をもち、大きく胴部が「く」の字に曲がり急激に窄まり台部に至る。8は口縁部が内側に傾く例であり、他とは大きく形態が相違している。胴部も球形を呈すると推定される。12・13は台部であり、13の底部と脚部の境にみられるように、粘土紐を帯のように巻いて、指頭により押さえて調整している。12はその粘土紐が剥離したものと推定される例であり、その痕跡が明瞭に観察される。

銅鏡（第28図・図版32）昭和57年度調査出土

本遺跡の昭和57年度調査出土の銅鏡については、昭和57年度調査概報において、3点を紹介している。その後、浜松市博物館川江秀孝氏による保存処理と復元作業により、さらに3点を追加し合計6点となつた。図28-2・4・5の3点がすでに報告したものであるが、この際は図の提示のみで記述を省いたことから、今回まとめて取り上げることとした。

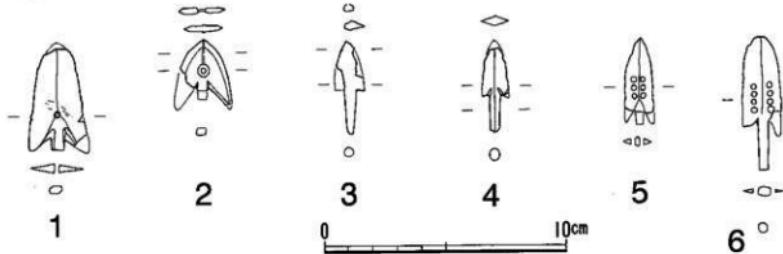
銅鏡は大きく穿孔の有無で二種類の形態がある。穿孔を有するものが、1・2・5・6の4点、無穿孔が3・4の2点である。

無穿孔の形態は從来からの銅鏡の形態を引くもので、3は細長い三角状の本体で、長い茎が付けられる。本体の両側面の一部を欠損しているが、長さ3.8cm、推定巾1.2cm、茎は長さ1.8cmを計測する。4もまた3と同様な形態の本体であるが、茎の付く基部が少し凹むようである。本体と茎の両端を欠損するが、残存値をみると、長さ3.5cm、最大巾1.1cm、茎1.6cmを計測する。两者ともに本体断面は菱形、茎は円形を呈する。

穿孔のある4点のうち、1と2は大型のもので、本体の中央に一ヶ所、茎の基部近くに穿孔される。他は多孔鏡と呼称されるもので、5は6つ、6は8つの穿孔が認められる。

1は両端を欠損するが、先端が丸味をおびた三角形状を呈し、基部は凹む。穿孔は稜線の交点、本体の最も厚みのある位置に施される。残存する値は、長さ4.2cm、巾2.3cmを計測し、本体断面は中央が高い菱形、茎部は面取りされたため多角形となっている。

2は巾広の三角形、基部が凹む形態を呈し、本体の側面は先端から丸みをもつ。茎は根元から欠損する。本体断面は他の5点とは異なり、本体は2mmで一定の厚みをもち、端部で両側から斜位の面取りを行う。茎は断面四角形を呈する。ちなみに他の5点は、中央が最も高く、先端に向かって薄くなり縁は尖る。2は下半が欠損するが、参考として残存する値を示すと、中央部長さ2.1cm、穿孔の断面位置巾1.9cmを測る。この5は巾広く、三角形状の形態が顕著であり、他の5点とは大きく異なる。穿孔は上面で直径5mmあり、これは1のほぼ倍となっている。



第28図 銅鏡実測図（昭和57年度出土）

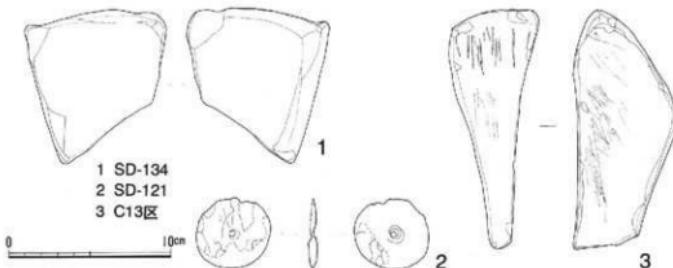
多孔鐵5は、細長く基部が凹む4をやや大きくしたような形態を呈するが、しかし本体の巾は穿孔される範囲では一定しているようである。下半は大半を欠損する。穿孔は中央部の稜線をはさみ、二個づつ、二列に並ぶ。本体断面は菱形、厚みは4mmである。残存する長さは3.1cm、最大巾1.1cmである。

6は8箇所の穿孔が見られる多孔鐵であり、本体先端は丸味をもち側面の巾は一定である。基部は凹み、断面が丸い茎先端を欠損する。本体の断面は菱形で厚みは4mm、巾1.6cm、残存長5.5cmを計測する。

石製品（第29図）

砥石二点と紡錘車一点を図示した。1と3は砥石である。1は溝SD134から出土した。一方を欠損しているが、方形で各々の面に研磨された痕跡がみられる。長さ9.5cm、巾8.8cmを示す。3は使用により一方が極端に細くなる。C-13区から出土したもので、全体に長方形の形態を呈する砥石と思われる。各々の面には使用痕跡が顕著に認められる。最大の長さは14.8cmを計測する。また図示したように一定方向を示す細かい擦痕が顕著に認められる。

2は多量の土器を作成SD121から出土した紡錘車であり、一部研磨されるが、調整段階の叩打痕が多く残す。中央の穿孔は、直徑3.5mmで両側からあけられている。縦4.3mm、横4.5mmとはば円形で、最大の厚みは3.5mmを示す。



第29図 石製品実測図

第IV章 古代の遺物

今回の調査においては奈良時代末から平安時代の須恵器が出土している。これらは第30図と図版33に掲げた。これらの出土状態は図版23に示すとおり、同一レベル面の左側にまとまった長頸壺が4個体、長頸瓶1個体が集中して出土する。検出段階ではこれらは平面的に広がって分布し、かつ掘り方を伴う様相も認められなかった。このことから包含層出土遺物として扱ったが、しかしその出土状況からみて、これらは一括性の高い資料と思われることから、本章を起こして説明をすることとした。個々についての観察は表2で行なつたので、以下にこれらの須恵器について概略を述べる。ここからの出土は須恵器のみであり、そのほとんどが図示したものの破片であった。

長頸壺（第30図-1・2）

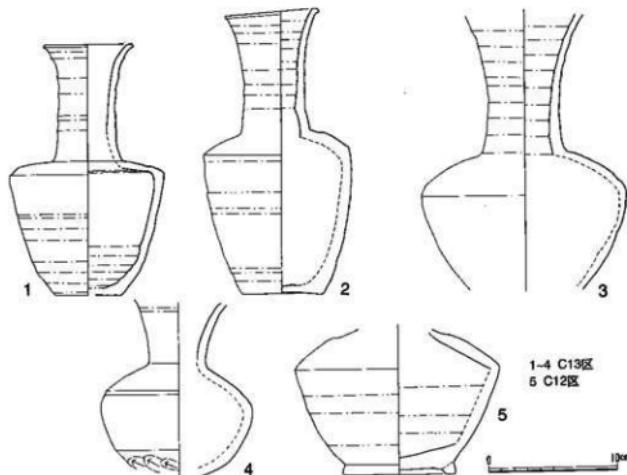
この二点は比較的の形態・法量が類似する。円筒状の頸部で口縁部はやや開く。胴部最大径はもっとも高い位置にあり、肩が強く張る特徴がある。底部は回転差切り離しによる。両者ともに焼成も良好で、調整も丁寧である。胴部最大径は、1が11.9cm、2は11.3cmで全体に細長い。

長頸壺（第30図-3・4）

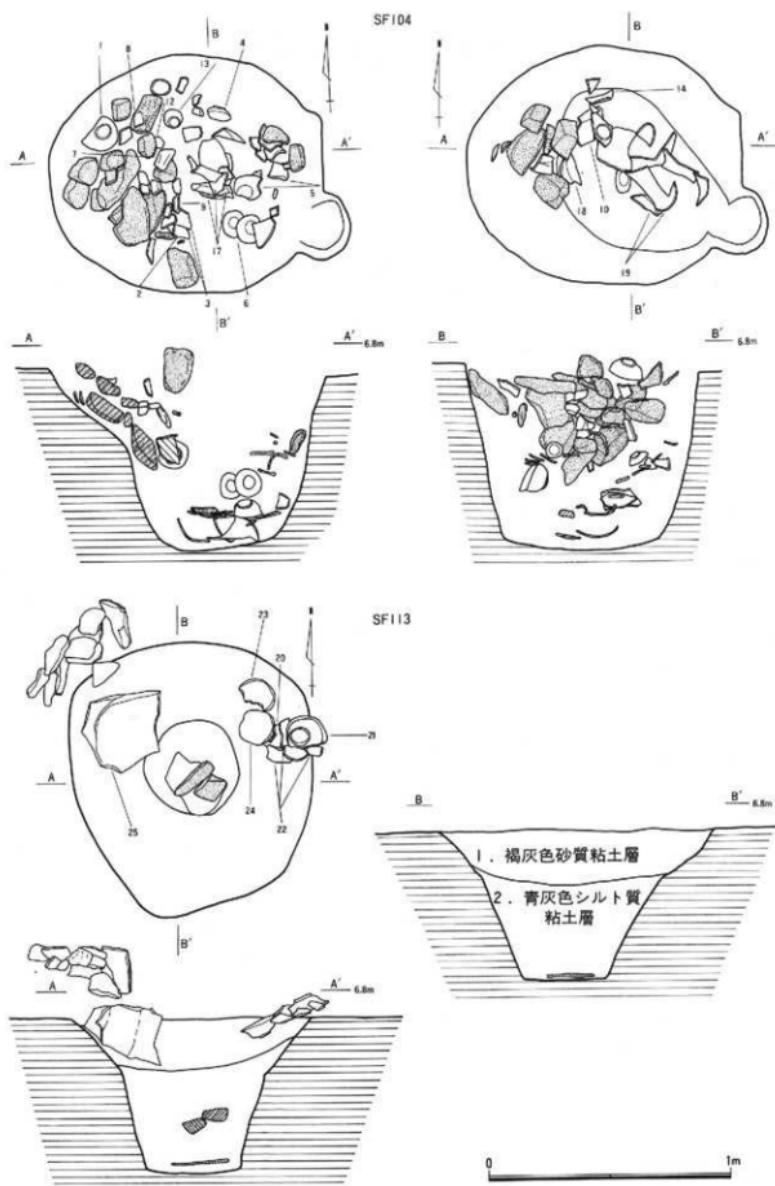
この二点も法量の差はあるが類似した形態と思われる。胴部は緩やかに屈曲し、頸部は大きく開き、その角度は1・2より大きい。いずれも口縁部と底部を欠損するため、法量と形態は不明である。胴部最大径は胴部上位にあり、3は15.8cm、4では11.7cmを計測する。調整手法は明確ではないが、4は胴下位に斜位のヘラ削りが認められる。

長頸瓶（第30図-5）

胴部より上位を欠損する。胴上位に最大径をもち肩が強く張る形態で、方形の高台をもっている。肩部の径は15.9cmを計測する。



第30図 古代土器実測図（壺・瓶類）



第31図 中世土坑S F 1 0 4・1 1 3実測図

第V章 中世～近世の遺構と遺物

第1面から第3面では古代末・中世から近世初頭の遺構が発見された。特に第1面・第2面については、層位的所見に基づき分離して調査をすすめてきたが、出土遺物を検討したところ、ほぼ同時期であって両者が密接に関係することから、本記述では一括してとりあげることとしたい。なお第2面から第3面を検出面とする古代末期から中世前半期の遺構については時期の異なる遺構であるので、頁を分かち記述する。

第1節 中世の遺構

(1) 土坑

S F 1 0 4 (第31図・図版14)

C-13区から発見された。ほぼ円形を呈する土坑で、長径1.13m、短径0.98m、深さ0.75mを測る。上面には20cm～30cm大の礫が西側に偏して発見されているが、底面まで至っていない。遺物は礫の認められない部分を中心に多く発見されたが、その内訳は、完形品5個、小皿5個、底部の一部を欠く土鍋3個、ほかに無釉陶器片（山茶碗16個体、小皿7個体）白磁碗1個体、土鍋3個体などと鉄製金具等である。陶器、土器は、上面で出土したものと底面で出土したものが接合できる場合もあり、時間差も認め得ず、一括遺物として取り扱うことができよう。また破片で出土したものは、接合して完形となる場合は少なく、土坑内の土圧の関係で破損したものというよりも、破損したものを完形品とともに投棄したものと考えられる。さらに、礫群と遺物の関係であるが、遺物が礫の認められない空間に多いことや、礫が土坑上位に集中している点など考慮し、何らかの有機質の容器に陶器・土器類を投棄し、礫を置き、あるいは詰め石としたのではないかと考えられる。覆土は青灰色粘土で上位から底面まであまり差はなかった。

S F 1 1 3 (第31図・図版16)

C-13区から発見された。ほぼ円形を呈する土坑で、長径1.12m、短径0.99m、深さ0.6mを測る。しかしながら、検出面より上位の北西隅において、長径15cm～20cmの礫群が発見された。その位置をみると、土坑に關係すると考えられるので、この土坑の掘り込み面あるいは旧地表面は、検出面より上位の礫群のレベルにあったものと想定しておきたい。このように考えるならば、土坑上位に発見された遺物は、土坑内に埋置されたものと考えられる。遺物は山茶碗6個（うち覆土中より1個体）大型壺1（底部のみ）有機質の編み物1が発見された。山茶碗は、覆土遺物を除いて接合し完形となった。出土状態や接合關係をみると、この一群の土器は発見された位置よりやや上位にあって二次的に移動したのではないかと想定される。また正位置のものと伏せたものの両者がある。なお大型壺は覆土遺物や包含層遺物との接合關係もあまり認められなかったことから、当初より完形品で埋置された可能性が少ないものと思われる。

覆土は下層に青灰色シルト質粘土層が、上層に褐灰色砂質粘土（わずかに炭化粒子を含む）であった。なおこの土坑は、SF104によって切られている。

(2) 小竪穴遺構

S X 1 0 5 (第32図)

D-10区で発見された。北側は未発掘区に延びているため全容は不明であるが発見面での長さ2m、巾1.4m、深さ0.15mを測る。柱穴や床面は認定できなかった。底面から山茶碗が3個体ほど発見されているた

め、古代末・中世の遺構と考えられる。

(3) 溝状遺構

S D 1 1 0 (第34図・図版17)

SD108の下層に発見された。土層検討したところ、SD108の底面が本遺構を覆っているため、前者の遺構より古いことが判明した。なお、南側については、SD108の覆土と区別がつけ難く、両者の関係は不明であった。調査区内で4.8m、巾0.5m、深さは0.25m～0.35mを測る。

出土遺物には、小皿（白瓷系）かわらけ小皿、土錐各1点などが発見されている。古代末～中世の遺構であろうか。

S D 1 1 8 (第35図)

C・D-10区から発見された。発掘区内では長さ10.1m、巾0.6m、深さ0.15m～0.1mを測る。本遺構内北側では、底面に密着して山茶碗片が発見されており、覆土中にも、常滑、渥美、湖西の白瓷系製品の破片が出土した。なお、近世陶器が含まれていないことから白瓷系製品の時期は古代末・中世であり、遺構もこの時期と判断される。

第2節 近世の遺構

(1) 掘立柱建物跡

柱穴状ピットが多数発見されている。なかには柱や柱根の残存するものも認められるので、建物を想定できないかと様々な検討を加えた。このうち、柱穴状ピットの並列するものについて、ピットの規模や分布状況からたとえ一列であっても横列ではなく、未発掘区に延びることも想定し、建物跡と判断した。

S H 0 1 (第32図)

第1面から発見されたものでD-9区南側に位置する。発見された際、柱の遺存状態も等しく、柱列もほぼ直線に並列することから、東西3柱間の掘立柱建物跡の一角と判断した。このように考えると、本遺構の主体部分は北側の未発掘区にのびているものと推定される。柱穴1～2の間が1.9m、2～3の間が2.1m、3～4の間が1.9mを測る。

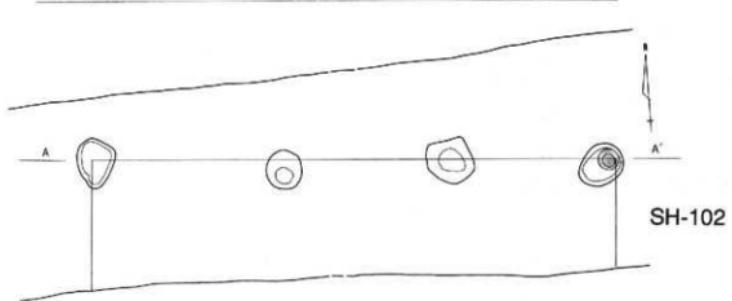
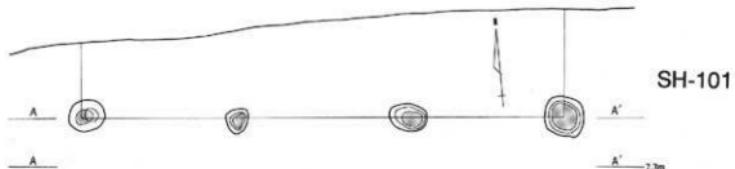
柱穴からは、弥生、中世陶器の細片が出土したのみで、遺構の年代を知る手がかりは得られなかった。

S H 1 0 2 (第32図)

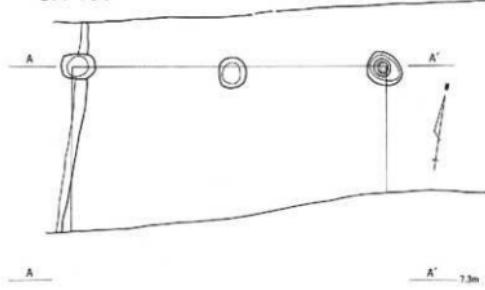
第1面から発見されたもので、C-10区・C-11区南側に位置する。発掘された際、柱の遺存するピットが認められ、それより西側に等間隔の柱穴がほぼ直線で並ぶことにより、東西3柱間の掘立柱建物跡と判断した。本遺構の主体部分は南側の未発掘区に延びているものと推定される。建物規模は一辺のみ明らかであるが、6m（3間）柱間2.1m～1.9mを測る。柱穴の規模は、40cm～50cm、深さ0.15m～0.5mである。遺構の年代は柱穴（SP330）から志野鉄絵皿片が出土したことから江戸時代前半と推定される。

S H 1 0 3 (第32図)

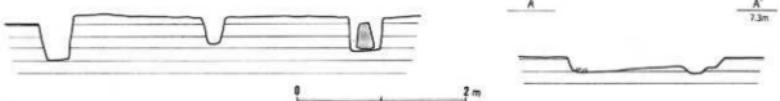
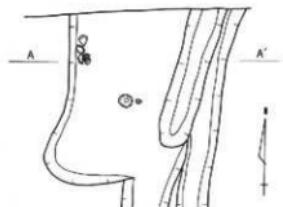
第2面で発見されたものでC-11区・C-12区南側に位置する。一個のピットに柱が遺存し、西側に同様のピットが等間隔で並ぶため、掘立柱建物跡の一角と判断した。本遺構の主体部分は南側に延びていると推定される。建物の規模は一辺のみ明らかであるが、3.6m（2間）柱間1.8mを測る。柱穴の規模は、30cm～40cm、深さ0.25cm～0.5cmである。遺構の年代は柱穴から寛永通宝3枚（SP335-2枚、SP336-1枚）、景祐元宝1枚（SP335）が出土したことから、江戸時代前半と推定される。



SH-103



SX-105



第32図 近世遺構実測図 (SH-101~103・SX-105)

(2) 桶埋設遺構

S X 1 0 1 (第33図・図版18)

隅丸方形を呈する土坑に桶2基を埋設したもので、北側を排水路により破壊されていた。土坑は長径2.28m、短径0.82mを測るが、上部が消失しているので、全体の高さは不明であるがタガの位置からすれば、0.6m前後を推定できる。覆土は褐色を帯びた砂質土で、桶底に近い部分では暗青灰色をおびる。桶底の下と側面には、青色粘土層、暗青灰色砂質粘土を敷いており遮漏防止と考えられる。桶材は針葉樹と考えられ、竹製のタガを下部に三段止めてあった。

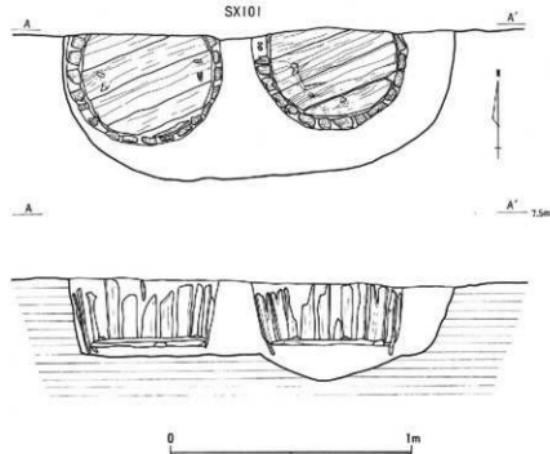
出土遺物は、弥生土器・山茶碗の小片で直接本遺構の年代を示すものではなかった。

(3) 溝状遺構

第1面・第2面から20条の溝状遺構が発見された。そのうちSD103は、前回の調査で発見されたSD09の西側にあたると考えられる。これらの溝状遺構は、調査区の一定区域で集中する傾向が認められ、時間的にも近接した時期に掘削されたと判断されるものと、調査区東側で散漫な在り方を示し、前者より新しい時期に掘削されたと判断されるものが認められた。

S D 1 0 1

C-10区西側においては6条の溝状遺構が集中して発見された。本遺構もその一つであるが、第1面を発見面とするため、その中でも新しい時期に掘削されたと判断される。なお、第2を発見面とする



第33図 近世桶埋設遺構 S X 1 0 1 実測図

SD119・120と平面的には重複しているため、それらの遺構を改修している可能性もあるが、明らかではなかった。調査区内で長さ10.4m、巾1.2m~1.4m、深さ0.2m前後を測る。覆土上位から20cm~10cm前後の礫が散在的に分布しているが、両壁両側に多い。

出土遺物は、壺・摺鉢・天目茶碗・平鉢などの小片が発見されたが、その量は少ない。

S D 1 0 3

C-8区から発見されたもので、57年度の調査において検出されたSD09の西壁と考えられる。両年の調査区内で長さ5m、巾1m~0.9m前後であることが確認された。覆土中より内耳鍋の小片が発見された。

S D 1 0 4

C-13区で発見されたもので、SD105・106とともに掘削面は上位にある。長さ3.2m、巾0.4m、深さ0.08m~0.1mを測る。覆土中より山茶碗・土鍋などの細片がわずかに認められた。

S D 1 0 5

北側が円形（直径1m）に広がる形態で、長さ4.8m、巾0.25m前後、深さ0.05m~0.1mを測る。覆土中より常滑製品（窯か壺）かわらけ小皿片が出土した。

S D 1 0 6

本遺構のみが東西方向に走る。途中一端浅くなり消失するが、本来連続していたと考えられる。長さ17m、巾0.2m~0.1m、深さ0.03m前後を測る。覆土中より、かわらけ小皿片が少量出土した。

S D 1 1 5

発掘区南側に延びた溝で、全体の様相はつかめなかった。長さ1.2m、巾0.25m、深さ0.03m前後を測る。遺物は認められなかった。

SD104・105・106・115の溝状遺構は、先に陳べたに散漫な在り方を示す浅い溝であるなど、共通した特徴をもつ。なお発掘区南壁で確認できたSD115では近世以降の土層を振り込み面としているので、本来これららの溝は一定の深さをもっていたと考えられる。年代を示す直接の資料は乏しいが、掘削面からすれば、近世以降と判断される。

S D 1 1 1

S-12区において、6条の溝が発見されたが、本遺構もその一つである。第1面から検出され、発掘区内で長さ9.3m、巾0.7m、深さ0.2mを測る。東壁にそって、ほぼ0.8m間隔で杭が打たれている。なおSD109を切って掘削されているので、それより新しい遺構と考えられる。出土遺物は、かわらけ小皿・常滑製品（窯か壺）の小片がわずかに出土した。

S D 1 1 4

C-12区第1面から発見された。発掘区内で長さ5.4m、巾0.13m~0.3m、深さ0.08mを測る。第2面を発見面とするSD108と平面的に重複しているため、この遺構を改修している可能性もあるが、明らかではなかった。遺物は認められなかった。

S D 1 0 7 (第34図)

C-12区第2面を発見面とするもので、SD108・SD109とともに集中することから、時間的に近接して掘削されたと判断される。新旧関係をみると、SD108を切って掘削されているので、それより新しいと考えられる。発掘区内では、長さ9m巾0.9m深さ0.2m~0.1mを測る。なお一部に明瞭な段差が認められるので、改修されたものと判断された。西壁の一部に杭が打たれていた。土鍋片・染付（明末期？）内耳鍋・灰釉小皿などの小片が少量出土した。

S D 1 0 8 (第34図・図版17)

SD107の東側に発見されたもので、底面に何段かの段差が認められるので、3~4条の溝の重複と考えられた。しかしながら、土層観察では覆土に顕著な差異が認められず、対応する壁面も認められなかつ

たので、これらの段差は近接した時期に改修した痕跡と判断しておきたい。長さ8.9m、巾1.3m～0.5m、深さ0.3m～0.1mを測る。おそらく巾0.5m前後の溝を3回程 改修しているものと思われる。出土遺物は、かわらけ小皿・山茶碗片が少量認められた。

SD109 (第34図・図版17)

SD108の東側に位置する。新旧関係をみると、SD108を切っているので、それより新しいと考えられる。ただしSD107との関係は不明といわざるを得ない。また南側ではSE102と切合っているが、両者の廃棄が同時期と考えられる。長さ9.2m、巾0.9m、深さ0.3mを測る。内耳鏡・天目茶碗・土錠各1個が出土している。

SD112

SE103の西側からはじまり、C-10区の中央付近から大きく屈曲しながら、南側へ続く。長さ18m、巾1.3m～0.8m、深さ0.4m～0.05mを測る。またSE103をさけるように屈曲することから、両者の間に密接な関係を想定できる。底面は2箇所で段差をつけており、落差をつけることによって、排水の便を考えたものと想定された。なお壁面から溝内に向かって4本の杭を打ちつけた遺構が発見された。杭と杭との間隔は40cm前後を測る。踏み板は認められなかったが、足場のような性格を考えておきたい。また礎堤と接する付近では、一部礎が本遺構内中位に落下しており、両者の同時存在が確認されている。

出土遺物には、かわらけ小皿、内耳土鍋、擂鉢などの破片が少量発見された。なお覆土中より建築材(角材)が発見されているので、本遺構の埋没した段階に建物が建てられていたと判断される。

SD113

C-11区第2面で発見された。SE103東側に付設刷る溝で、長さ1.25m、巾0.8m、深さ0.08mを測る。出土遺物には弥生土器の小片がわずかに認められた。

SD116

C-10区第2面においてSD116～120とともに集中して発見された。SX105と切り合っているが、新旧関係は不明であった。なお南側部分はSD112によって切られている。残存長4m、巾0.55m、深さ0.1mを測る。出土遺物には、山茶碗・土鍋片が少量発見されている。

SD117 (第35図)

SD116の東側に位置し、排水溝によって南側を破壊されている。残存長5.8m、巾1m～0.9m、深さ0.1mを測る。近接するSX105を切っているので、それより新しいと判断される。出土 遺物には山茶碗・小皿(山茶碗系) 土鍋などの破片が少量出土した。

SD119 (第35図)

SD118の東側において発見された。発掘区内では、長さ10.3m、巾0.5m～0.3m、深さ0.15m～0.1mを測る。出土遺物には弥生土器小片が発見されたのみであって、時期を判断できなかった。

SD120 (第35図)

SD119東側において発見された。発掘区内では長さ10.4m、巾0.7m、深さ0.15m～0.1mを測る。南側部分はSD119と壁面の区別は困難であった。出土遺物には内耳鍋片など少量出土した。

(4) 井戸状遺構

SE101 (第36図・図版19)

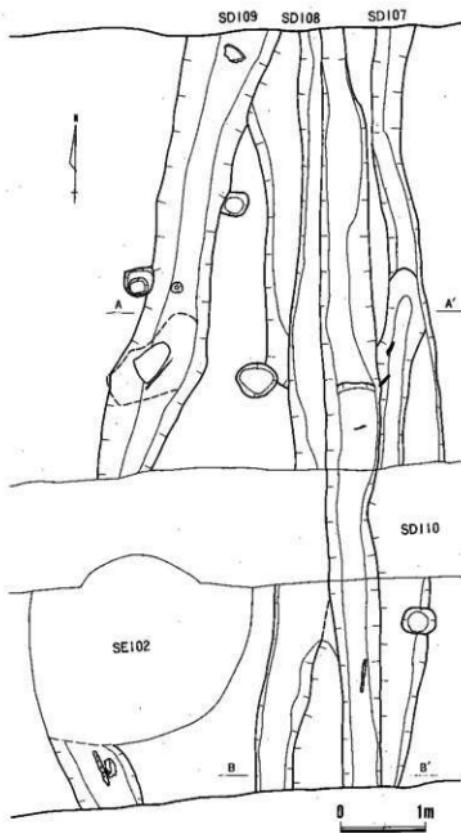
C-12区から発見された。長径1.44m、短径1.33m、検出面からの深さ2.9mを測る素掘りの井戸である。覆土は上層より青茶褐色砂質粘土、茶灰色砂質粘土、青灰色粘土と続く。土層観察では井戸側や地上施設について明瞭ではなかった。覆土中から漆器椀片、土鍋片、羽釜とともに自然木(枝を払っている)が出土した。

S E 1 0 2 (第36図・図版20)

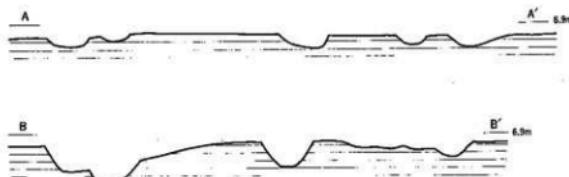
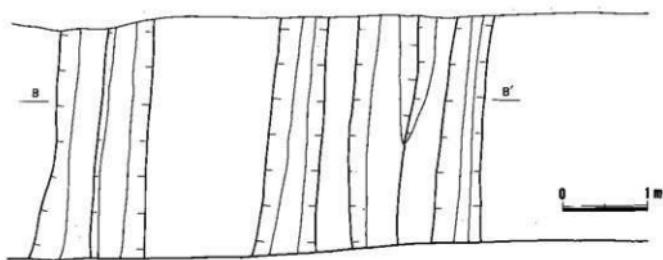
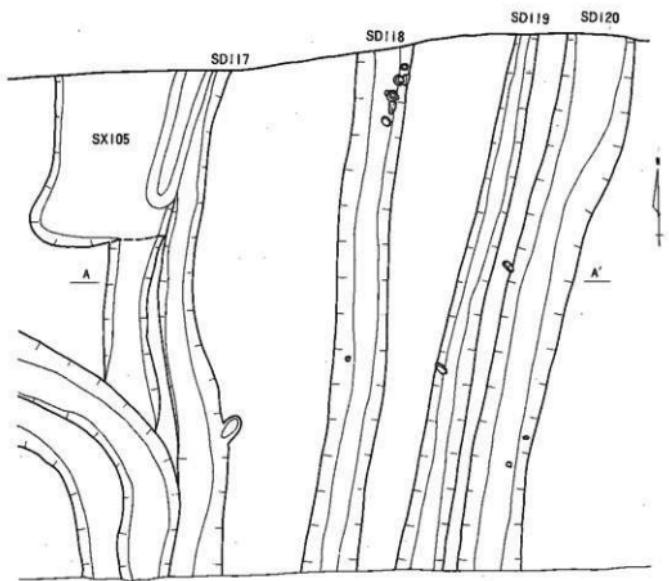
C-12区から発見された。長径2.58m、短径(残存径)2.16m、深さ2.9mの素堀の井戸で、井戸側や地上施設は明らかではなかった。なお北側を農業用水路で破壊されていた。上面からは、大小(長径10cm~50cm)の礫とともに陶磁器、かわらけ小皿などの土器類が出土した。ま本遺構はSD109と切り合っているが、土層観察の結果新旧関係は明瞭ではなかった。しかしながら、本遺構の礫がSD109にまで及ぶことから、両者の廃棄が同時期に行なわれたことは確実であろう。このことから、両者の関係は近接した時期か、あるいは同時期ではないかと考えられる。

出土した遺物は、かわらけ小皿31個体分、志野鉄絵小皿1個、白磁小壺1個、初山焼鉄釉小皿、同匣鉢、内耳鍋3個以上、三足付香炉(あるいは火鉢)1個、常滑壺1個、志戸呂焼匣鉢1個、伊万里焼(蓋片)1個等が出土している。これらの遺物は、接合して完形となる遺物は少なく、礫とともに廃棄された破片であると考えられる。なお礫については、井戸の地上施設(石敷施設)を解体したものという可能性もあったが、明瞭ではなかった。ほかに中位から曲物が出土している。

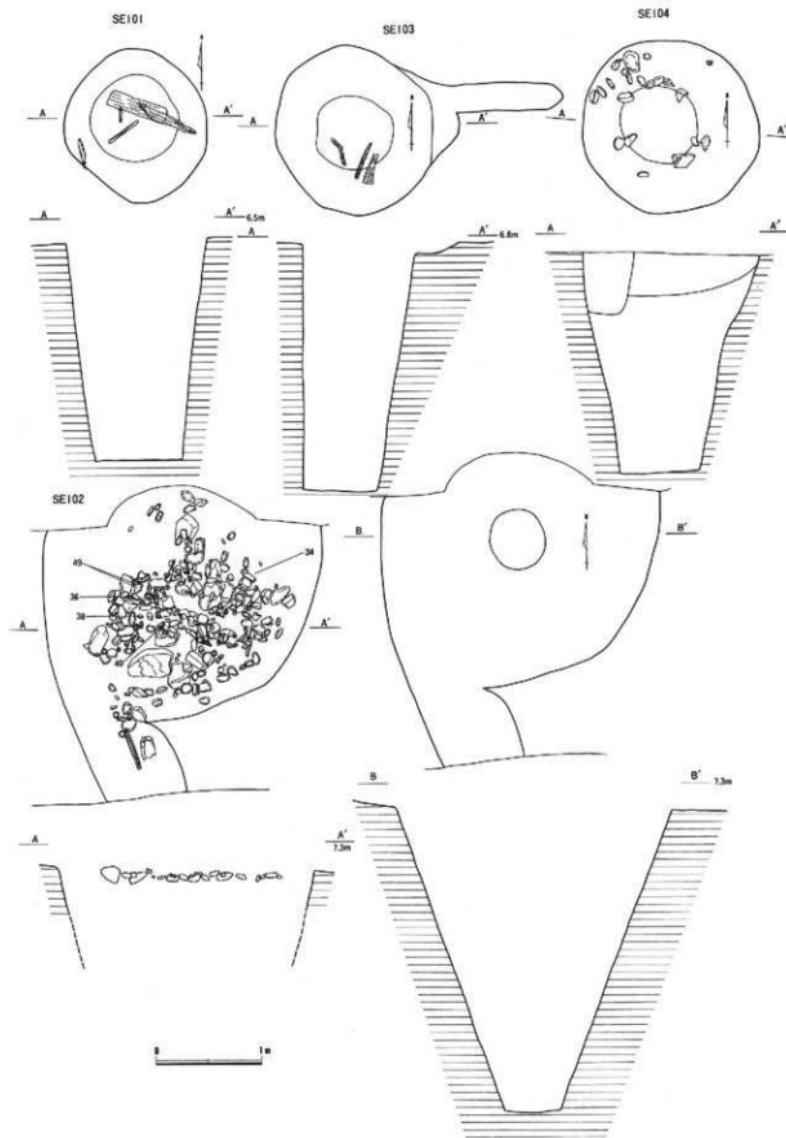
S E 1 0 3 (第36図・図版19)
C-11区から発見された。長径1.72m、短径1.58m、深さ2.27mを測る素堀の井戸で、浅く短い溝(SD113)が付設する。またSD112は本遺構をさけるようにして屈曲しており、両者の間に何らかの関係のあることも否定できない。さらに本遺構が埋まった段階において、近世初頭~戦国期の

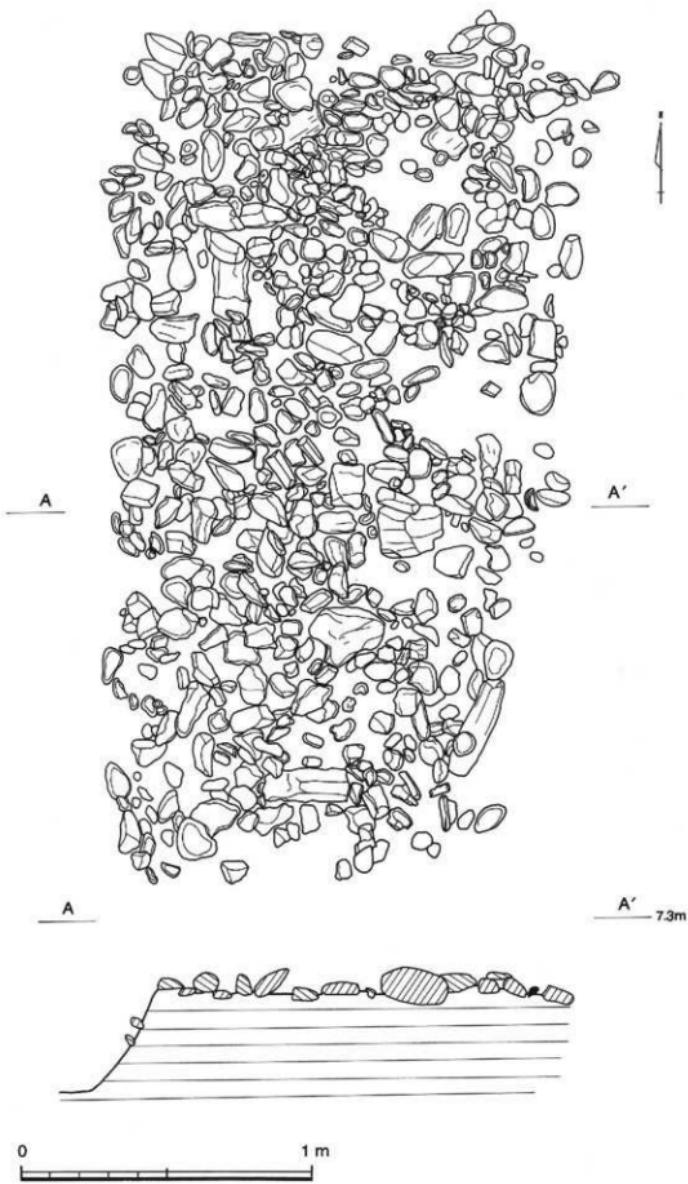


第34図 近世溝 S D 1 0 7 ~ 1 1 0 実測図



第35図 近世溝SD117~120実測図





第37図 磨堤実測図

柱穴が掘り込まれていることから、年代をそれ以前におくことができよう。覆土中より鎌倉期の山茶碗片、古瀬戸後期の灰釉小皿、大窯期の天目茶碗片のほか、丸太材、自然木が出土している。

S E 1 0 4 (第36図・図版19)

C-13区から発見された。長径1.65m短径1.64m深さ2.04mを測る素堀の井戸である。また土層観察の結果、本造構が埋まつた段階に柱穴状ピットSP242が掘り込まれていることが判明した。覆土上位から30数個の10cm~20cm大の礫が出土した。遺物は古瀬戸後期の筒型容器、天目茶碗などの破片が認められた。

(5) 磨堤 (第37図・図版21)

礫群の上面はC-10区第1面より発見された。精査が進みたがって、これらの礫の一部がSD112に落し下していることが確認されたため、本来両者が同時期のもので、何らかの関係があると判断されるにいたった。また土手状に盛土して上面のみ礫を敷いている構造のため磨堤と呼称した。発掘区の範囲で南北2.8m、東西1.6m、高さ0.1mを測る。壺・摺鉢・天目茶碗・平鉢などの破片とともに灰釉小坏(1/3欠)が発見された。なお礫は長径25cmのものがあるが、規則性はあまり認められない。性格については、明らかでなかったが、先述したように本造構がSD112が溝として機能している段階に、少量ながら什器・陶器片とともに礫が敷かれていることからすれば、日常的に使用された可能性が強い。

第3節 中世～近世の遺物

第1面から第3面にかけて、すでに述べたように古代末から近世の遺構が発見された。ここでは、これら造構や包含層から発見された当該期の遺物をとりあげるわけであるが、個々の遺物に関する観察は別掲の観察表にゆずることとした。以下の記述のなかで、それぞれ遺構単位にとりあげることとした。それは陶器・土器という個々の属性を越え、本造構のいくつかのタイム・スケールの中で、どのような伴出関係が見いだせるかという点に深くかかわるからである。

(1) 中世の遺物

S F 1 0 4 (第38図・図版33・34)

山茶碗

口径17.9cm~16.5cm、器高6.2cm~5.4cmを測る。口縁部はわずかに外反するものと、つまみだして緩やかな段をつくり外反するものがある。腰部はゆるやかな丸みを帯びており、高台脇が明瞭な例と不明確の例が認められる。高台は断面不定形で厚く外側に聞く形態で三角形を呈するものは認められない。また高台と坏部の接合部を横ナデするため糸切り痕が消えているものが多い。胎土は砂質を帯び、小石、長石等の吹き出しあほとんどない。色調は青い灰色を呈するもの、淡灰色を呈するもの、ほかに灰白色を呈するものも認められる。また疊付き、高台内に砂が付着するものが認められるが、モミ痕の付着刷るものはきわめて少ない。口縁部の輪花は認められ、灰釉のつけ掛けは2例にとどまるが、いずれも発色がきわめて悪い。

小皿

高台をもつものと無高台のものの両者が認められる。その内訳は完形品では5点ともすべて無高台であり、破片では高台のつく小碗タイプ5点に対し、無高台2点であるので全体では小碗タイプ5点に対し無高台7点となり、無高台優位の現象を見せている。

土鍋

球形を呈する胴部に大きく外反する口頭部をもつ。口端部は折り返して肥厚させている。近年、この形態の土鍋について三重県伊勢地方から多く出土していることから、鎌倉地域の研究者の間で、伊勢型

鍋と呼称されている。煮沸形態の土器であるため薄手につくられている。胎土はきめの細かい粘土に粗い砂や小石粒を多く含んでいる。胴部下位は小口状工具で薄くなるまで搔きとられているが、未調整部分では接合部に指頭押圧痕が認められているので、胴部上位・下位で分割して成形したものと推定される。胴部上位は内外面ともにハケ目調整、口頸部は内外面ともに横ナデのいわゆる仕上げ調整が認められる。

白磁碗

口縁部を外反させ、輪花風の小さな凹みをもつ。体部内面には細かい描描文（いわゆる猫描文）が描かれている。釉調はやや黄味を帯びた灰白色で、胎土は灰白色を呈する。

S F 1 1 3 (第38・39図・図版34・35)

出土遺物には山茶碗・壺がある。

山茶碗

口径19.5cm～15.6cm、器高6.1cm～5.5cmを測る。口縁部はわずかに外反するものと、つまみ出してゆるやかな段を作り外反するものがある。腰部はゆるやかな丸みを帯びたものが多く、高台脇が不明瞭となっている。高台は断面三角形に近く、外側に開き気味となっている。豊付きはやや厚く作られており、高台と坏部の接合部を横ナデ調整するため、糸切り痕が消えているものと、わずかに残るものがある。胎土は砂質をおび、小石・長石等の吹き出しあはほとんどない。なお三ヶ所ほど灰釉をつけ掛けするが輪花（三ヶ所）の例は2例にとどまる。また高台内豊付きにほとんどモミ痕は残っていない。

壺

底部のみ残存していた。下胴部外面は、接合部を叩いて削しているが、内面は未調整である。いわゆる渥美系壺である。

S F 1 0 2 出土人面陶器 (第38図・図版35)

弥生時代の土坑であるSF102から発見された。山茶碗の見込みと高台内に墨書きでマンガ風に人面が描かれている。底径は7.5cmを測る。底部のみが残されていること、破損部や高台のとれた部分にも墨書きが見られることから、使用を経て廃棄されるようになってから描かれたものと考えられる。見込み部に描かれた表現をみると、歪んだ顔、大きく口をあけ、歯と思われる表現が描かれていることから、笑っている表情が読み取れる。また眼元も心なしか穏やかである。高台内の表現は逆に目をつり上げ、鼻も大きく開き、口元も踏張っている。対象的に怒りの表現ではないだろうか。

山茶碗は、高台断面も不定形で低く、13世紀中葉～後半と考えられる。使用年代を考慮し描かれた時期は若干後出すると考えておきたい。

(2) 近世の出土遺物

掘立柱建物跡出土遺物

S H 1 0 2

施釉陶器

志野鉄絵皿が出土している。口縁部が外反するタイプで、圓線と文様が見込み部と外部内面に描かれている。器面にはわずかに貫入が認められる。

S H 1 0 3 (第41図・図版36)

中国銭と寛永通宝が4枚発見されている。数値、字体などのデーターは別表に掲げた。両者の古銭が同時に流通していた頃は、江戸時代前期と考えられる。

井戸状遺構出土遺物

S E 1 0 2 (第39図・図版35)

施釉陶器・白磁・土師質土器（からわけ小皿・土鍋・火鉢）窯道具（サヤ）が出土している。

施釉陶器

美濃の志野小皿・鉄釉輪はげ小皿・初山焼鉄釉輪はげ小皿が出土した。志野小皿のうち1点は、高台内露胎のほか釉がけされ、見込み部に笠葉と二重の園線・口縁部の下位に一重の園線が描かれており、いわゆる鉄絵小皿の範疇に入る。高台脇には目痕（胎土目）が残っている。高台はケズリ出しの基筒底である。ほかの1点は、口縁部を摘み出して外反させた器形で、高台内露胎のほか釉がけされている。高台はケズリ出しの基筒底である。鉄釉輪はげ皿はいずれも小破片である。低平でケズリ出しの基筒底で器形で、高台内と見込み部は露胎である。美濃の皿は露胎部に鬼板化粧掛けされている。

白磁

高台のつかない小坏で、底部は露胎である。この器形は寡聞にして県内では類例を知らない。

土師質土器

内耳土鍋はその特徴により二形態に分けることができる。48は、平底の底部をもち底部より口縁部に直立気味に立ち上がるタイプであるが、その形態は、いわゆる「ほうろく」に近い形態を呈する。47は底部を欠損しているので不明であるが、半球状を呈するカーブからすれば丸底と推定される。また内耳部分は紐状に延ばした粘土を継ぎにとりつけ、体部を内側から押圧して中空部を作っている。このため内耳部分の外側は明瞭な段や屈曲部を持っている。

火鉢

口径24.8cmを測る小型製品であることから、手あぶりとして使用されたものと推定される。また底部には三脚を付ける。内面と口縁部にススが付着しているが、炭などを燃やしたススとその上に油を燃やしたススがあり、油を燃やしたススは胴外面上位まで垂れている。脚内面の凹み部には、これらのススは付着していなかった。

かわらけ小皿

出土したかわらけ小皿は30点前後を数える。そのうち、いわゆる赤かわらけが1点あるほか、すべて白かわらけであった。底部を比較すると、本遺構出土の赤かわらけはロクロ一本引きによって成形され、底部糸切り手法を用いている。一方、白かわらけは底部を円形につくり円周部の粘土を押圧して口縁部をつくる、いわゆる手捏ね成形されている。多数を占める白かわらけの法量をみると、口径11cm～8.9cm、器高2.5cm～2.1cmを測り、規格化された製品でないといえ、それ程差異は認められないことから、ほぼ同じ用途として用いられたと判断される。なお口縁部にススの付着した灯明皿は少数であることから食器として使用された例が多いと判断される。

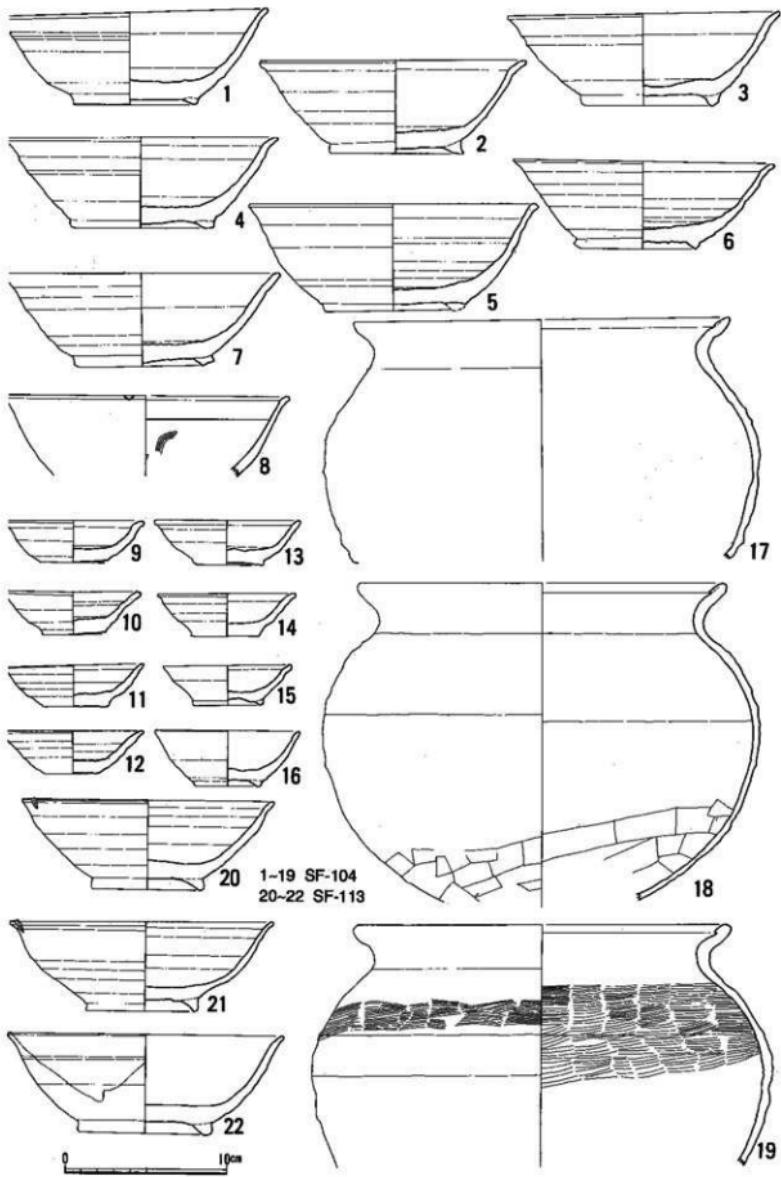
溝状遺構出土遺物

施釉陶器・かわらけ・土鍋片が出土しているが、いずれも小破片で量的にも少ない。そのうち図上復元できる資料を中心に記述してみたい。

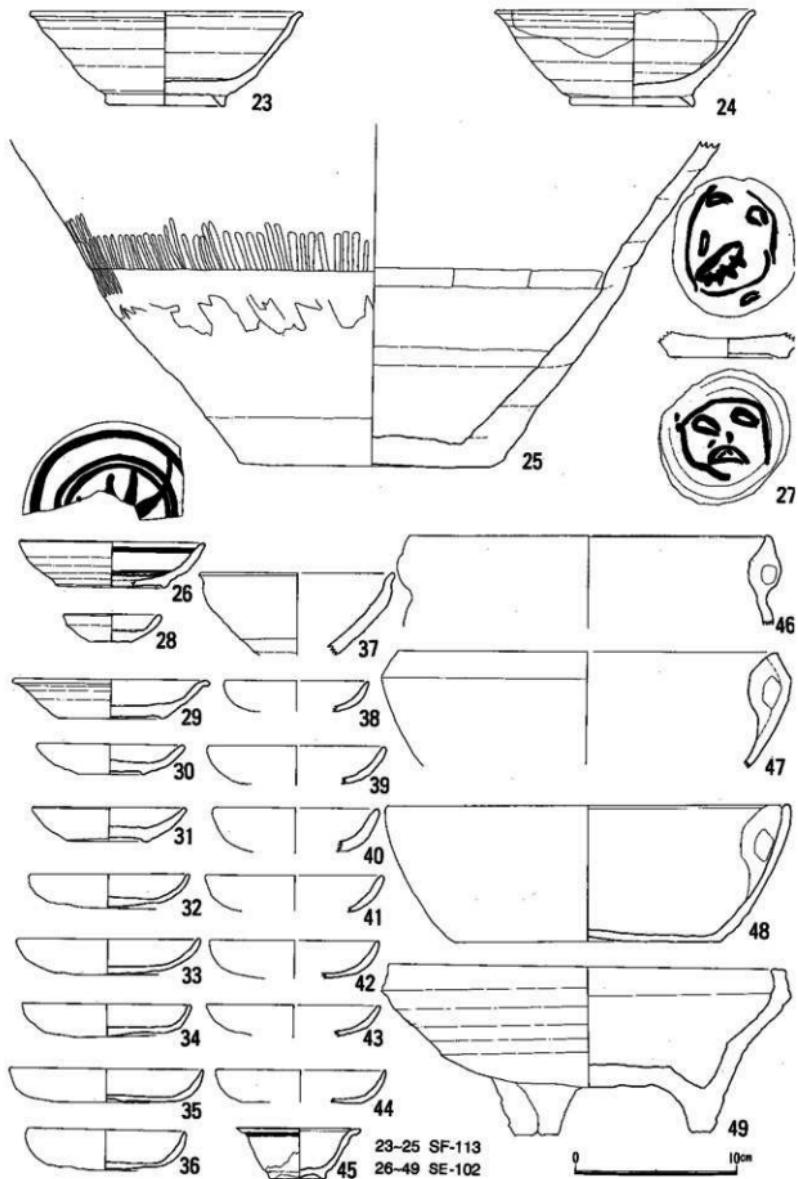
S D 1 0 9

施釉陶器（第40図-50）

ほぼ完形の天目茶碗で、口径に比べ器高が高く、口縁部下位にくびれを持つタイプである。高台はケズリ高台で輪高台に仕上げている。高台脇の屈曲部も鋭角的である。露胎部には化粧がけは認められない。



第38図 古代末～中世土器実測図 I (SF104・113)



第39図 古代末～中世土器実測図II (S F 113・S E 102)

SD112

内耳土鍋

平底で器高が高く、いわゆるほうろく形とも異なる。脚は付けられていない。ほかに摺鉢・土器小皿の小片が若干出土している。

礎堤出土遺物

施釉陶器

口縁部の大きく外反した小杯で灰釉がつけがけされている。高台部はケズリ高台で口径に比べ小さく作られている。美濃地方の古窯跡では登窯Ⅰ期に帰属させており、17世紀代という年代が考えられる。このほか小片ではあるが、摺鉢・天目茶碗・平鉢などが発見されている。

ピット出土遺物

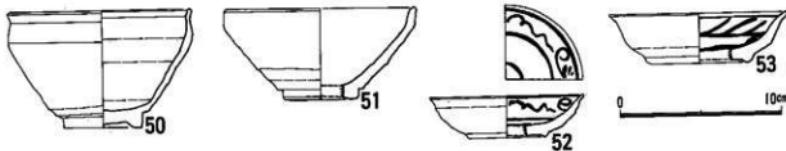
ピットから出土した遺物は、土器片・土錐・古銭などがある。そのうち土器片はいずれも小破片であり、別掲の表のように時期的に弥生～近世までも含んでいる。発見面からすれば、第1面から第3面のピットは、いずれも古代末～近世の時期と考えられるので、これらの出土遺物は、ピット掘削の時期を直接示さない資料も含まれている。ピット掘削時期を反映していると考えられた資料を中心に述べてみたい。

SP330

施釉陶器（第40図-53）

志野鉄絵小皿で、SE102出土遺物に類似がある。なお異なる点として、口縁部が折り返されたいわゆる端反りである点、見込み部と内面の文様が異なる点がある。こうした端反りの小皿では内面に文様の描かれる例は少ない。

このほか、いくつかのピットでは土錐が出土しているが、計測値など別掲の表に掲げた。ピット掘削の時期を直接示す資料ではない。



第40図 陶器実測図

SP367

古銭（第41図・図版36）

中国銭が2枚出土している。1枚は元祐通宝、他の1枚は、乾・重、と2字分のみ残っており、乾元重宝と考えられる。

包含層出土遺物

第1～第3面の遺構を伴わない出土した遺物は、大破片や特殊遺物を中心にレベルとポイントを落とした。このうちC-12区とC-13区の境界付近の第1面・第2面においては、施釉陶器・内耳土鍋・かわらけを中心とした中・近世遺物が集中して発見されている。

施釉陶器

体部がゆるやかに内湾し口径に比べ器高が低い 形を呈する天目茶碗が出土している。本遺構では大窯期、登窯期を中心とした天目茶碗が出土しているが、本例のような古瀬戸後期までさか昇る例は少ない。

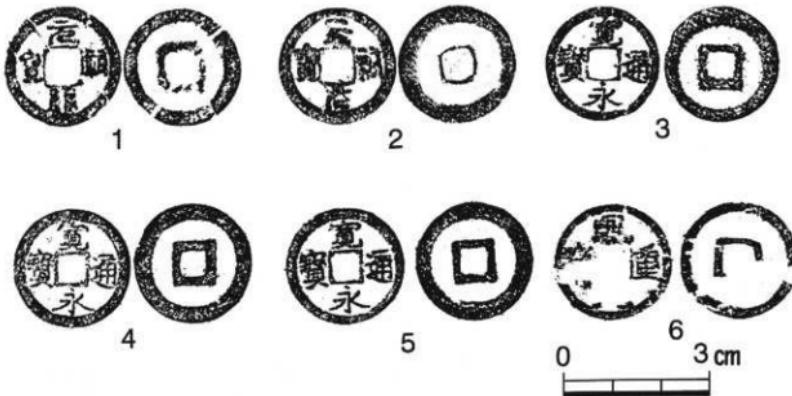
内耳土鍋

半球形の肩部で、胸部から口縁部にかけては「くの字」に外反する器形である。SE102などに見られたような平底ではなく、丸底タイプの資料である。

かわらけ小皿

小破片で全部を知り得ないが、器高の低い白かわらけである。

以上の陶器・かわらけは、まとまって出土している。おそらく周辺には柱穴状ピットが集中することから、掘立柱建物跡の存在を推定できる。おそらくこれらのピット群にかかる遺物群ではないかと推定できる。



第41図 古銭拓影図

第VI章 まとめ

今回の調査では弥生時代から古墳時代初頭と古代末・中世～近世にいたる遺構・遺物が発見された。そのうち後者の時期について、特に2・3留意すべき点をあげまとめてかえたい。

1 遺構について

椿野遺跡は、古代末・中世から近世にいたる長期にわたって営まれた集落と推定される。この間、多くの柱穴状ピットが示すように幾度となく建物が建てられたと判断されるが、調査面積の関係で3棟の江戸時代前期の掘立柱建物跡を推定するにとどまった。またそのうち、SH102-103の周辺から出土した陶器・土器片がSE102出土破片と接合したことから、両者の間で有機的関連を指摘できる。

さらにSD109についてもSE102と同時存在が推定されたことから、この一角に建物・溝・井戸という一つの生活の単位を想定できる。出土した古鏡や志野鉄絵小皿の存在から、この年代を17世紀第2四半期としておきたい。なお、57年度に調査した中世面は上限を12世紀中頃、下限を16世紀の第3四半期頃と推定できるので、兩年度の調査範囲のなかでは若干の時間的断絶がある。

また古代末・中世の遺構は、SD18、小豎穴遺構（57年度調査）土坑2、溝2以上、小豎穴遺構1（58年度調査）であった。柱穴群の一部が当該期に推定されるにせよ、中世末・近世の様相とやや異なるように思われる。この年代を伴出した土器により、12世紀中葉～13世紀代と推定しておきたい。以上のような年代をこえた遺構をみると、14・15世紀の空白が生じる。遺物上では、15世紀代の常滑の存在や、15世紀末～16世紀初頭の古瀬戸などのり存在があげられるが、その数は少ない。調査区外に別の居住域を想定できるのであろうか。

2 中世陶器・土器の編年

SF104・SF113では、いわゆる白瓷系中世陶器・土器の良好な資料を得た。このうち両者の土坑に共通して出土した山茶碗は灰釉を破風につけがけする、輪花碗が存在するなどという器形上、技術上の特徴が見られる。また出土陶器全体を包括する胎土・焼成には砂粒を含み温美層群の粘土使用をうかがわせる。以上の点から、両者の土坑から出土した白瓷系陶器は温美・瀬戸製品と判断できる。SF104・SF113の山茶碗を比較すると、すでに指摘したようにつけがけ碗が存在するがその比率は、圧倒的にSF113出土の碗に多く、SF104の碗では無釉碗が多いという違いをみせている。また口縁部の輪花はすでにSF104の段階には認められない。高台部の作りは、SF104出土碗では厚く不定形となり、高台も低くなっているが、SF113出土碗では断面三角形にちかく、高台もやや高いという違いがある。

このような碗の差異をみると、SF104出土碗はより後出的特徴をもつ一群といえよう。

一方、小皿はSF104のみ出土しているが、有高台の小碗タイプと無高台のいわゆる小皿タイプが併存して認められる。無高台のタイプについては器高2.7cm～2.5cmと深く、底部脇に屈曲部を残すもののみられる。また有高台の小碗については、高台も低く、断面形態も崩れているなど後出的特徴をもっている。

以上の特徴から、編年的位置と年代を考えてみたい。そのため大アラコ窯出土遺物（註1）東大寺瓦窯出土遺物（註2）など最も基準となる資料との比較検討を行なってみることとする。大アラコ窯の製品は、輪花、つけがけの山茶碗であるが、高台が外側に「ハ」の字状態に開き高台も高い。また口縁部の輪花も明瞭で四輪花のものが多い。さらに器形については腰部を丸く、口縁部を外反気味につくるなどの特徴が見られる。伴出した小碗の高台も断面三角形に近く、高台も高い。

他方、東大寺瓦窯の山茶碗はすでに無釉となり、輪花碗の形態は見られない。高台についても厚く、断面台形あるいは不定形につくられている。また伴出した小皿は、小碗タイプ認められず、底部脇に屈

曲部を残すものはきわめて少ない。むしろ底部から口縁部にかけては直線的につづくタイプが多いといえよう。

このような大アラコ窯、東大寺瓦窯の出土遺物と比較すると、SF104出土遺物は東大寺瓦窯に近く、SF113出土遺物は大アラコ窯に近いといえるが、なおそれぞれに異なる点もあり、むしろ両者の中间に位置するといえるであろう。従って、SF113出土遺物は三輪花碗、高台をはじめ器形上の後出的要素をもつため、大アラコ窯出土遺物より新しい時期と判断しておきたい。(註3)一方、SF104出土遺物はつけかけ碗の存在や、碗、小皿にみられる型式的特徴からすれば、東大寺瓦窯より古いといえるが、資料が少ないこともあり明確な形ではおさえきれない。今後の課題としたい。

以上の検討により、SF113出土遺物を12世紀第3四半期、SF104を12世紀第3四半期～第4四半期に位置付けてみたい。

またSF104からは、いわゆる伊勢系土鍋が出土しているが、従来の発見例と比較し、頸部がゆるやかにくびれて、外反しながら大きくひろがる。内外面にハケ目調整を残すなど異なる点もみられる。伴出した白瓷系中世陶器を中心に12世紀後半代の形態と理解しておきたい。

3 近世陶器・土器の編年

第1・2面のSH102・SD109・SD112・SE102を中心にら、瀬戸、美濃の施釉陶器、土器が出土した。従来、生産地を中心とした陶器編年があるが、それらを消費地で検証する作業はあまり進んでいないとはいはず、また陶器以外の土器については詳しく検討される機会きほんとなかったといつても過言ではない。ここでは、今回出土した陶器・土器の伴出関係を中心に編年を考えてみたい。

先述したように、SH102・SD109・SE102は遺物の接合関係、造構の廃棄状況ほぼ同時期であることが確認されている。これらの造構からは、天目茶碗・志野小皿が出土しているが、このうち志野鉄絵小皿は、瀬戸・美濃地方では大窯期後半～登窯期の古窯から発見されており(註4)16世紀末～17世紀前半代に盛行した器種といえる。またそのなかにおいても二重輪縁、見込みに毎葉の図柄は登窯期に入つて盛行するタイプである。(註5)天目茶碗についても器形から登窯期に盛行するタイプであると考えられ、両者の併行関係は型式的にも十分首肯できる。ほかにSE102からは、大窯Ⅱ期に属する資料が認められるが量的には少ないとから、SE102廃棄の際の混入物と理解し、検討の素材から分離しておきたい。(註6)

次に土器の編年的検討に入りたい。SD112・SE102では、先に触れた登窯期を中心とする資料を得ている。また火鉢については、志野小皿の出土したSH102付近の破片と接合したこと、SE102の一括遺物として考えられることから、志野小皿に併行する時期と推定される。かわらけ小皿は接合して完形に近い状態を呈する例も含まれており、やはり最終廃棄の一括品と考えられる。従って、火鉢とともに陶器の伴出関係を重視し、17世紀前半に位置付けておきたい(註7)。内耳土鍋は、57年度調査資料にみられた「く」の字状口縁で丸底タイプ(A類と仮称)の他に、半球形で丸底タイプ(C類と仮称)がみられた。(註8)これらは、従来Aタイプが室町時代、B・Cタイプが江戸時代に比定してきた(註9)が、今回の調査によってかなり時期を限定できたと考えられる。それとともにAタイプの内耳土鍋はC-12・13区で古瀬戸後期の天目茶碗と伴出したことにより、その年代の一点が古瀬戸後期にまでさか昇ることが確認された。またこのタイプの内耳土鍋は管見に触れたかぎり大窯Ⅰ期からⅢ期の施釉陶器に伴出しておらず、15世紀後半・末～16世紀中頃を前後する時期に盛行したものと判断しておく。またC・B類については、大窯期後半、登窯期初頭の空白を埋めぬままSE102出土の志野小皿をもって17世紀前半～中頃に位置付けてみたい。

註

- 1 小野田勝一他「大アラコ窯址群」「田原の文化 第5号」 1973
大アラコ窯址群は6基が発見され、壺・規葉壺などの大型製品と碗・皿など小型製品とが焼成されている。全体としてみるとわめて限定された時期に形成されたと考えられる。なお、碗・皿類にみられる特徴は型式的にみて典型的であり、普遍化できうると考えている。なお、大アラコ窯址群の年代については多くの指摘があるよう、伴出した顕長銘の壺の存在により、1137年～1155年の間に年代の一点を置くことができるが、私見によれば1149年以前に位置付けできよう。
- 足立順司「顕長銘の壺」「森町考古」12
- 2 久永晴男「伊良湖東大寺瓦窯群」「渥美半島埋蔵文化財調査報告」
- 註3 SF113出土遺物は資料の少ないものもあって、なお問題が多いが、輪花、つけがけの手法に見られるように、渥美・湖西窯の山茶碗の場合、無釉碗とともにこの種の碗が長く残存することが確認されている。大アラコ窯出土の山茶碗がいかなる系統でつかめるかが型式細分のカギとなろう。
- 3 私見ではこれら渥美・湖西系製品は碗・皿類を中心に大きくⅠ～Ⅲ期7段階に区別できるとした。
- 足立順司「東海地方東部の土器」「第3回中世土器研究会研究集会資料」1984
- 4 美濃古陶研究会「美濃の古陶」1978
- 宮石宗弘「穴田第1・第2窯」1982
- 5 檜崎彰一他「高根山古窯跡群」1984年および檜崎彰一氏・伊藤壽章御教示による。
- 6 本文中にふれた初山焼・志戸呂焼のほか尾林焼と考えられる天目茶碗の小片が出土している。
- 7 かわらけは、成形・技法・胎土・焼成に地域色が強く、汎日本的にとらえることは難しい。従って、研究の進んでいる特定地域との比較・検討とともに、在地での縦年作業が課題となろう。なお、土師質火鉢についても、年代の一点を17世紀前半に置くことが可能であるが、15世紀末～16世紀代にさかんに焼成された城館跡でも出土しており、やはり課題となろう。
- 8 内耳土鍋は北海道はじめ、いくつかの地域で出土しているが、器形等に様々な違いが認められる。また東海地方においても、羽釜主体の地域、内耳土鍋主体の地域とがある。とりあえず、三河・遠江では、本遺跡の類型と年代観があてはまるのではないかと考えている。
- 9 伊藤恵「東脇貝塚」「豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第2集」 1968

表1 弥生土器観察表(1)

()は推定値

器種	図版	出土位置	計測値			形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	器番号
			口径	基高	底径				
壺 甕 甌	18-1 -2 -3	1号周墓 1号周墓 2号周墓	(24.4) (11.8) (11.8)			複合口縁 口縁部外横ナデ 「く」字口縁	口縁部横ナデ 長石、堅、明赤褐色 口縁部外横ナデ	長石・雲母、堅、淡赤黃褐色 長石・砂粒、やや堅、明赤褐色 長石・砂粒、軟質、赤黃褐色	2600 2600 2894
壺 甌	-4 -5	3号周墓 3号周墓	13.2	24.0	7.4	単純口縁、肩下膨れ	無文、口縁内外横ナデ、肩下位弱い屈曲	長石・砂粒、軟質、赤黃褐色	3128
壺	19-1	SF103					肩部横位の櫛指	長石・赤色粒子、やや堅、淡	2612
壺	-2	◆	6.6	7.5	(3.9)	口唇面取り	内面輪積み痕	明黄褐色	2614
壺	-3	◆	(8.2)	10.4	4.4	口縁直立・肥厚	口縁部横ナデ	長石・砂粒、堅、淡赤褐色	2616
壺	-4	SF112	(9.3)	8.8	3.5	口縁大きく開く	口縁内外横ナデ	長石・雲母、砂粒、やや堅、灰褐色	3150
壺	-5	SF115			4.4	口唇尖る	外面ヘラミガキ	長石・砂粒、雲母、堅、赤褐色	
壺	-6	◆	(10.7)	(12.9)	6.0	脇部中央最大径 球崩	肩上半刷毛目 ナデ、輪積痕著	長石・雲母、赤色粒子、堅、淡褐色	3991
壺	-7	SD121	(9.1)	(11.6)	4.6	小型広口壺	肩上縫ヘラ、下横 ヘラミガキ	雲母、砂粒、やや堅、暗褐色	2058
壺	-8	◆	(7.2)	15.1	5.5	肩下位 面取り	輪積痕著者、外面縦 ハケ	長石・砂粒、やや堅、淡赤褐色	3258
壺	-9	◆	(8.6)	14.5	5.5	単純口縁・肩下位 最大径、底部凹底	口縁横ナデ・内面板 ナデ	砂粒・雲母、やや堅、淡赤褐色	3200
壺	-10	◆	8.8	22.9	7.8	単純口縁・肩下膨れ	外面刷毛後ヘラ ミガキ	長石・砂粒、堅、淡赤褐色	4554
壺	-11	◆	10.8	14.8	5.1	外反の単純口縁、 球崩	口縁横ハケ・肩上縫 ハケ、下横ミガキ	長石・砂粒、やや堅、明赤褐色	3277
壺	-12	◆	(11.3)	20.3	7.2	単純口縁・下膨れ の球崩	口縁横ナデ・輪積痕 球崩	長石・砂粒、堅、淡黄灰褐色	4538
壺	-13	◆	(10.4)	20.5	4.6	単純口縁・球崩 内面板ナデ	横線・肩・波状の 御描文、口唇横ナデ 外面ヘラミガキ	長石・砂粒、軟、黃褐色	3262
壺	20-1	SD121	(13.6)	25.0	7.4	単純口縁・肩下膨れ	頸部羽状の輪積突文	長石・雲母、砂粒、やや堅	4548
壺	-2	◆	12.4	21.0	6.6	折り返し口縁・や や下膨脹、底部凹	肩に円形貼文・口唇 連続刺突	横ナデ、輪積横著 良選・長石、堅、淡赤褐色	4547
壺	-3	◆				折返し口縁			3309
壺	-4	◆	16.6				口縁ハケ、口唇・頸 肩部飾捲文	長石・精選、やや堅、淡黄褐色	4535
壺	-5	◆	16.4			口唇部水平面取り	口縁外刷毛後ヘラ磨	精選・砂粒、やや堅、淡赤褐色	4524
壺	-6	◆	17.7			口唇部肥厚、断面 刺突、	口唇面取り、羽状の 御描文	良選・砂粒、堅、淡黄褐色	3142
壺	-7	◆	15.1			口縁やや内湾、端 部直立気味	口唇面取内傾、頸三 角	長石・砂粒、堅、淡赤褐色	2989
壺	-8	◆					肩部に横、波状・肩 の御描文	長石・砂粒、やや堅、淡赤褐色	2976
壺	-9	◆			8.1	球崩・やや下位屈	頸部前磨工具の刺突 ヘラ磨き少い	長石・雲母、やや堅、乳白黃褐色	3203
壺	-10	◆			5.9	球崩、底部凹む	外面ヘラ磨き	長石・砂粒、堅、淡赤褐色	4555
壺	21-1	◆			5.4	肩下位屈曲強い 小型広口壺	内外ハケ	良選・長石・砂粒、軟質、明 赤褐色	4543
壺	-2	◆			5.3	屈曲強い下膨れ肩 小型壺、底部突出	全面ハケ	長石・砂粒、雲母、やや堅	4520
壺	-3	◆			5.4	広口小型壺、下膨 れ、肩屈曲弱	肩上部黒斑	精選・長石、堅、淡褐色	4534
壺	-4	◆			6.1	小型広口壺・球崩	全面ハケ、黒斑	良選・長石、堅、赤褐色	3088
壺	-5	◆			7.0	小型壺、肩下膨れ 底部径大きい	肩部羽状突文	粗い・砂粒、軟質、淡赤 褐色	3303
壺	-6	◆			3.7	小型平底壺・球崩 僅か上げ底	ヘラ波線	長石・砂粒、やや堅、淡 褐色	
壺	-7	◆			3.8	小型平底壺・球崩	外全面ヘラ磨、内面 板ナデ	乳褐色	3328
壺	-8	◆			3.4	直線に開く口縁	全面丁寧なヘラ磨き	長石・砂粒、雲母、堅、 淡赤褐色	3233

表1 弥生土器観察表(2)

()は推定値

器種	図版	出土位置	計測値			形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	登録番号	
			口径	器高	底径					
壺	21-9	タ			4.0	球胴、底部小 口縁直立気味、 球胴	内面板ナデ 肩山形の彌拂文、丁 寧に研磨、胴黒斑 胴部削毛目・内面板	精選、長石・砂粒・雲母 やや堅、淡黄褐色	3224	
壺	-10	タ			4.9	球胴・底部突出	ナデ胴黒斑	精選、長石・砂粒・雲母、 やや堅、暗赤褐色	4522	
鉢	-11	タ	(10.1)	5.4	3.8	やや内湾した胴部 口縁屈曲先端尖る	内面板ナデ	砂粒・長石・赤色粒子 長石・軟質、淡黄褐色	3272	
鉢	-12	タ	(17.4)			口縁僅かに外反	内外ヘラ磨	長石・砂粒・やや堅、淡乳 褐色	4550	
高坏	-13	タ		18.6	13.7	13.2	坏部直線開き強い 脚部「八」字形	外面ヘラ磨・肩穿孔 三箇所	精選・砂粒・やや堅、淡黄 乳褐色	3281
高坏	-14	タ		(22.7)	14.6	12.1	坏部直線開き強い 脚部直線	外面ヘラ磨・肩穿孔 三箇所・摩滅らしい 穿孔の上に横彌拂描 二段	長石・砂粒・やや堅、明淡赤 褐色	3280
高坏	-15	タ					直線に聞く脚部	外面ヘラ磨・内面ハ ケ	長石・砂粒・やや堅、淡黄赤 褐色	3281
高坏	-16	タ					やや内傾した脚 穿孔なし	外面部丁寧なヘラ磨、良 好なハケ調整	良選、赤色粒子・雲母、堅、 淡赤褐色	3023
高坏	-17	タ			12.5		直線的に聞く脚	外面ヘラ磨・穿孔三 ヶ所有りか	長石・砂粒・雲母、堅、淡茶 褐色	3286
器台	-19	タ		10.6	8.4	6.9	台部や丸み、脚 弱い「八」形	全面ヘラ磨・穿孔三 ヶ所端部僅か外反 内向外ともにヘラ磨、 穿孔三箇所	長石・砂粒・雲母、やや堅、 赤褐色	3274
器台	-20	タ		7.1	8.9	11.8			長石・雲母、やや堅、淡赤褐色	3278
壺	22-1	タ			(10.5)	上部球胴	口唇部刻み・斜位面 取り口縁外横ナデ	長石・やや堅、淡赤褐色	4532	
壺	-2	タ			(17.0)	球胴、強い「く」 字口縁、平底	口縁内側ナデ・胴 内面板ナデ	長石・砂粒・やや堅、淡暗褐色	3227	
壺	-3	タ			(16.9)	上部球胴	口唇部刻み・口縁内 外横ナデ	長石・砂粒・やや堅、暗褐色	3295	
壺	-4	タ			(18.5)	上部球胴、緩く曲 がる口縁部	口縁深く張り出す 「S」字状口縁胴	長石・砂粒・やや堅、暗褐色	2979	
壺	-5	タ			(13.0)		口縁外横ナデ・二 段の横位彌拂	長石・砂粒・堅、暗褐色	3252	
壺	-6	SD127			4.6		口縁外横ナデ・胴 部外縁深く張り出 立・底部凹む	口縁外横ナデ・胴 部外縁深く張り出 立・底部凹む	長石・砂粒・軟質、明赤褐色	2902
壺	-7	タ	(10.7)	(9.5)	3.4	広口小型壺、 直線開き	全面ヘラ磨・肩内 面直角	長石・赤色粒子・砂粒、やや 堅、明赤褐色	3856	
壺	-8	SD128		9.2	20.0	7.0	単純口縁、胴中央 付近張り出し強 い	口縁横ナデ他はハケ 調整	砂粒・やや堅、淡乳白褐色	3847
壺	-9	タ		12.2	10.6	4.6	扁平な広口壺、底 部中央凹み	口縁外横ナデ・胴 部外縁深く張り出 立・底部凹み	長石・雲母・砂粒、堅、淡 褐色	3865
高坏	-10	タ			22.2		高坏部の坏部、弱い 屈曲、口縁外反	全面ヘラ磨・外周波状 彌拂	長石・赤色粒子・雲母、軟質 淡橙灰色	3809
高坏	-11	タ			14.2	「八」字状に聞く	外面ヘラ磨・輪積痕 脚	長石・砂粒・赤色粒子、堅 明赤褐色		
壺	23-1	タ			6.3	やや下彎れの球胴 底部突出	肩横位彌拂さ、斜位 の刺突	砂粒・軟質、淡赤褐色	3179	
壺	-2	SD131	(10.1)			單純口縁壺	口唇面取り・口縁内 外横ナデ・胴部外ヘラ磨	長石・砂粒・やや堅、明赤褐色	3945	
壺	-3	タ	(15.8)			單純口縁壺	口唇部ナデ面取・斜位 彌拂	砂粒・やや堅、淡明赤褐色	3921	
高坏	-4	SD131			14.1	脚下半で内湾	肩下半で内湾	長石・砂粒・やや堅、明赤褐色	3883	
壺	-5	タ		21.4		緩い「く」字口縁 球胴	口唇部刻み・内面 ヘラナデ、	長石・砂粒・赤色粒子、堅、 暗褐色	5137	
壺	-6	SD132	(10.1)	18.1	6.6	單純口縁、肩屈曲 強い、底部突出	彌拂横ナデ・全体ハ ケ調整	長石・砂粒・雲母、堅、淡褐 色、底黒斑	4259	
壺	-7	タ			3.2	小型広口壺、扁平 な球胴、底部突出 口縁ほぼ直立、脚 下半屈曲	外面ヘラ磨・内面ナ デ	長石・砂粒・雲母、赤色粒子 子、堅、淡赤褐色	4266	
広口壺	-8	タ	15.5	11.6	7.1	金体に椎ヘラ磨	口縁部内側横ナデ、 胴内外ヘラ磨	長石・砂粒・軟質、淡黃乳 白色、底黒斑	4299	
鉢	-9	タ	11.9	7.8	4.6	金体に椎ヘラ磨	金体に椎ヘラ磨	長石・砂粒・やや堅、明赤 黒斑	4282	
広口壺	-10	タ	(18.4)	20.9	6.5	口縁直立、扁平な	口縁部内外横ナデ、	長石・砂粒・軟質、淡乳白色	4305	

表1 弥生土器観察表(3)

()は推定値

器種	団版 出土位置	計測値			形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	登録番号
		口径	器高	底径				
高坏 甕	-11 ◊	28.6			球胴、底部凹み 环部中位屈曲、口 縁外反 口縁屈曲弱い、胴 下半屈曲	肩ヘラ磨、口唇丸い 内外ヘラ磨	砂粒、やや堅、赤褐色	4272
	-12 ◊	(15.6)			口唇刻み、口縁内外 横ナデ、肩粗い観ハケ		長石・砂粒、やや堅、明赤褐色	4292
高坏 壺	24-1SD132	(17.6)	22.1	8.6	屈曲弱い口縁、半 球状の胴、台付付 大きく聞く単純口 縁、球胴か 屈曲強い「く」字 口縁、端部直立 複合口縁甕、口縁 丸味	口唇刻み、口縁内外横 ナデ、肩内外ハケ調整 彌部三角粘土帯、肩 横線、肩磨、横文 口唇水平に面取り、肩円 形浮文貼付、肩磨横文 口縁三ヶ所修状浮文貼付 口唇内傾面取り	長石・砂粒、やや堅、淡乳褐色	4301
壺	-2 SD133	13.7			口縁弱い「く」字 口縁、端部直立 複合口縁甕、口縁 丸味	口唇水平に面取り、肩円 形浮文貼付、肩磨横文 口唇内傾面取り	長石・砂粒、堅、赤褐色	5049
壺	-3 ◊	14.6			直線的に聞く単純口 縁、屈曲強い	口唇水平に面取り、肩円 形浮文貼付、肩磨横文 口唇内傾面取り	長石・赤色粒子、雲母、堅、 赤褐色	5210
壺	-4 ◊	19.8			複合口縁甕、口縁 丸味	口唇三ヶ所修状浮文貼付 口唇内傾面取り	長石・砂粒、堅、赤褐色	4922
壺	-5 ◊	(13.6)			直線的に聞く単純口 縁、屈曲強い	口唇部内外横ナデ、口唇 水平面取、肩磨横文貼付 口唇水平に面取り、連続 刺突、肩部面取り、交叉した 刺突、ボタン状突起、口 脇下膨れ	砂粒、堅、淡黄乳褐色	5047
壺	-6 ◊	18.8			複合口縁甕、口縁 直線的に聞く 外反する単純口縁 脇下膨れ	口唇部内外横ナデ、口唇 水平面取、肩磨横文貼付 口唇水平に面取り、連続 刺突、肩部面取り、交叉した 刺突、ボタン状突起、口 脇下膨れ	長石・砂粒、堅、淡赤褐色	4923
壺	-7 ◊	13.4					長石・砂粒、やや堅、淡黄乳 白色、脇内面炭化物	4399
壺	-8 ◊	11.0			やや緩く直線的に 聞く単純口縁甕	やや緩く直線的に 聞く単純口縁甕	砂粒、軟質、暗赤褐色	4900
壺	-9 ◊						雲母、堅、暗褐色	4500
壺	-10 ◊			5.2	扁平な小型広口壺 胴屈曲強、底突出 広口壺、口径大き	全体ハケ調整	長石・砂粒、軟質、赤褐色	4503
壺	-11 ◊	13.2			口縁内外横ナデ、肩外面 く扁平	口縁内外横ナデ、肩外面 く扁平	雲母、赤色粒子、堅、淡赤褐色	4560
壺蓋	-12 ◊	8.6			形成粘土板	外側指揮圧、内面指揮圧 後ナデ	長石・砂粒、赤色粒子、軟質 赤褐色	
鉢	-13 ◊	9.2	3.0	3.9	小型鉢、壺底部付 近を使用	上端面取り、内面工具 のナデ調整	長石・砂粒、堅、赤褐色	5209
壺	25-1 SD133	27.5			大型広口壺、口縁 直立に近い	全体摩滅	砂粒、焼き締め、赤褐色	4587
高坏	-2 ◊			12.3	高坏脚、継やかに 「八」字形に聞く	脚付根拵指横線二段	長石・雲母・砂粒、堅、淡赤 白色	4560
高坏	-3 ◊			14.3	直線的に聞く脚 端部内傾	穿孔三ヶ所、外面ヘ ラ磨	赤色粒子・砂粒、軟質、淡赤 褐色	4954
高坏	-4 ◊			12.7	直線的に聞く脚 端部内傾	外側ヘラ磨、内面板 ナデ	長石・雲母、堅、暗褐色	5051
甕	-5 ◊	15.5			肩曲の弱い口縁部	口唇部刻み目、外面 ハケ、内面板ナデ調整	砂粒、雲母、堅、暗褐色	
甕	-6 ◊	(20.7)			口縁屈曲弱い、胴 急激に窄まる	口唇斜位の刻み、口縁 内外横ナデ、肩部ハケ	長石・砂粒、やや堅、乳白色	4989
甕	-7 ◊	13.7			口縁綾い「く」字	口唇連続の刻み日、口 縁部内外横ナデ調整	長石・砂粒、堅、暗褐色	4885
甕	-8 ◊	17.4			「く」字口縁、球 胴	口唇部連続刻み日、外 ハケ、内板ナデ調整	砂粒、堅、暗茶褐色	5209
甕	-9 SD135	15.5			大きく聞く単純口 縁	口唇面取り、肩部側 横線、羽状刻み日、 肩磨横線	砂粒、雲母、軟質、明灰色	4558
甕	-10 ◊	13.8			強く屈曲する口縁 球胴か	肩磨横線口縁内液状 横線、流状、横線	長石・砂粒、堅、赤褐色	III191
甕	-11 ◊	(8.8)			小型広口壺、口縁 内湾	外側縫へラ磨	長石・砂粒、やや堅、淡黄褐色	4323
甕	-12 ◊			5.7	小型甕台部、直線	付模粘土帶貼り付け 痕に聞く	長石・砂粒、やや軟質、暗赤 褐色	4254
壺	26-1 SX106	11.8	18.0	7.8	単純口縁、口唇尖 る、脇下膨れ	口縁部内外横ナデ、 調整粗縫	砂粒、やや堅、淡黃白色	3419
壺	-2 ◊	12.6			単純口縁、内湾	口縁部内外横ナデ	長石・赤色粒子、雲母、 砂粒、堅淡明黄褐色	4744
壺	-3 ◊			7.3	下膨れ脇の大型壺	底部やや凹む	長石・赤色粒子、砂粒、 堅、淡明、淡赤褐色	3410
壺	-4 ◊			9.6	脇下膨れ、屈曲強 い、突出底	脇下半ヘラ磨き	長石・砂粒、軟質、明赤褐色	3411
壺	-5 ◊			5.2	脇中位が強く屈曲	頸部ヘラナデ、	長石・赤色粒子、砂粒、堅、 淡明赤色	3638
								3377

表1 弁生土器觀察表(4)

() は推定値

器種	図版	出土位置	計測値			形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	登録番号
			口径	蓋高	底径				
壺	-6	タ		5.3	7.2	円盤に円柱を貼りつけ	指頭押圧調整	砂粒・雲母・やや堅、淡乳茶褐色	4751
壺	-7	タ	10.4			単純口縁壺	口唇部面取り、交差する連続刺突	長石・赤色粒子・砂粒・堅、淡明赤褐色	4162
壺	-8	タ	15.0			折り返し口縁、大きく開く口縁	口唇面取り、羽状の連続刺突、肩備描文	砂粒・軟質、明赤黄褐色	139
壺	-9	タ	17.7			大きく開く折り返し口縁	口縁内側波状文	長石・砂粒・赤色粒子、明赤黄色	4671
壺	-10	タ	16.6			大きく開く折り返し口縁	口唇斜位の連続刺突、口縁内側波状文	長石・砂粒・赤色粒子、堅、淡明赤色	3505
壺	-11	タ	5.4			扁平な広口壺、胴張り、底部凹み	肩ハケ調整	長石・砂粒・赤色粒子、やや堅、淡赤褐色	3525
壺	-12	タ	15.8			折り返し口縁「く」字口縁	口縁上端に円形貼付、頂部三角粘土帯	長石・砂粒・赤色粒子、やや堅、淡明赤黄色	3453
壺	-13	タ	8.5	7.3	4.5	口縁大きく開き胴小さい、底部凹み	口縁部内外ハケ調整、肩ハラ磨、内面ナデ	長石・砂粒・雲母・赤色粒子、やや堅、淡赤褐色	4697
壺	-14	タ	12.1			口縁直立	口縁部内外横波状文	長石・赤色粒子・砂粒、やや堅、淡明赤黄色	4160
壺	-15	タ	21.4			「く」字口縁、や内溝気味	口縁部内外横ナデ	長石・赤色粒子、砂粒、やや軟質や軟質、明赤黄色	4759
壺	-16	タ	4.8			口縁直立気味、深い坏部、体部下	全体磨き	長石・赤色粒子、堅、淡黄褐色	4777
高坏	27-1	SX106	21.7			深い坏部、体部下	内外ヘラ磨、丹塗り	長石・赤色粒子、堅、淡黄褐色	3602
高坏	-2	タ	23.8			深い坏部、体部下	屈曲強い	長石・砂粒・堅、淡明赤色	4167
高坏	-3	タ	19.1			脚付根から直線的に開く坏部	内外ヘラ磨、口唇部丸い	長石・砂粒・赤色粒子、堅、淡明赤色	4713
高坏	-4	タ				高坏脚、端部やや内傾	三ヶ所穿孔、外面向ラ磨	長石・砂粒・赤色粒子、堅、淡明黄褐色	3757
高坏	-5	タ	13.5			「八」字形の脚	三ヶ所の穿孔	長石・砂粒・雲母、やや堅、淡明黄褐色	3762
高坏	-6	タ				直線的に開く脚	穿孔はなし	長石・砂粒・赤色粒子、軟質、淡黄褐色	4761
壺	-7	タ			12.7	口縁内傾、球胴	口唇斜位連続刺突、口縁内外横ナデ調整	長石・砂粒・赤色粒子、やや堅、淡赤褐色	4678
壺	-8	タ	19.2			「く」字口縁、胴屈曲強い、	口唇部刻み目、唇内面板ナデ	長石・砂粒・雲母、やや堅、淡明黄褐色	4757
壺	-9	タ	23.0			「く」字口縁	口唇部刻み目、類部強い擦ナデ	長石・砂粒・赤色粒子、軟質、淡黄褐色	4722
壺	-10	タ	18.2			「く」字口縁	口唇部刻み目、内面横ナデ	長石・砂粒・堅、暗褐色、胴外面煤	4741
壺	-11	タ	19.7			壺台部、低く小さく丸味	口唇部刻み目、内面横ナデ	長石・砂粒・赤色粒子、やや軟質黒褐色	4156
壺	-12	タ	7.2			壺台部、直線的に開く	内外ハケ後ナデ	長石・赤色粒子・堅、淡黄褐色	4688
壺	-13	タ		9.3			台付模に粘土帯貼り付け	赤色粒子・砂粒・堅、淡明黄赤色赤	4572

表2 中世陶器・土師器観察表 (SF104・113出土)

() は推定値

器種	図版	出土位置	計測値			形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	登録番号
			口径	器高	底径			
山茶碗	38-1	SF104	16.5	5.7	7.6	底部糸切り後ナデ	砂粒、堅、灰白色	2805
山茶碗	-2	タ	16.6	5.8	8.3	底部ナデ、口縁僅か外反	砂粒、堅、淡青灰色	2806
山茶碗	-3	タ	16.8	5.7	7.7	体部やや丸、底部糸切り後ナデ	長石・砂粒、堅、灰白色	2809
山茶碗	-4	タ	17.0	5.6	8.9	口縁やや外反、底部糸切り痕	長石・砂粒、堅、灰白色	2814
山茶碗	-5	タ	17.9	6.2	9.0	体部下半丸味、底部糸切り痕	長石・砂粒、堅、灰白色	2820
山茶碗	-6	タ	16.1	5.4	7.1	口縁僅か外反、底部厚い	砂粒、堅、青灰色	2824
山茶碗	-7	タ	17.2	5.8	8.6	体部やや丸味、施釉	長石・砂粒、堅、灰白色	2826
白磁碗	-8	タ	18.0			体部内面に彫模き	精選、灰白色	2815
小皿	-9	タ	8.6	2.6	4.1	体部丸味、口縁外反	砂粒、堅、灰白色	2808
小皿	-10	タ	8.3	2.6	3.9	底部厚い、体部ナデ押さえ強い	砂粒、堅、灰白色	2937
小皿	-11	タ	8.7	2.5	4.1	底部厚い、糸切り痕	砂粒、堅、淡青灰色	2835
小皿	-12	タ	(8.8)	2.6	3.2	体部直線開き大きい	長石・砂粒、堅、灰白色	2828
小皿	-13	タ	9.5	2.7	4.2	体部やや丸味、底部糸切り痕	長石・砂粒、堅、淡青灰色	2813
小皿	-14	タ	8.5	2.6	4.2	体部直線、底部厚い	砂粒、堅、淡青灰色	2934
小皿	-15	タ	(7.9)	(2.4)	(4.3)	高台、口縁下強いナデ押さえ	砂粒、堅、灰白色	2833
小皿	-16	タ	9.0			高台、体部丸味	砂粒、堅、淡青灰色	2832・2833
土鍋	-17	タ	23.3			口唇部折り返し斜傾の面取り	長石・砂粒、やや堅、淡褐色	2940
土鍋	-18	タ	22.9			球胴、全體像ナデ調整	長石・砂粒、やや堅、淡褐色	2817・2819
土鍋	-19	タ	23.4			口縁部折り返し、球胴、崩	長石・砂粒、やや堅、淡褐色	2939・2949
山茶碗	-20	SF113	17.0	6.1	8.3	下半へラ削り	砂粒、やや堅、乳灰褐色	2819・2945
山茶碗	-21	タ	16.3	5.5	7.0	口縁肥厚、横ナデ調整、球	長石・砂粒、堅、淡青灰色	2921・2975
山茶碗	-22	タ	17.0	6.1	8.3	洞	長石・砂粒、堅、淡赤灰色	2970・2975
山茶碗	39-23	SF113	19.5	5.8	7.5	体部やや丸味、高台三角、施釉、二輪花、底部糸切り痕	長石・砂粒、堅、淡青灰色	2973
山茶碗	-24	タ	16.1	6.1	7.8	体部直線的、底部糸切り後ナデ施釉	長石・砂粒、堅、淡灰白褐色	2972
鉢	-25	タ	15.2			輪模痕、外輪接合部所凹門、内面削り、	長石・砂粒、堅、灰白色	2974
陶器	-26	タ	11.5	2.8	6.5	皿、体部削り、長石粒をかけ鉄絵を描く、	精選、堅鐵、灰白色	2226
山茶碗	-27	SE102	7.2			底部のみ残存、見込み部と外面部墨書き	砂粒、堅、淡青灰色	
小皿	-28	タ	(6.1)	1.7	2.6	白磁小皿、底部外面露鉛	精選、堅鐵、灰白色	2239
小皿	-29	タ	(12.2)	2.4	6.4	底部外面露鉛、志野釉(長石)厚くかかる	精選、堅、乳白色	2651
小皿	-30	タ	(9.1)	1.9	4.2	鬼板化粧掛け、鉄釉、	精選、堅、	2680-1
小皿	-31	タ	(9.6)	2.1	5.0	初山窯、鉄釉と天目釉のまだらの二重掛け、高台削りだし、	精選、硫酸化鉄分多い	2680-2
かわらけ	-32	タ	10.0	2.1			砂粒、やや軟質、乳白色	2680-2226
かわらけ	-33	タ	11.4	2.2			砂粒、やや軟質、乳白色	2239
かわらけ	-34	タ	10.4	2.0			長石・砂粒、やや軟質、乳白色	2624
かわらけ	-35	タ	12.0	2.1			砂粒、やや軟質、乳白色	2655
かわらけ	-36	タ	9.8	2.5			砂粒、やや軟質、乳白色	2680-2660
天目茶碗	-37	タ	12.5			志野呂窯、	炭化粒子僅か混、	2339
かわらけ	-38	タ	8.9				砂粒、やや軟質、乳白色	2639-2680
かわらけ	-39	タ	11.0				砂粒、やや軟質、褐色・乳白色	2239-2226
かわらけ	-40	タ	10.1				砂粒、やや軟質、乳白色	2635
かわらけ	-41	タ	10.9				砂粒、やや軟質、乳黃白色	2650-1
かわらけ	-42	タ	10.5				砂粒、やや軟質、乳白色	2650-2
かわらけ	-43	タ	10.3				砂粒、やや軟質、乳白褐色	2680
かわらけ	-44	タ	10.5				砂粒、やや軟質、乳白色	2680
小坏	-45	タ	7.8	3.2	3.4		灰釉つけ掛け、削り出し高台	
内耳鍵	-46	タ	22.5				砂粒、やや堅、淡褐色	2239
内耳鍵	-47	タ	23.7				砂粒、やや堅、乳白褐色	2654-2680
土鍋	-48	タ	25.3	8.4		口縁部周辺肥厚、	砂粒、やや堅、乳白褐色	2659-2680
三足鍋	-49	タ	24.8	10.7	16.6	口縁水平、体部外面板削り、	砂粒・雲母、堅、乳白色	2658-2226
							口縁内面墨	

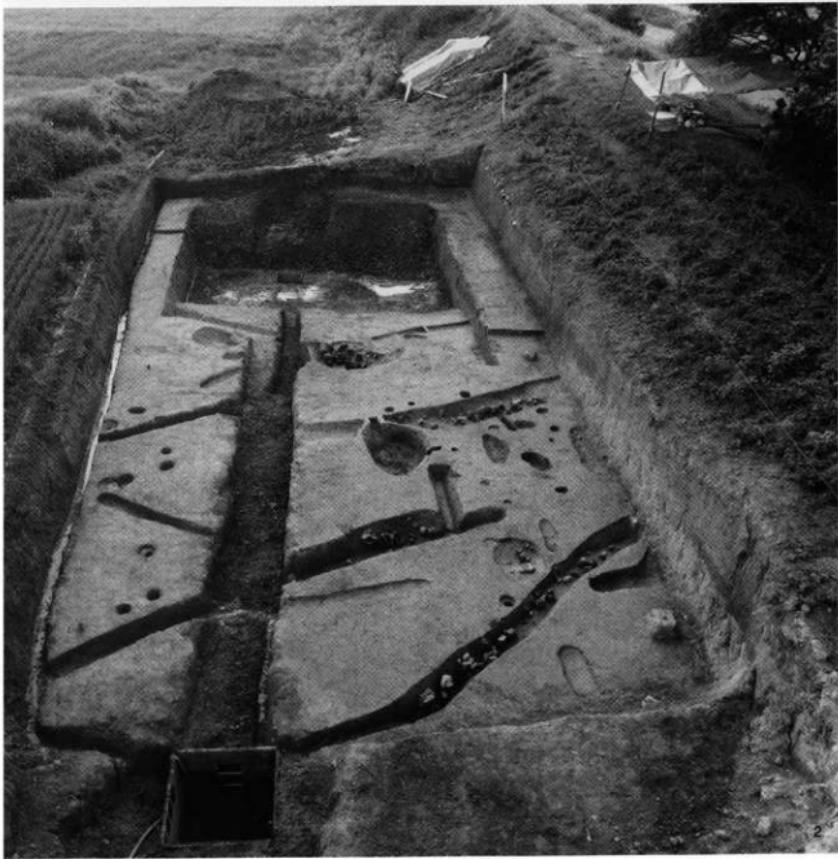
器種	図版	出土位置	計測 値			形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	登録番号
			口径	器高	底径				
長頸壺	30-1	C-13区	6.9	19.2	5.0	肩に胴部最大径、頸部 円筒状、口縁で聞く 胴部僅かに丸み	ロクロナデ、丁寧に 調整、底部糸切り	砂粒、堅、灰白色	2307
長頸壺	-2	C-13区	7.3	22.0	6.2	肩に胴部最大径、頸部 円筒状、口縁で聞く 胴部僅かに丸み	ロクロナデ調整、底 部糸切り	砂粒、堅、灰白色	2302
長頸壺	-3	C-13区				胴部最大径は上半、肩 縁やかに曲がる	外面ヘラケズリ	砂粒、堅、灰色	2304
長頸壺	-4	C-13区				胴球狀、最大径上半 肩部屈曲強い、	胴下半ヘラ削り	砂粒、堅、灰色	2492
長頸瓶	-5	C-12区	8.7				胴下半回転ヘラ削り	砂粒、堅、灰白色	2578

図 版



1 昭和58年度調査前近景（西より）

2 昭和58年度調査弥生面全景（東より）



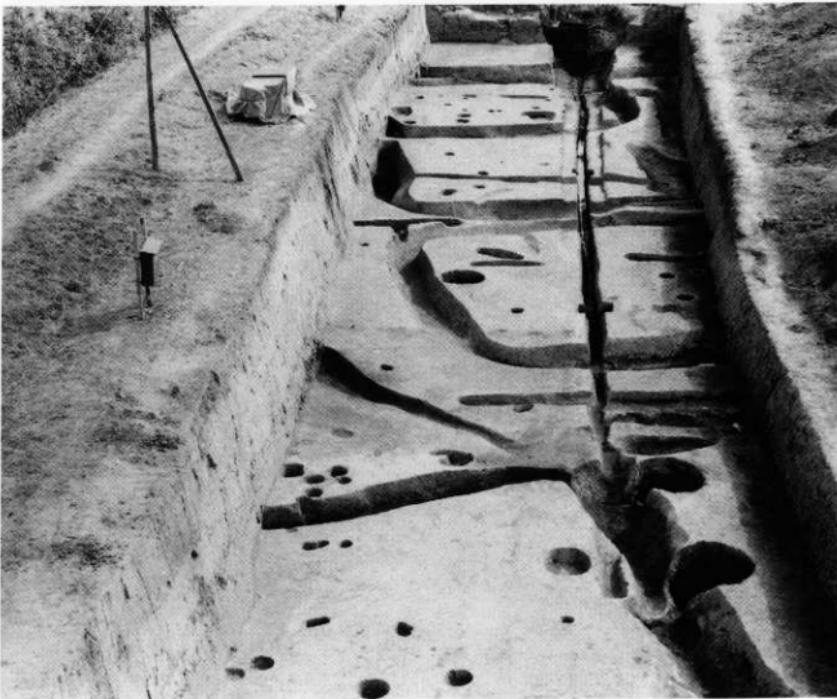
1 昭和59年度調査前近景（東より）

2 昭和59年度調査弥生面全景（東より）

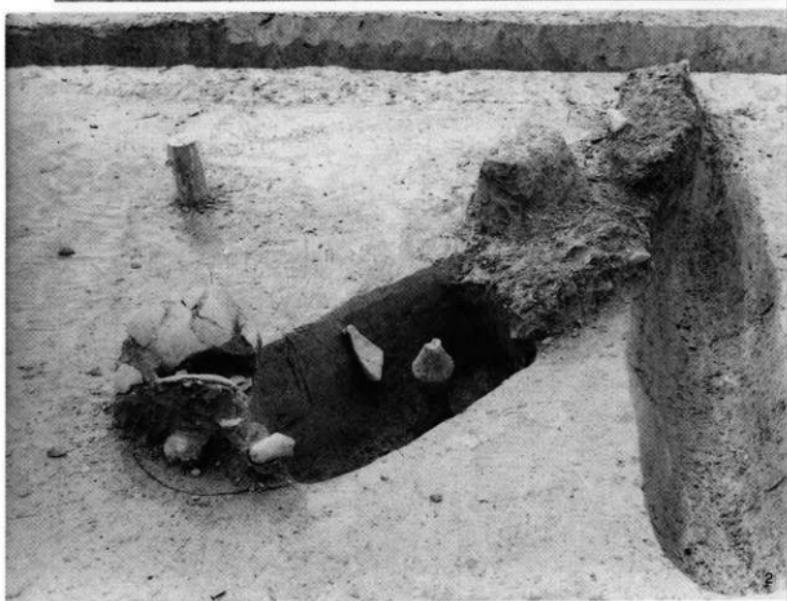


1 1号方形周溝墓全景（東より）

2 2号方形周溝墓全景（東より）



1 3号方形周溝墓全景（東より）
2 1～3号方形周溝墓全景（西より）



1 SF105全
景

2 SF106·
107全景

3 SF106土
器出土状态



2



1 SF115全景

2 SF115遺物出土状態

3 SF116全景



1 SD121上
層全景

2 SD121上
層土器出土状
態

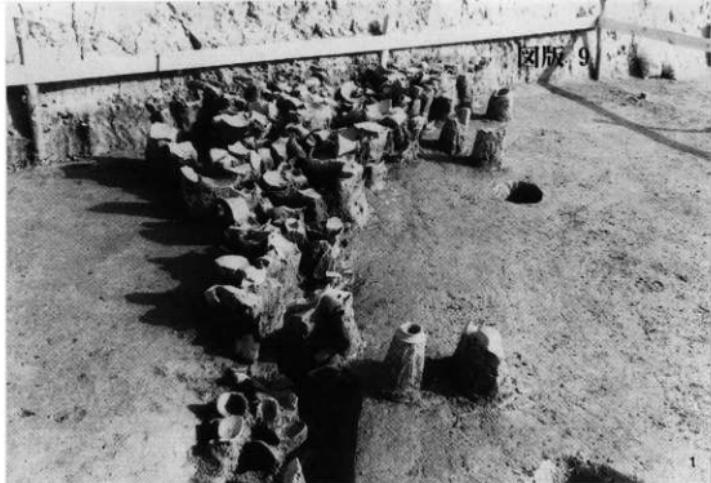
3 SD121上
層土器出土状
態



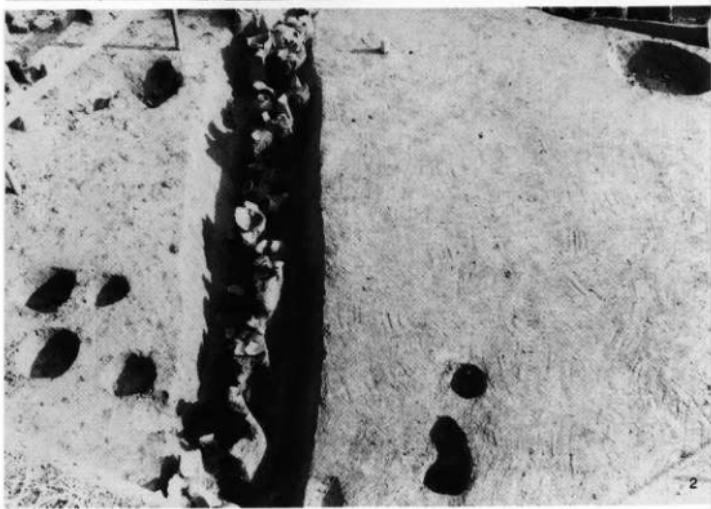
1 SD121下
層全景

2 SD121下
層土器出土狀
態

3 SD121下
層土器出土狀
態



1



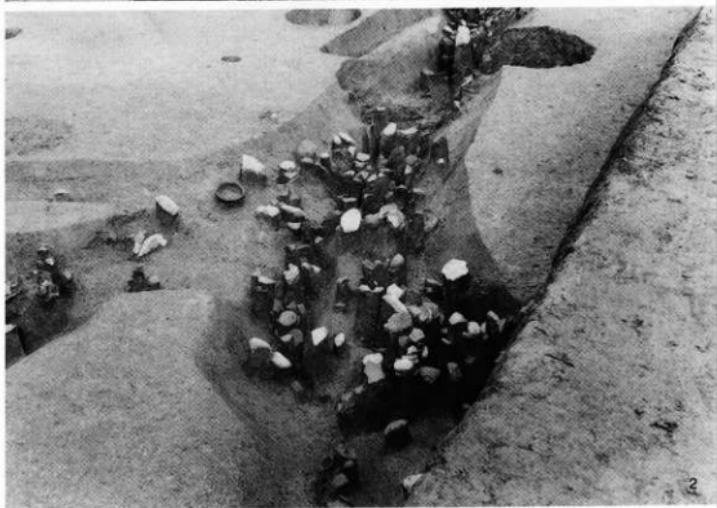
2



1 SD 131 土器出土状態

2 SD 132 全景

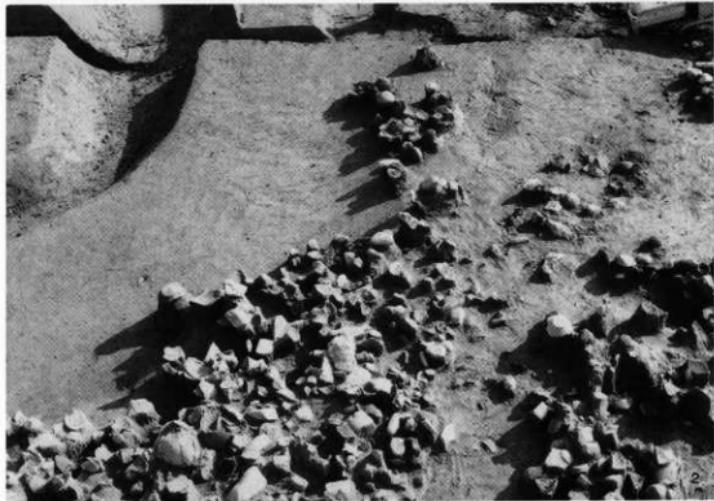
3 SD 132 土器出土状態



1 SD133～
136全景

2 SD133土
器出土状態

3 SD133～
135土器出
土状態



1 SX106土
器集中箇所

2 SX106土
器集中箇所

3 SX106土
器集中箇所



2



1 昭和59年度調査弥生面溝近景

2 昭和59年度調査弥生面溝近景



昭和58年度調査中世面全景（西より）



1



2

1 SF104全景

2 SF104上層土器出土状態

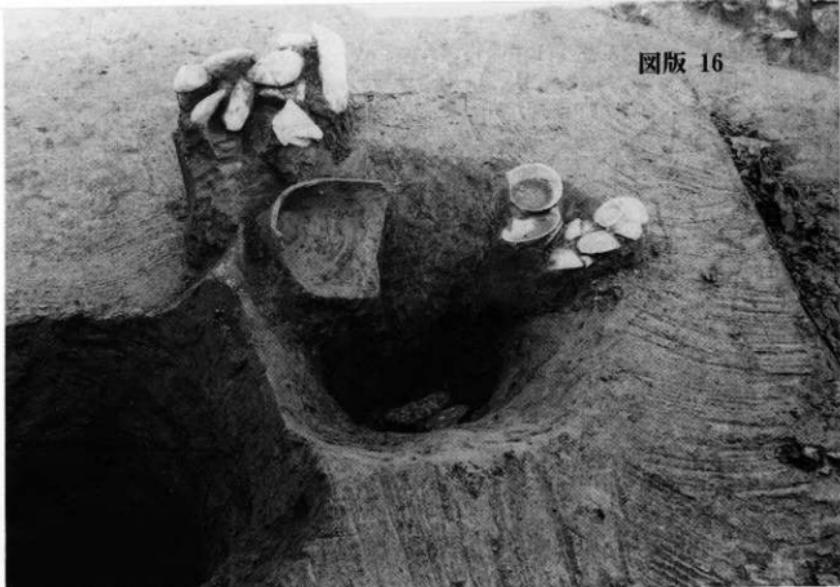
3 SF104下層土器出土状態



3



昭和 58 年度調査近世面全景



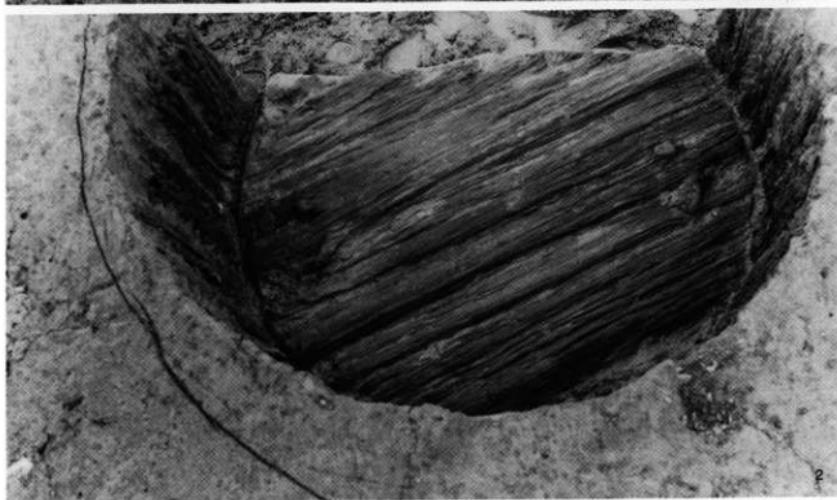
1 SF 113 全景

2 SF 113 土器出土状態



1 SD108・111全景（南より）

2 SD108～111全景（北より）



1 桶埋設遺構 S
X106

2 SX106 細
部

3 SX106 掘
り方

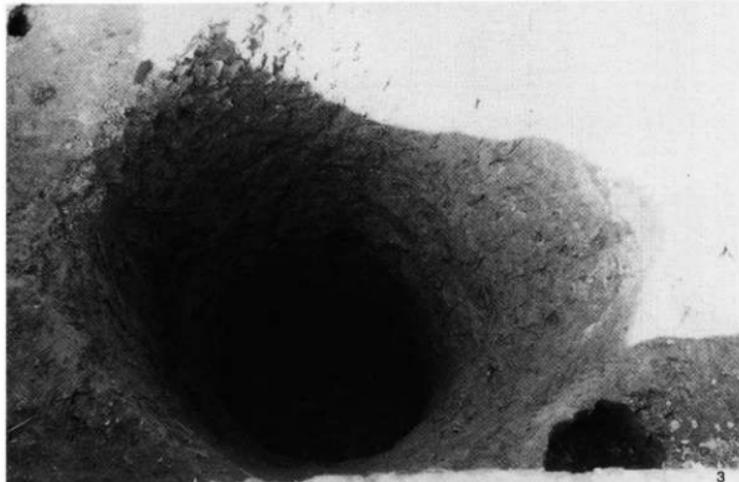
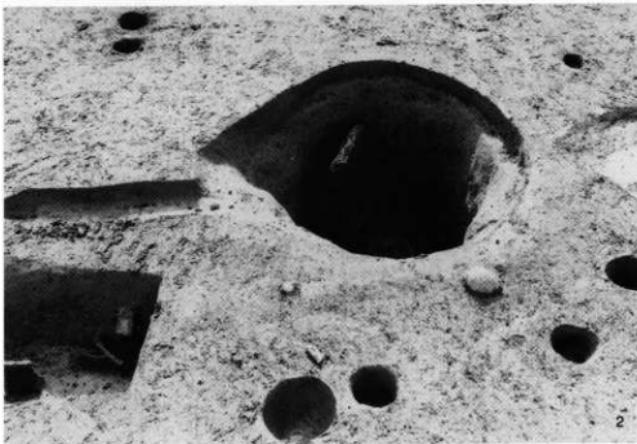




1 SE101全
景

2 SE103全
景

3 SE104全
景





2



1 SE102全景（南より）

2 SE102全景（南より）

3 SE102遺物出土状態



1 破堤全景（西より）

2 破堤全景（北より）

3 破堤と S D 1
1 2 の関係





1 柱根遺存状態
(中世～近世)

2 柱根遺存状態
(近世)

3 天目茶碗出土
状態



2

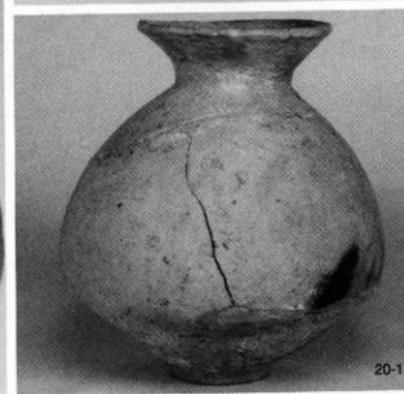
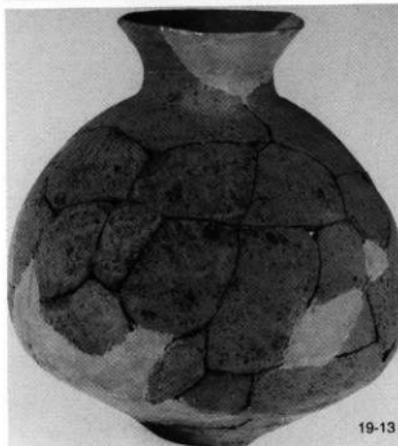
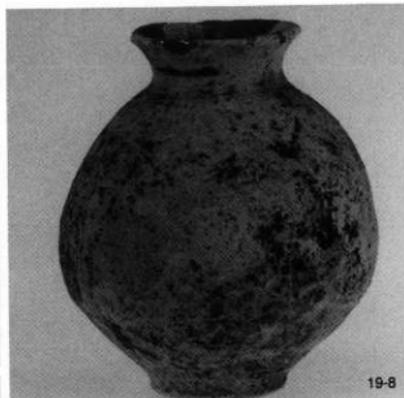


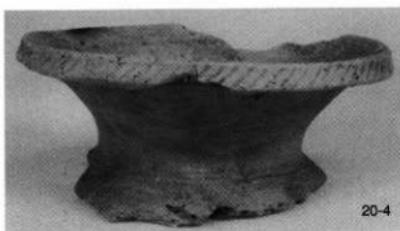
1 須恵器出土状態

2 志野皿出土状態

3 天目茶碗出土状態

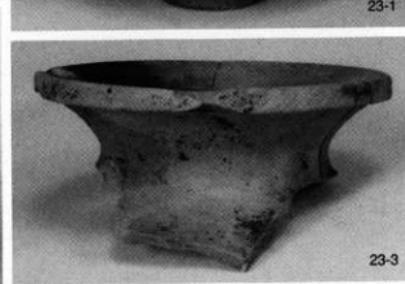
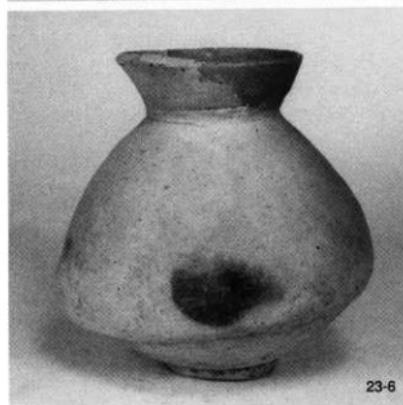
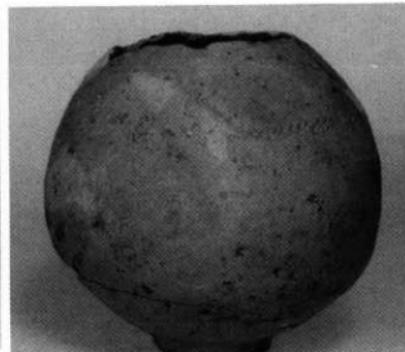




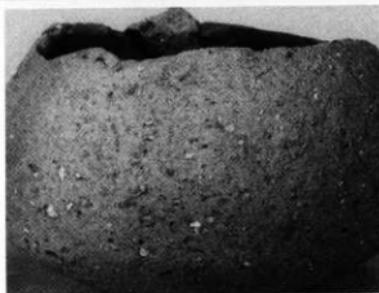
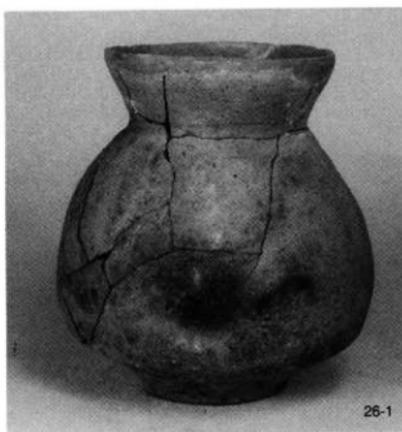


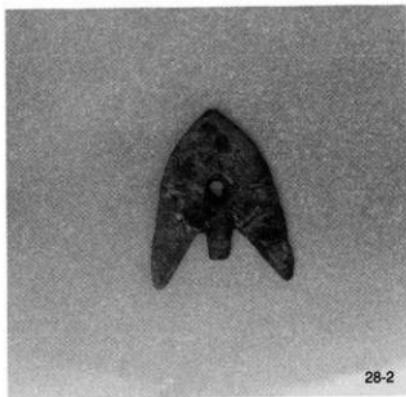












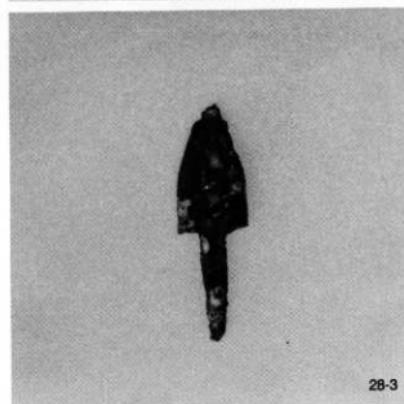
28-2



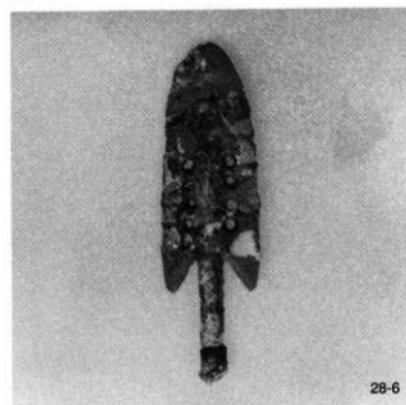
28-1



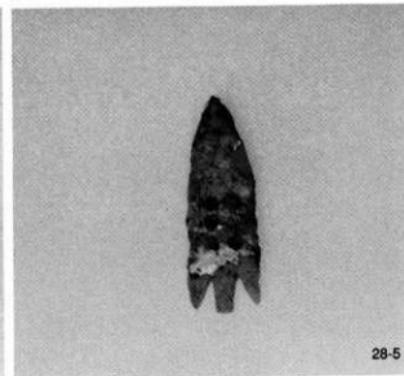
28-4



28-3

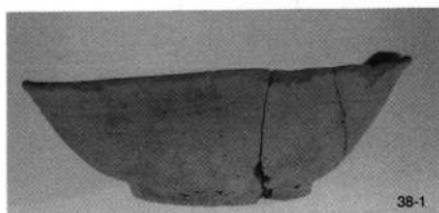


28-6



28-5

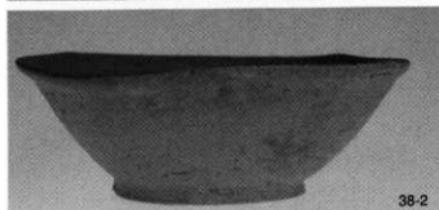
図版 33



38-1



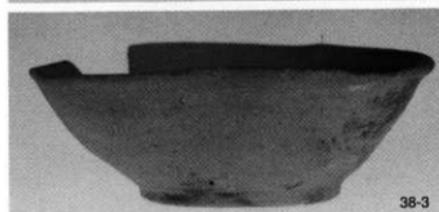
38-5



38-2



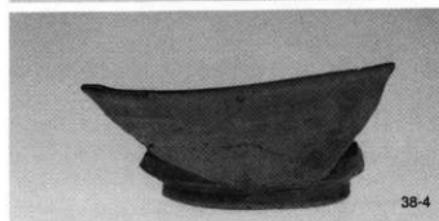
38-6



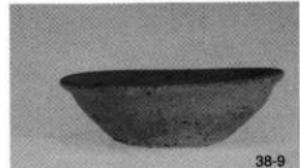
38-3



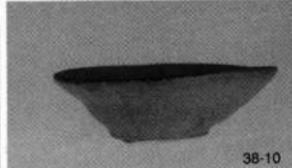
38-7



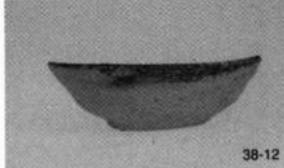
38-4



38-9



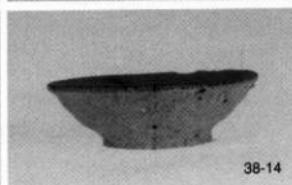
38-10



38-12



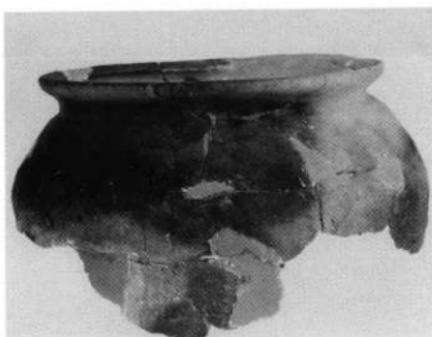
38-13



38-14



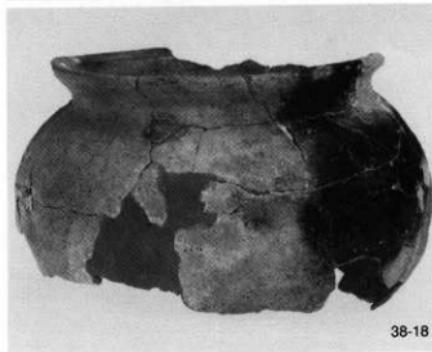
38-16



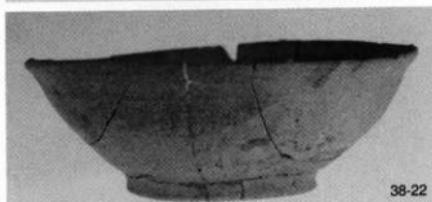
38-17



29-20



38-18



38-21



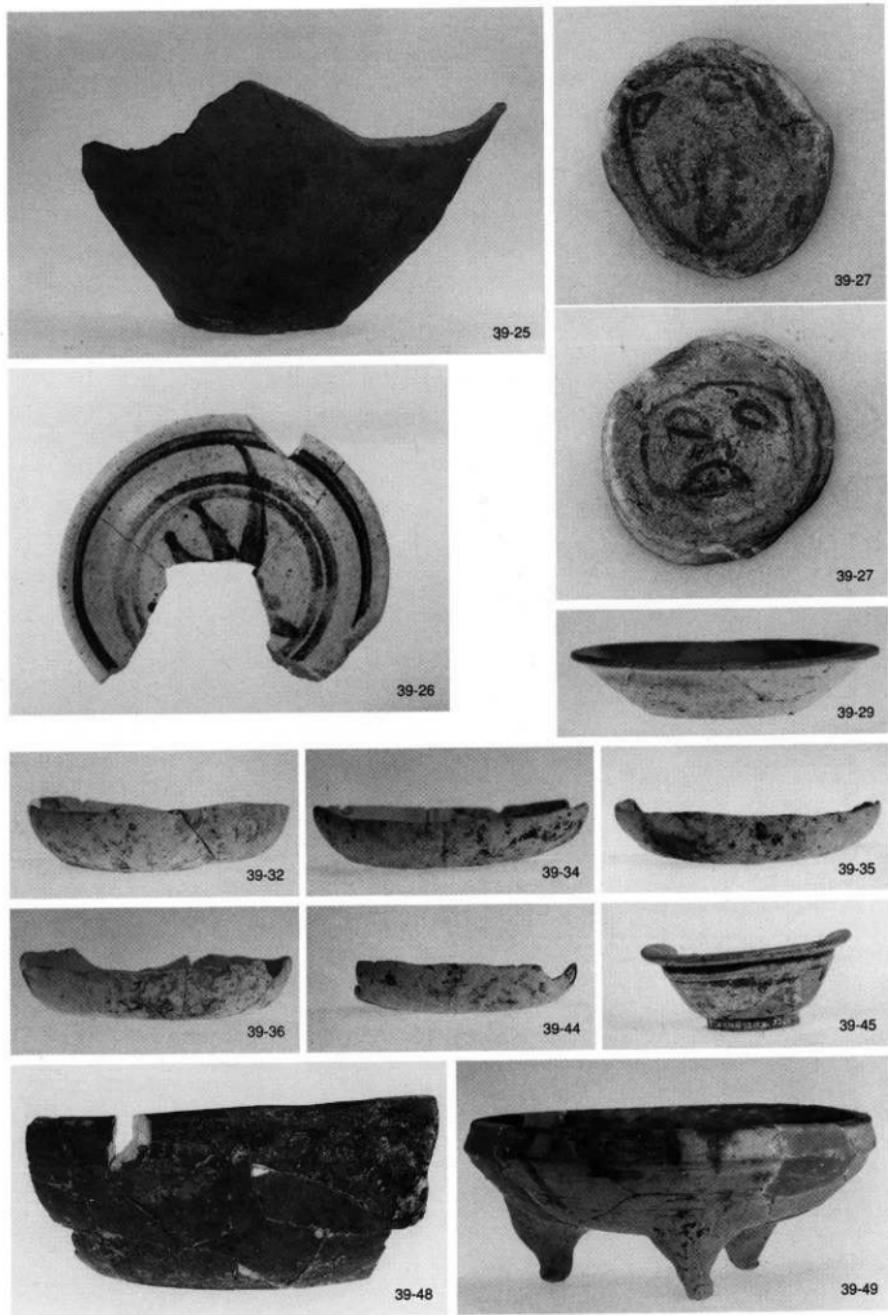
38-19

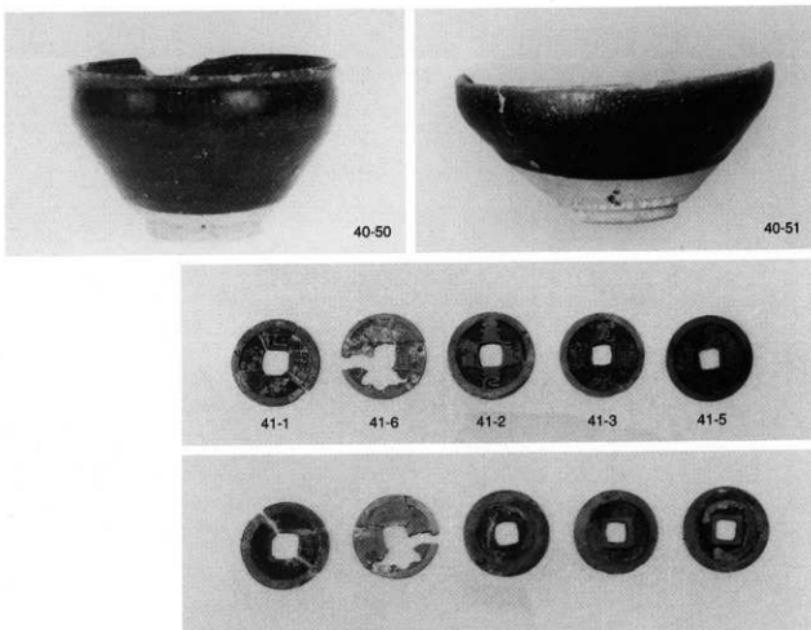


39-23



39-24





報告書抄録

ふりがな	つばきのいせき						
書名	椿野遺跡Ⅱ						
副書名	昭和58・59年度都田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第6号						
編集者名	足立順司・佐野五十三						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL0543-67-1171						
発行年月日	1985年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つばきのいせき 椿野遺跡	静岡県 浜松市 都田町		34° 48' 50"	137° 42' 34"	19831117 ~ 19840313 19840713 ~ 19840911	770m ²	河川改修 新規建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
椿野	集落墓	弥生後期	土杭溝 方形周溝墓	弥生土器 土師器 銅鏡6 紡錘車1 鉄製品			
	集落	中世 ~ 近世	掘立柱建物跡 溝 井戸跡	須恵器 山茶碗 土師器 陶磁器 古錢	掘立柱建物跡 と井戸跡・溝		

椿野遺跡Ⅱ

昭和58～59年度都田川河川改修工事
(浜松地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月25日

発行所 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三創
静岡市中村町166番地の1
(054) 282-4031